
GANGSTA.
ギャングスタ
Death of anosmic stray dogs
鼻の利かない野良犬の死に様
河端ジュンー
原作=コースケ
新潮文庫
nex

○新潮社の電子書籍:「Shincho LIVE!(新潮ライブ!)」

ttp://www.shincho-live.jp

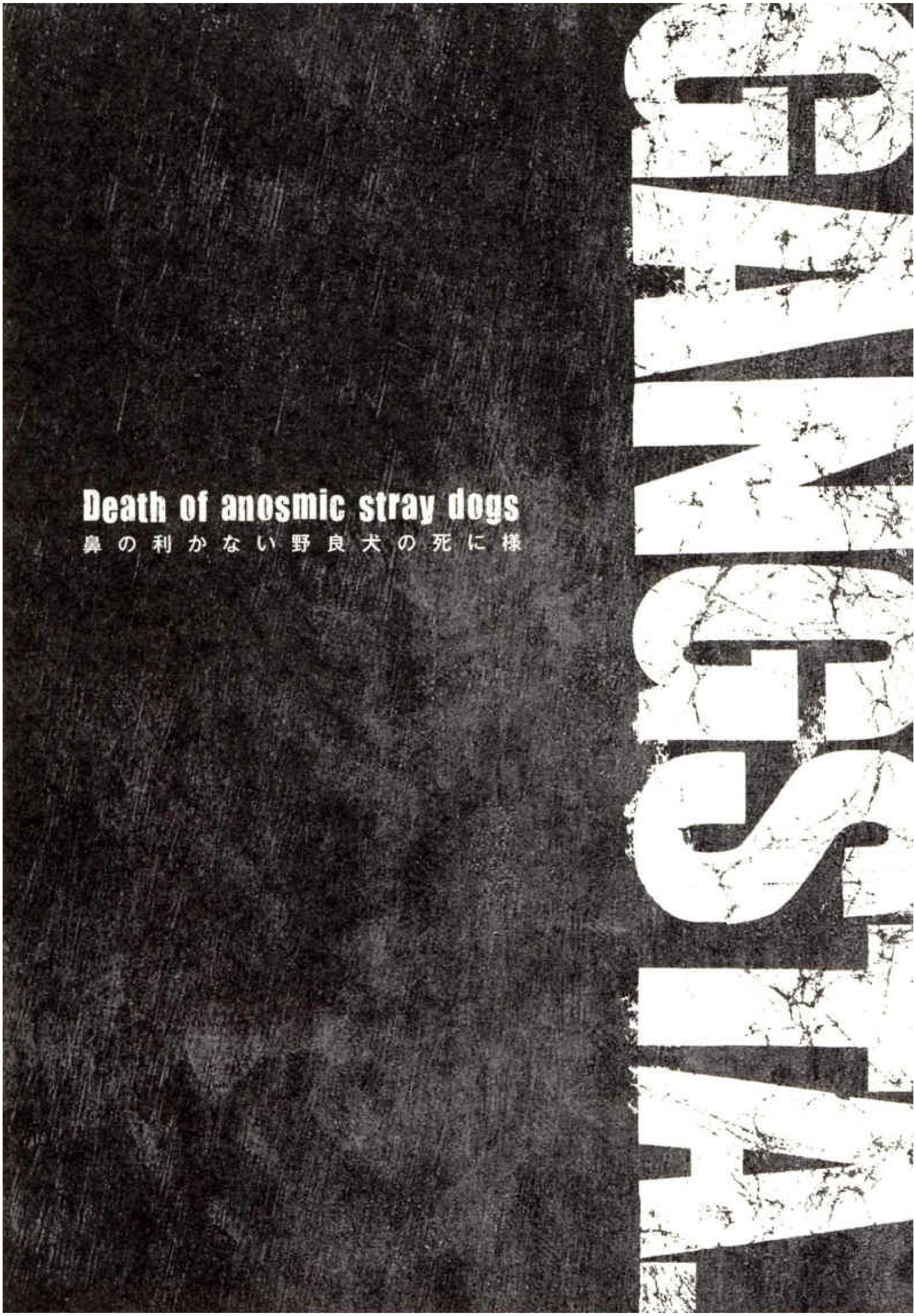
○新潮社の書籍:「新潮社ホームページ」

ttp://www.shinchosha.co.jp

GANGSTA. ―オリジナルノベル―

河端ジュン一
コースケ／原作

ONTENTS


GANGSTA
Death of anosmic stray dogs
鼻の利かない野良犬の死に様

Prologue

彼との生活は二週間と一日だった。

だいたいそれくらいだろうと予想はできていた。私は私について深くを知らなかったし知ろうとも思わなかったけれど、この身体（からだ）がそこで終わることは察していた。

正確にいえばもってあと二週間という見立てだったから、一日おまけがもらえたともいえる。誰から？それも知らないし、知りたいとも思わない。

でもともかくその一日で、私は彼らにひとつの依頼を遺（のこ）すことを決めた。

裏路地は湿っている。

唾液（だえき）、血液、精液、涙、吐瀉物（としやぶつ）、ビンがかち割られた安いウィスキー、そのほかの表通りが隠していたい様々な淀（よど）み。そういったものが詰め込まれ、ぶちまけられて、いつだって湿り気を帯びている。

あの夜、私は湿った石畳に右側の頬を押しつけて、できるだけ息を殺していた。私自身も鼻から流れる血で裏路地を濡（ぬ）らしながら。

その時点では、私は翌朝に陽が昇るまでに命を落とすだろうと考えていた。特別に悲しいという気はしなかった。名前も知らない、どこにだってあるこの裏路地で、だれにも知られないまま息絶えるのはそう悪くない結末に思えた。少なくとも、ほかの想像できるどの結末よりもまともではあった。

私は目を閉じていた。

少し眠ったのかもしれないし、頭が朦朧（もうろう）としていて上手（うま）く時間の流れを感じられなかっただけなのかもしれない。それはわからない。

ともかくそのまま手放そうとしていた意識を、私が再び手繰り寄せたのは、声が聞こえたからだった。

「お嬢さん。こんなとこで寝てたら風邪ひくよ？」

思わず身体が震える。

私の最良の死にざまさえ――この程度の最良さえ――奪われるというのだろうか。睫毛（まつげ）すら重く感じた。どうにか瞼（まぶた）を上げると、男の顔があった。

左目に眼帯をしている、知らない顔だ。知らない顔は警戒しなければならない。とはいえ知っている顔なら絶望することになっただろうから、まだましだ。

私にとって信頼できる人物は、たったのひとりしかいない。この世界にひとりだけ。彼でないのなら、もうあとは同じだ。抗(あらが)わなくてはならない。

いまさら、まだ？

それは悲劇というよりは喜劇だったが、ともかく私は千切れそうに痛む腕をつき、水をたっぷりと吸った布袋みたいに重い身体をひきずって這(は)う。この男から、ほんの数インチでも遠く離れなければと、石畳でもがいた。

「そんなに警戒するこたぁないでしょ。どういう事情か知らねぇけど、大丈夫、噛(か)みつきゃしないよ」

男の声もまた、湿り気を帯びていた。

私が激痛に耐えながら移動する一〇インチを、彼は半歩で無意味にする。壊れかけの身体に逃げ場はない。私はせめてもの抵抗として顎(あご)を上げ、彼を睨(にら)む。そこで初めて彼の顔をまじまじと確認する。後ろで雑に結っている、長いアッシュブロンド。その一部が頬にかかり月の光を透かしている。綺麗(きれい)だ、と素直に感じた。だからといってもちろん、それがなにかの救いになるわけでもないけれど。

「ただ、ここで死なれちゃ困るんだよね、お仕事の都合上。お店の前なのよ、ここ」

うっすらと髭(ひげ)を生やし、軽薄そうな笑みを浮かべているその表情の奥に、悪意があるのかはわからない。見定めようとしている間に、彼の右腕が私の太腿(ふともも)の下に回る。あ、と声をあげると同時に、役立たずのぼろ布は抱え上げられた。

私はどうにか身を捻(よじ)り、彼の首筋の辺りをひっかく。人差し指と中指。彼の皮膚に二本の傷が入り、どろりとした血が流れる。その血は、月光の下では真っ黒に見えた。

痛くないはずもないが、彼は表情を変えない。軽く頬を緩めたままだ。

「私を、どうするの？」

睨みつけて尋ねると、彼は意外そうに目を丸くした。一拍おいて、微笑(ほほえ)む。

「へえ、かわいい声してんね」

「質問に答えて」

私を抱えたまま、彼は歩き出す。ゆっくりと、だが大きな歩幅で。

「そう邪険にしないでよ。俺はウォリック。お嬢ちゃんは？」

「なにが目的？」

ウォリックと名乗った男は、ふう、と息を吐いてまた微笑む。

「とりあえずお店の前からどいてもらうことかな」

「なら、もういいでしょう。離して」
「他人の家の前に放り出すわけにもいかないでしょ。それに、お嬢ちゃんの声はチャーミングだ。もうちょっとお喋りしたいな」
　彼の真意は測りかねる。殺すことが目的ならとうに済ませているはずだ。
　組が生きたまま私を捕えることをこの男に依頼したのだろうか。それにしては拘束がないのは不思議だし、車の一台くらい用意していそうなものだ。そもそも銃口がこちらを向くことさえないなんて、あり得るだろうか。
　この手の駆け引きは不得手だ。経験がまったく足りていない。だが弱みを見せるわけにもいかない。私は唾を飲みこむ。その音が彼に聞こえていないか不安になる。
　どうにか言う。
「じゃあ、貴方のお店に案内して」
　とにかく組に連れ戻されることだけは避けたい。相手がこの男ひとりであれば、まだ逃げられる可能性はある。身体を休めて、ほんの五秒間でも手足をまともに動かせればどうとでもなるはずだ。
　彼は足を止めないまま、こちらを見下ろした。
　月明かりの逆光で暗い顔が、屈託のない笑顔を浮かべる。
「もちろん。デートのあとでね」
　その表情に、一瞬見とれたのは事実だった。
　ただどちらかというと限界を迎えつつあった疲労が理由で、私は彼の腕の中で身体を弛緩させる。
　二分だけ、休もう。それで少しでも力を取り戻して、この腕を振りほどこう。
　そう決めたとたん、まぶたが耐え難い重みを帯び、私は目を閉じていた。睡魔が身体を支配していく。まさか、と抵抗する気持ちだけはある。しかし結局、知りもしない男の腕の中で、私は眠る。己の幼さを呪う。
　暗闇の中で、彼の腕の温度と、匂いだけを感じていた。女物の香水の匂い。ひとつではない。いくつも、いくつも。この男の身体にはそれらが重なって染み込んでいる。なんだか悲しくなる匂いだった。
　深い泥沼のような眠りに沈む中で、私は思い出す。
　ウォリックが笑顔を浮かべたとき、彼が見つめていたのは私の顔ではなかった。
　鎖で胸元に吊り下げた、一枚の、金属製のつまらないタグだった。

夢は見なかった。

次に意識をとり戻したとき、私は純白のシーツがかかった、簡素だけれど清潔なベッドに横たわっていた。窓からは二度と目にすることがないはずだった朝日が射(さ)しこみ、セキレイのさえずりさえ聞こえた。

いつになく気分がよくて、そのことで軽く混乱した。もちろん頭の中にはぎしぎしと軋(きし)むような痛みが残っているが、腕に力を入れるとそれが動き、足に力を入れるとそれが動く。私は深々と息を吐き出す。この身体は上手くすれば、あと二週間ほど持つかもしれない。そんなところだろうという気がした。

拘束はやはりない。部屋にはもういくつかベッドが並んでいるが、人はいない。今であればどうにか逃げ出せるかもしれないと思うが、同時に気づく。ここは少なくともあの組(ファミリー)とは関係のない場所だ。純白のシーツなんてものが、私を扱っていた組(ファミリー)にあるはずがないのだから。であれば、ここよりも安全な場所は、そうそう思い浮かばない。

他にはどうしようもなく、加えていうならどうしたいという案もなくて、私はじっと天井を見上げていた。

やがて部屋の片隅にある階段の下から、話し声が聞こえてきた。それは小さな声だったけれど、私にははっきりと聞きとれた。

「どうにもならない？」

こちらは、あの男――ウォリックの声。

「ならんな。違法に高濃度のセレブレを常習的に投与されていた痕跡(こんせき)がある。外見(そとみ)はそれほどでもないが、内臓がほとんど壊れている」

こちらは、聞き覚えがない。低く落ち着いた男の声だ。

「そっか。いつも悪(わり)ぃね」

「今度は生きた奴(やつ)を連れてこい」

「彼女はまだ、生きてるでしょ」

「なら、治せる奴だ」

「ん、そうする」

会話はそれだけで終わった。あとに、どちらのものかわからないため息が聞こえた。それから足音がひとりぶん、階段を上ってくる。

私は、ほんの一瞬だけ胸元のタグを握った。

正しくは私は、人間ではない。法的にいえば人間の一種ではあるけれど、やはり健常者(ノーマル)とは異質な

生き物だ。黄昏種（トワイライツ）と呼ばれる。

　足音が近づいてきて、私は目を閉じる。音は階段を上りきり、しっかりと床を踏みしめて、私のベッドの隣で鳴りやむ。

　そこに立っているのがウォリックだということは、匂いでわかっていた。

　彼は私に声をかけなかった。

　仕方なく私は、再び目を開く。

「起こしちゃったかな？」

　ウォリックは昨日見たのと同じ軽薄な笑みを浮かべている。

　私は頷（うなず）き、「ここは？」と尋ねた。

「病院だよ。テオっておっさんが、細々とやっている。魅力的な女の子を連れ込んでも、嫉妬深（しっとぶか）い大人たちに言いふらしたりはしない」

「私が、女の子に見える？」

　それは純粋な疑問だった。鏡と向き合ったとき、そこに映る顔は若く見つもっても三〇といったところだ。

　ウォリックは少しだけ首を傾（かし）げてみせる。

「声はまだ少女みたいよ。顔だって、少し大人びた女の子だ」

　苦笑する。顔つきと中身が釣り合っていないことは自覚していて、そのことを指摘されたような気がした。

「気分はどう？」

「悪くないわ。不思議とね」

「そっか。じゃあ行こう。退院の許可は貰（もら）ってる」

「行くって、どこに」

「うちの事務所。昨日、案内するって約束したでしょ」

　そういえば、そんな話をしたような気もする。

　私はシーツに右手をついて、どうにか身体を起こす。ウォリックが手を貸そうとしたが、それは無視して、足を床に下ろす。立ち上がろうと力を入れたとき、頭の中の激痛が膨れ上がって、思わず呻（うめ）き声をあげる。どうしようもなく、身体が崩れ落ちる。

　床に倒れ込むことを覚悟したが、その前にウォリックが私を支えた。彼は昨日と同じように私の身体を抱き上げる。今なら逃げ出せると感じたのは、やはり錯覚だったようだ。

「お嬢ちゃんは疲れてんだ。今は無理しない方がいい。すぐによくなるよ」

私は思わず微笑んでいた。この手の笑顔を自然に浮かべるのは、ずいぶん久しぶりだった。

「嘘(うそ)よ」

「ん、なにが嘘？」

「起きてたの」

ぼろぼろの私が言うのもなんだけれど、黄昏種(トワイライツ)は身体能力に優れている。階下の話し声を聞くことくらい、わけはない。

彼は答えず、静かな足取りで歩きはじめた。それから、しっかり時間をかけて煮詰めたスープみたいな、優しい声で言う。

「お嬢ちゃん、名前は？」

「名前？」

「昨日は教えてくんなかったから」

私が訊(き)き返したのは、そんなことが理由ではない。胸元にぶら下がったタグには、私の様々なデータが記載されている。名前なんか一行目に載っている。

ため息ではない長い息を吐き出して、私は答える。

「ソフィア」

それが私の、ほとんど唯一(ゆいいつ)持っているものだった。もうまともに動かない身体と、頭の中に居座る痛みのほかには唯一。

「よろしく、ソフィア」

とウォリックは言った。

死にかけの野良犬(のらいぬ)が最後に飼い主を見つけるように、悲惨な戯曲の結末に一幕だけ調子のいい安らぎが用意されるように、この朝から彼との生活がはじまった。

彼と過ごした二週間について、私が語るべきことはほとんどない。

実のところ私は、こぢんまりとした寝室のベッドに寝たきりで、彼の事務所の間取りさえ正確には把握できなかった。彼は私にパスタを作ってくれたけれど、日々肥大化していく頭痛のせいで、その味もよくわ

からなかった。

　事務所にはもうひとり、ニコラスという男がいるようだった。アジア系の、黒髪で、獣のように鋭い目つきを持つ男だ。背は高くないががっしりとした身体つきで、岩から彫り出した精巧な戦士の彫刻のように、私には見えた。ウォリックはその男のことをニック、あるいは相棒と呼んでいた。

　私にはすぐに、ニコラスが健常者（ノーマル）ではないとわかった。同類は、なんとなく臭（にお）いで判別がつく。首から下がったタグを確認するまでもない。その男は私には興味がないようで、結局、一度も言葉を交わすことはなかった。

　ウォリックはしばしばどこかに呼び出されて、そのたびに女物の香水を上塗りして帰った。私はどうしてもその匂いが好きになれず、それが唯一、彼の元で過ごした二週間での好ましくない出来事だった。

　私の最期（さいご）は、まとめてしまうとこうなる。

　――ソフィアはその悲惨な生涯の終わりに安らかな寝室を与えられ、幸福と共に永眠した。

　もしこの一文に書き洩（も）らしがあるとするならば、二週間と一日目、つまりは私が死ぬ日に残した、たったひとつの依頼だけだ。

　ウォリックとニコラスが便利屋を営んでいることは、隣の部屋から漏れ聞こえてくる彼らの会話でわかった。それは奇妙な話だった。聞こえるのはウォリックの声だけで、ニコラスは言葉を発しない。でもウォリックの独り言というわけでも、一方的に喋り続けているというわけでもない。まるで電話の声を聞いているように、一方しか聴こえないけれどそれが会話として成り立っていることは読みとれた。

　ともかく、彼らが便利屋だと知った私は、命を落とす前の一週間ほど、ずっとひとつの依頼について考えていた。

　私は今、死を迎えようとしている。

　これまで想像さえできなかった、穏やかな死を。

　まさかこれ以上なにかを望むほど、私が欲深いとは思わなかったけれど、願望というのは際限なく湧（わ）き出てくるようだった。心が安らぎ澄んでいくとともに、剝（は）ぎ落とされた汚れの下からひとつの傷が現れた。私はその傷を癒（いや）したいと願った。

　ウォリックはそのとき、薄いスープを手に、ベッドの隣に座っていた。スプーンをこちらに向けて、「あーん」と言うので、私は口を開けてみたけれど、上手く呑(の)み込むことができずに顎を濡らしただけだった。その一口で私は首を振った。

「ねぇ、ウォリック」

　と私は言った。少なくともそう言ったつもりだった。

　彼は私の口元に耳を近づけた。

　苦労して、私は続けた。

「便利屋なんだってね」

「うん」

　ウォリックは自分でスープをひと口食べる。それから「ちょっとしょっぱいね」とつぶやく。

「あなたに依頼があるの」

「そう」

「あと三年、私をかくまって」

　ウォリックは皿を、ベッドの枕元(まくらもと)に置いた。おそらくそうしたのだろうと思う。はっきりと動作が見えたわけではなかった。

　ゆったりとした声で、彼は「三年」と反復する。骨董品(こっとうひん)の壺(つぼ)かなにかの傷をひとつひとつ確かめるように。

　ピントを合わす機能が壊れてしまったのだろうか、ふと視界が霞(かす)み、彼の顔がよく見えなくなった。確か命を落とす前に、「もっと光を」と言った劇作家がいた。その気持ちがよくわかった。

　なんにせよ、彼はほほ笑んでいたのだろう。いつものように。

「俺ちゃんたち、安くねぇよ」

「コートの、内ポケットに」

　そこで一度、息継ぎをする必要があった。

「ネックレスが」

　高いものではないはずだ。装飾品には詳しくないし、プレゼントされたものだから値段なんてわからないけれど、おそらくは。

　コートは私の身体を覆(おお)う毛布の上に広がっていた。ウォリックに頼んでそうして貰っていた。彼はそのコートのポケットから、翼を模(かたど)った銀色のネックレスを取り出した。正確には彼のシルエットがそういう動作をするのが、どうにか見えた。

　彼にネックレスの価値がわからないとも思えなかったけれど、彼は「悪くない」と確かに言った。

「いいよ。引き受けた」

　その声に安心して、私は目を閉じる。もう二度とまぶたが持ち上がることはないと知っていた。

　頭に何かが触れる。きっと彼の手だろう、と私は想像する。もうすでに、その熱も匂いもわからなくなっていたけれど。彼が撫(な)でる髪も艶(つや)を失っているはずで、そんなことが気にかかった。

　目を閉じたまま、寝言のように、私は言う。

「焼くときは、この服のままにして」

　私の醜い身体を見られたくない。

　ウォリックは、その言葉には答えなかった。あるいは私は喋った気になっただけで、本当はもう声を出すことさえできなかったのかもしれない。でも不思議と、私の言葉は彼に伝わったような気がした。

　幼い子供を寝かしつけるように、ウォリックは囁(ささや)く。

「今日はもうおやすみ、ソフィア」

　うん。

　おやすみ。ありがとう。

　声にならなかったと、今度ははっきりわかった。私はほほ笑んだつもりだったけれど、それも上手くできたのか、わからない。

　こんな風にして、私の二週間と一日は終わった。

#1

左手で女の耳元を優しく触りながら、右手で胸を乱暴に摑(つか)む。脂肪の塊が容易(たやす)く形を変え、ありふれた温度が指先を包む。首筋に歯を立てると女が微(かす)かに声を漏らす。少しだけ汗の味。それから化粧品の味。前者はそうでもないが、後者はひどく不味(まず)い。オンスあたりの値段はキャビアよりも高いはずだが。湿っぽい息が部屋に満ちて窓に雫(しずく)を張りつける。高級なベッドが安っぽく軋(きし)む。口づけで女の視界をふさぎ、時計を確認する。もう一五分ほどこのお遊戯を続ければ、報酬に見合った労働といえるだろう。ウォリック・アルカンジェロは帰り際(ぎわ)にできるだけ辛いワインを一本買おうと決めた。

きっちり一五分後に、女は獣のような叫び声を上げる。彼女は叫ぶ言い訳が欲しかっただけなのだろう、きっと。誰もが悲鳴を上げたがっている。でも独りで叫ぶと奇人のようで、まだもうしばらく真人間の皮を被(かぶ)っていたいなら叫ぶ言い訳を買うしかない。そう考えて初めて、この女が愛(いと)おしいと思えた。

悲鳴の余韻が消えるまで、ウォリックは女の柔らかな肌を摑んでいた。

それから皺(しわ)になっていたシャツを着なおし、長いアッシュブロンドを後ろで結う。

けれど、なかなか上手(うま)くいかない。ベッドに横たわった女が、くすくすと笑いながら人差し指でそのブロンドをいじっているせいだ。少し乱暴に——この力加減にはコツがいる。相手がそこに、愛情があるのだと錯覚する具合でなければならない——白い手を振り払う。

「綺麗(きれい)な髪ね」

と女が言う。

「今月のお小遣い、上乗せしてくれんならもう少し触ってもいいよ」

とウォリックは答える。

「残念だけど。今日は旦那(だんな)が帰ってくるから」

「そう」

ベッド脇(わき)に置かれた濃い木彫の丸テーブルには、賢そうな男の描かれた紙幣が四枚、餌(えさ)のように置かれている。それを摘(つ)まんでポケットに突っ込む。

「またいつでも買ってね、マダム」

女が充分満足してしまわない程度の笑みを浮かべて、ウォリックは部屋を後にした。

光沢のある赤煉瓦(れんが)を積みあげた邸宅は、脂(あぶら)ぎった煙を屋根から吐き出している。門をくぐって敷地を出たところでウォリックはようやく、すべての演技をやめた。

女性を慰める技術において、ウォリックはプロフェッショナルだと自覚している。腕のいいガンスミスが指

先だけで銃のすべてを知るように、ウォリックにも女の構造がわかる。才能というよりは後天的な努力によるものだが、ある種の女に好かれやすい顔立ちと髪質だけは才能かもしれない。才能はひとつ少ないよりもひとつ多いほうが危険だと誰かが言った。とはいえ今のところ、あって困るものでもない。
　ウォリックの本業はパートタイムで女に尽くすことだ。しかし、今夜は別の仕事がまだ残っていた。
　そちらの仕事では便利屋と名乗っている。
　便利屋とジゴロの違いはなんだろう、とふと考える。
　どちらも基本的には、客の欲求を一時的に満たす仕事だ。叫び声を上げたいなら叫び声を上げさせ、叫び声を聞きたいなら叫び声を聞かせる。どちらも素晴らしく誇り高い仕事で、この街には不可欠だ。不可欠だから大量生産されて、使い物にならなくなればすぐに代わりが見つかるところまで変わらない。
　それからふと、ソフィアを思い出した。ソフィア自身がどうというよりは、彼女に似た境遇の、別の女性を思い出したことがきっかけだったが。
　この街じゃあソフィアのことも、大量生産された悲劇のひとつだ。
　首筋を撫(な)でて、ほんの数歩進んだだけで、ウォリックは彼女を忘れる。記憶から抹消するわけではないが、深いところに沈み込んで意識には上らない。
　目の前には仕事があるし、彼女を焼いてからすでにひと月ほど経(た)っている。

　ちょうど陽が沈むころだった。
　ウォリックは、表面だけは小奇麗な大通りの角を曲がり、そこからすぐ先の、細い裏通りに入った。この街には道が細くなるほど増す臭(にお)いがある。吐瀉物(としゃぶつ)を煮詰めて気化させたような悪臭だが、慣れたといえば慣れた。
　すぐ先に、目立つ人影が立っていた。彼は薄汚れた壁に描かれたグラフィティ・アートに背を預けている。
　ウォリックはそのアジア系の筋肉質に声をかける。
「お待たせちゃん」

ニコラス・ブラウンは短い黒髪に鋭い目の男だ。黒い七分袖(そで)、カーゴパンツという軍人じみた恰好(かっこう)を好む。洒落(しゃれ)っ気がないという意味だ。

白色(はくしょく)と黒色(こくしょく)が多いこの街では、彼の身の丈は女と同じかそれ以下しかなく、ウォリックとは頭ひとつ分ほどの差がある。腰から下げた長い日本刀も、低身長を際立(きわだ)たせている。

『臭(くせ)ぇ』

と、彼は不快を隠そうともせず鼻を摘まんでみせる。

ニコラスは喋(しゃべ)らない。まったく喋れないわけではないが、極力喋ろうとしない。聴覚を失っていることが原因だ。とはいえ読唇(どくしん)術と手話で意思疎通(そつう)できるため、ふたりの間に不便はない。

彼と裏通りで待ち合わせていたのには理由がある。

黄昏種(トワイライツ)は被差別種だ。

少なくない数の人間にとって、彼らは「力の強い家畜」で、法的にも首から特別なタグをぶらさげることが義務づけられている。だから日常的にはタグ付きと呼ばれることのほうが多い。

事実関係だけでいえば、黄昏種(トワイライツ)はかつての戦争で身体能力増強のために薬漬けにされた人間の子孫にあたる。その影響で、異常な身体能力と人間離れした五感を持つ。ニコラスは特に力が強く、目がいい。一方で聴覚は機能しない。これは代償と呼ばれる、彼ら特有の肉体の変調によるものだ。彼らは特別に優秀な身体(からだ)を持つ代わりに、なんらかの代償を差し出している場合が多い。

それでもなお明らかに一般的な人間よりも屈強な彼らが、黄昏(たそがれ)なんてか弱い名前で呼ばれるのは、その寿命が極端に短いことが理由だ。平均で三〇歳少々とされるが、そこまで生きるにもセレブレという薬物を日常的に服用する必要がある。とはいえセレブレ自体も強い副作用を持つため、黄昏種(トワイライツ)が短命である一因にもなっている。毒を食わなければ生きられない、生まれながらにして病んだ生き物。だから彼らに対して、一般的な人間は健常者(ノーマル)と呼ばれる。

人間は自分よりも強い生き物を憎悪(ぞうお)し、弱い生き物を見下すのだろう。黄昏種(トワイライツ)はその両方を兼ね備えているわけだ。強く強く憎まれ、徹底的に見下されることが運命づけられている。

馬鹿馬鹿(ばかばか)しい話だ、とウォリックは思う。

だが馬鹿が集まれば、まともな方が馬鹿になる。馬鹿の集団に馬鹿だと大声で叫ぶほど馬鹿なことはない。そんなもんだと割りきることには慣れている。

表通りは健常者(ノーマル)が歩く道だ。黄昏種(トワイライツ)が突っ立っていて良いことはない。余計なトラブルを避けるために、悪臭くらいは我慢してもらうしかない。

「俺はいい匂(にお)いだろ？　高(た)っかい香水を散々こすりつけてきたんだから」

　ニコラスは、右手の親指で鼻をなするように触り、次に人差し指で宙にバツに似た形を描く。それからウォリックを指した。――『そいつが臭ぇって言ってんだよ』。

「仕方ないでしょ。お仕事なんだから」

『洗い流してこいよ』

「やだよ。客の家でシャワーなんて恥ずかしい」

『折りたたんで便器に突っこんでやろうか』

「二度手間じゃない？　どうせすぐに鉄臭くなるんだから」

　ふたり、並んで歩き出す。

　便利屋はなんでもする。

　まあ、だいたいはなんでも。

　宅配、ペンキ塗り、ゴミ掃除、正義の味方、悪の味方。後ろのふたつはほとんど同じ意味で、中には高額な依頼もある。でもしばしばシャツが汚れる。

　今日は安い方だった。

「ヨエルばあちゃんも大変だわな、あんなとこに店構えっから」

　ふたりが受けたのは厄介払いだ。無意味にでかくて元気な連中を邪魔にならないように折りたたんで、樽（たる）か木箱に突っ込む仕事だ。正義の味方はゴミ掃除もする。あいつらが知っている言葉といえば、だいたい同じ意味の単語が三つくらいなものだから、もちろん会話は成立しない。かといって背後の繋（つな）がりを知らないまま銃弾で穴を開けるわけにもいかない。どんなガラクタでも、自分の持ち物を他人に壊されただけで怒り狂う連中だっている。

『きりがねえ。脚を斬（き）りおとしゃそういうのは寄りつかなくなる』

「それで店の壁が汚れちゃったら困るでしょうが。街にたったひとつのタバコ屋には愛想よくしとくもんだ。それにばあちゃんの機嫌を損ねたらあとが怖い」

　タバコ屋、と口にしたせいだろう、脳がニコチンを求め始めた。ウォリックはジッポライターの石を二度擦（こす）り、ポールモールに火をつける。

　ニコラスと出会ったのは、もうずいぶん前だ。一二のときだから、二〇年と少々。ウォリックは自分を変わったと認識しているが、ニコラスを変わったとは思わない。身長は多少伸びたがチビのままだし、髪型も目つきもさして変化はない。タバコを吸わないのも同じだ。ウォリックに対する態度はいくらか砕けた。けれど本質的には、一貫して被雇用者であり続けている。

　ウォリックは落ちた灰を、革靴の底で踏み潰（つぶ）す。

　タバコ屋までは奥まった道を使うのが早い。三叉路（さんさろ）をまっすぐ進むと、少し開けた廃棄場に出る。腰

ほどの高さがあるコンクリートブロックに囲まれた、一〇ヤード四方ほどの更地。施設の跡地だが建設予定のないままに不法投棄の温床となり、今では電球の割れた照明器具、湿気を吸った家具、乾燥しきった酒樽なんかが散乱している。

　その入り口で、先を歩いていたニコラスが立ち止まった。ウォリックも足を止めて、左脇のホルスターを意識する。

　廃棄場を挟んで向かいにある道の角から、男がよたよたと歩き出た。ダウンジャケットはところどころが破け、綿毛が覗（のぞ）いている。脇には血が滲（にじ）んでいる。足元がおぼつかない様子で、ふたりの目の前にあったソファに倒れ込み、ぐったりとクッションに身体を沈ませた。

　ウォリックは苦笑する。

「酔っ払いかね」

『でなきゃジャンキーだ』

　当然違う。その傷が誰かに襲われたものだということくらいわかる。かなり手酷（てひど）くやられている。珍しくはなかった。この街じゃ、烏（からす）の餌になる死骸（しがい）は猫よりも大きなものが多い。気にしていたらきりがない。

　放って先を行こうとしたが、そこでさらに三人の若者たちが角から現れた。一様に黒いスーツを無理やり着崩している。どこかの組（ファミリー）に拾われたばかりだろうか。そういうファッションだ。

　真ん中にいたひとりが、ソファの上に捨てられているダウンジャケットに目をやった。

「なんだ、おっさんたち。そいつの知り合いか？」

　若者は首の刺青（トライバル）をことさら見せつけるように頭を倒し、声を低くして言う。威嚇（いかく）しているつもりだろうが、まだ野良犬（のらいぬ）の唸（うな）りの方が恐ろしい。

「いや」

　ウォリックは首を振る。笑いを堪（こら）えるように口元を押さえて。

「なら、さっさと消えな」

　若者はすっかりウォリックから視線を外し、ソファへと歩み寄る。

　ウォリックは口元を抑えたまま、隣のニコラスに囁（ささや）く。

「ニックちゃん、気づいてる？」

　脇から唇を読んだニコラスが堪えきれない様子で、はっ、と笑う。

『入れ違いにならなくてよかったな』

「幸運だ、日ごろのおこないってやつかな」

『街（ここ）が狭いだけだろ』

　ウォリックは肩をすくめる。半歩、前に出た。若者がぴくりと顔を上げる。優しく微笑（ほほえ）みかける。

「そこの彼の知り合いじゃあないけど、あんたたちには会えて感激だよ。大ファンなんだ、よければ握手してくんない？」
　首に刺青と、コーンロウ、左目の上に傷があるスキンヘッドのヒスパニック。ちょうどヨエルばあちゃんから聞いた「糞ガキども」の特徴と一致する。
　は？　と刺青が口を開いたところに、分厚い靴底が突っ込まれた。ニコラスだ。若者の顎がくすんだ夜空を見上げる。真後ろに倒れ、退色したゴミ袋に頭部を突っ込む。びりぃと安っぽい音がして、空き缶が散らばる。乾いた砂が舞い、さらに夜空をくすませる。
　ウォリックは片手で口元を覆い、軽く咳き込む。
「相棒。抜けがけはずっこいぜ？　ここは分けっこでしょ」
『三人いる。二で割れないなら一でいい。お前はそっちだ、相棒』
　ソファに倒れ込んでいるダウンジャケットを指さして、ニコラスが、にぃと笑う。ボールを与えられた犬みたいな表情だ。こいつには戦闘狂じみた面がある。そうしているときが、いちばん気楽なのだろう。
　ニコラスは素早く重心を落とし、地面を蹴る。消えた、と思ったときには既に空中だ。スキンヘッドとコーンロウは状況を呑み込めていない。その二人の背後に着地する。振り返り、ニコラスの胸元で揺れるペンダントに遅れて気づいたスキンヘッドが、ひ、と息を呑む。
「嘘だろタグ付き!?　なんでオレたちが――」
　その唇をニコラスは読まない。彼の腕に比べれば細い、男の首を乱暴に掴むと、顔面を足元に叩きつけた。鼻の骨がねちっこい音を立てて砕ける。ニコラスは勢いのまま、身体を半回転させ、コーンロウの髪を力ずくで手繰り寄せる。首の骨がごきりと鳴る。遠心力を加えて投げ、三ヤード離れた書棚にぶち込んだ。
「壊しすぎないでよ？　あとで弁償を頼まれっと困る」
　ニコラスが見ているとも思わなかったが、一応言った。
　それから、やっとソファのダウンジャケットに注意を戻す。
　暴力が似合わない、優男という表現がしっくりくる青年だった。買い手の多そうなかわいらしい顔つきで、年齢は二〇歳そこそこといったところだろう。体格も、不釣り合いに大きなダウンジャケットを着込んでいるせいでわかりづらいが、あまりしっかりはしていないようだ。横一直線に揃えた前髪の一部に、白いメッシュが入っているのが、無理に背伸びをする子供のようで笑えた。
「絡まれちゃったのかな、坊ちゃん。ママの電話番号は言える？」
　声をかけると、青年は両手で身を庇った。ソファにうずもれたまま怯えた様子でウォリックを見上げる。

「……誰？」
「こわーいお兄さん」
　とウォリックは微笑む。
「酷い目にあったね、痛むか？」
「大、丈夫、です」
　青年は腰を深くかけ直す。その動作さえぎこちない。脚の曲がった安楽椅子みたいだ。しかし、意外に呼吸は乱れていない。言葉は途切れがちだが、それはただ怯えているだけのようだった。傷はおそらく見た目ほど応えていない。
「ん、いい子だ。ほれ、立ってみな」
　ウォリックが青年の襟元を持ち、身体を引っ張る。彼は微かに顔をしかめる。
「あれ、やっぱ痛む？」
「いや、ちが……」
　青年はうつむき、右手で顔を覆う。目元と鼻を強く押さえているようだった。泣いているのだろうか。この程度のことで。
　ウォリックは意地の悪い笑みを浮かべる。
「落ち込むなよ、坊ちゃん。そうだ、良いところに連れてってやるよ。可愛い女の子が優しく慰めてくれるお店だ」
　テオ医院には、とびっきりの看護師がひとりいる。客観的に見て宝の持ち腐れだが、頻繁に利用するこちらとしてはありがたい。
　ウォリックは掴んでいた青年の襟からわざと手を離した。青年は後ろに倒れ、後頭部をソファにうずめる。彼の口から、わ、とうめき声が漏れた。
　ウォリックはけらけらと笑う。この街で生きていくにはあまりに虚弱に見えるが、他人に害意がないのは好印象だ。
　ニコラスの方に目をやると、彼はしゃがみ込んで倒れた若者たちのポケットに手をつっこんでいた。あいつらの財布が分厚いとも思えないが、小遣いくらいにはなるだろう。
「よう、ニック。ばあちゃんへの挨拶は任せたぜ」
　彼がこちらに注意を払っていた様子もなかったが、それでもウォリックの言葉は、きちんと見えたようだった。
『そういうのはお前の担当だろ』
　あからさまに面倒そうな顔をするニコラスに、ウォリックはいやらしく微笑む。

「ひとりだけで楽しんだ罰だよ。ばあちゃんだって、愚痴る相手がいつも一緒だとつまんないでしょ」
『お前は？』
「この坊ちゃんのエスコート」
　ニコラスは目を細め、青年の面構（つらがま）えを確認したようだった。顔をさらにしかめる。
『お前、ついにそっちのケが——』
「んなわけないでしょ。こいつより俺ちゃんのが可愛いし」
　ウォリックは肩をすくめた。声は出さず、口の動きだけでニコラスに伝える。
　——一応ね。このへんじゃ見ない顔だから。
　ウォリックは記憶力が良い。異常に、医学的な病名がついているほどに。バーの暗がりですれ違った客だろうと、ニュースに映る通行人だろうと余さず記憶の箱に整理整頓（せいとん）される。
　この青年に見覚えはなかった。
　例外にはたいてい事情があり、この街の事情はいつだって厄介だ。こいつがただ運悪く、三人のチンピラに絡まれただけならそれでいいが、もっと具体的な理由で襲われたなら、また話は違ってくる。ウォリックにしてみればタバコ屋のばあちゃんの機嫌を取りたかっただけだが、傍目にはふたりが、この青年を手助けしたように見えなくもない。
　ニコラスは獰猛（どうもう）な笑みを浮かべる。
『最近、運動が足りないと思ってたところだ』
「金になる運動ならいいけどね。俺ちゃんたち、プロフェッショナルだから」
『暴れられそうか？』
「どうかな。運次第」
『日ごろのおこないってやつだな』
「街（ここ）が狭いだけでしょ」
　四方を壁に囲まれた狭苦しいエルガストルムじゃ、少し歩けば厄介事にぶつかる。それが幸運か不運かは知ったことじゃない。

　なぜ病院のマークに十字架が使われるのだろう、としばしば疑問に思う。
　その形は死を連想させる。病院は人が死ぬ場所なのだろうか。確かにそうかもしれないな、とも思った。
　なんにせよテオの医院にも、下を向いた五角形の中に十字が描かれた看板がついている。八番街の、ヨエルばあちゃんのタバコ屋から少し北にある、こぢんまりとした二階建ての家屋だ。

扉を開くと、カルテかなにかを整理していたニナが顔をこちらに向けた。

「ウォリックさん！」

ニナはまだ一一歳の少女だが、看護師だ。年齢（とし）のわりに働き者で、腕も悪くない。すでに手術着を着たことさえあると聞いた。なにより、患者にも怪我（けが）や病にも誠実で、その点でウォリックは彼女を信頼している。

「こんにちは、ニナちゃん。今日も可愛いね」

この程度の軽口で、彼女は頬を赤らめる。ニナは本当に可愛らしい少女だし、そのことに自覚的でもあるだろう。けれどまだ自分の魅力を持て余している。看護師の技術をひととおり身に着けても、大人になれるわけではない。

ニナはウォリックの後ろに立つ、傷だらけの青年に視線を向けた。

「あの、そちらの方は？」

「ゴミ捨て場で拾ったんだ。名前は聞いてなかったな」

青年はずいぶん小さな声で、「ヨハンです」と答えた。まさか一一歳の少女にさえ緊張しているのだろうか。

「そ。よろしくね」

「……よろしく、お願いします」

メッシュの髪の隙間（すきま）から、ヨハンの怯えたような目が覗いている。あまり幸福な育ち方はしなかったのだろう。幸福な育ち方なんてものが、エルガストルムにどれだけあるのかは疑問だが。

その目をいつまでも見ているのも気の毒で、ニナに尋ねる。

「センセいる？」

「はい。すぐに」

ニナはリスかなにかのような歩調で、ちょこちょこと部屋の奥へと走る。ドアノブに手をかけて、押し開けようとしたところでちょうどその扉が開いた。わ、と小さな悲鳴を上げて、扉の向こうに立っていた白衣に顔からぶつかる。

テオ。眼鏡をかけた、髪の短い三〇歳ほどの男で、いつ見ても顔色が悪い。まず自分から診療しろよと言いたくなるが、それで長期入院ということにでもなればウォリックも困ってしまう。彼はとくに、ニコラスのかかりつけだ。

テオはバランスを崩したニナを睨（にら）むような目つきで一瞥（いちべつ）し、だが優しい手つきで彼女の両肩を支える。ニナが殺風景な床を再び両足で踏むころにはもう、彼の目はこちらを見ていた。

「お前は次から次へと、よくまあ飽きないな」

「友達が多くて。悪(わり)ぃね」
「仕事を増やすなとは言わないが、少し呆(あき)れる」
　彼は白衣のポケットに両手を突っ込み、足音を立ててヨハンに近づく。
「見ない顔だな」
「でしょ？　センセが気に入ってくれるかもと思って」
「いや——」
　テオが言葉を濁す。まさか図星だったというわけでもないだろうが、違和感があった。彼は絵画の真贋(しんがん)を見定めるような目でヨハンの顔を覗き込み、首筋に触れ、両手のひらを確認した。
「大した怪我じゃないっしょ」
　とウォリックは口を出す。
「それは俺が決める。君、ベッドへ」
　テオは部屋の主のように並ぶ、ふたつのベッドのうちの一方へ向かう。ヨハンは怯えた歩調でその後ろに続く。ニナは病院の入口の方に目をやって——ニコラスがいないか確認したのだろう、おそらく——すぐにふたりの後を追った。
　音をたてて閉められたカーテンを、ウォリックはしばらく見つめていた。意外に傷が深かったのだろうか。ダウンジャケットの下にある傷口を、しっかりと見たわけではなかった。
　ポールモールに火をつけようかと考えて、やめる。どちらかといえば時間を潰すために、右手の奥にある洗面台を借りた。手と顔を順に洗う。荒事はニコラスに任せていたのに、それでも汚れている。裏通りを舞う埃(ほこり)と砂、あとはこの街のどこにいてもこびりつく油汚れのような悪臭だ。
　洗面台の隣には、二階へと続く階段がある。その階段を見て、ソフィアを抱えたときの、不安になるような軽い身体を思い出す。意外に彼女のことは深く意識に残っているようだった。
　ウォリックは清潔なタオルで顔を拭(ふ)き、この傷のせいだ、と鏡を見た。首筋にはまだ、彼女にひっかかれた二本の傷跡が、うっすらと残っている。すぐに消えてなくなるだろうが、それまではしばしば、あの軽すぎる重みを思い出すのかもしれない。
　両手を鼻に近づけて、その臭いを確認していると、医院の前でエンジン音が停まった。聞きなれないエンジン音だ、と思った。
　ウォリックは入口に視線を向ける。来客のすべてを疑うのは馬鹿げているが、この医院は黄昏種(トワイライツ)に少し優しすぎるから、それで恨みを買うこともある。
「ウォリック」
　カーテン越しのテオが、威圧するような声を出した。

「そんなに騒々しい客じゃないよ。たぶん」

　車のドアが開き、閉まる音が聞こえた。ひとりぶんだ。

　テオ医院は一部のマフィアに目をつけられているが、それは個人的な恨みの類（たぐい）ではない。主にセレブレ——マフィアにしてみれば黄昏種（トワイライツ）を飼い馴（な）らす魔法の薬——を安く流し過ぎるから、それで目に障（さわ）る。組織として目障りなら、組織として潰しにくるだろう。ひとりだけではないはずだ。

「どちらにしろ手が離せん。お前が対応しろ」

「あいあい。今出ますよ」

　便利屋はだいたい、なんでもする。

　頼まれれば医院の受付だってする。

　ウォリックは入口に近づきながら、頬に張りついた湿り気のある髪を、耳にかけた。

　扉までもう二ヤードというところで、それが開く。

　立っていたのは、小柄な男だった。

「はいこちらクソ医院——」

　その男に向かって微笑みかけながら、ウォリックは彼を観察する。年齢はこちらの少し下だろう、三〇代に入ったばかりといったところだ。派手なストライプのスーツにキャメル色の革靴。誰が見ても趣味が悪い。だが安物でもないようだ。

「急患かな？　悪ぃけど今、先客がいるんだ。それにセンスをよくする薬が欲しいなら、もっと大勢女の子がいる店に行ったほうがいい」

　その男は顔色を変えなかった。

　つまらなそうな表情で、右手で尻（しり）をかきながら、かつかつと革靴を無駄に大きく鳴らし、ウォリックに歩み寄る。彼の後ろで、些細（ささい）な音を立てて扉が閉まる。

　ほんの一〇インチほど先にある、男の額をウォリックは見ていた。男はなにげない動作で、右手を握手のように差し出し、そこに握っていたコルト・ウッズマンの銃口を真下からウォリックの顎に添えた。その時には、ウォリックも左脇のホルスターからコルト・ガバメント——Ｍ１９１１を抜いて、男の左胸に押し当てている。

「なんだ、ずいぶん慌（あわ）ててんね。お腹（なか）が痛いんなら、トイレくらい使っていいぜ」

「ああ、そいつは助かるよ。クソ野郎を流すのに借りるかもしれねぇ」

「教えて欲しいんだけどさ。そのクソ野郎ってのは誰のこと？」

「オレの銃口の先でへらへら笑ってやがる野郎だよ。弟をどうした？」

　ウォリックは男をまじまじと見て、それから軽くため息をつく。

ウェーブ気味のセミロングヘア。薄い眉（まゆ）と薄いグレーの瞳（ひとみ）。上唇を剝（む）いて八重歯を見せる、独特の喋り方。彼も、知らない顔だった。

とりあえず身に染（し）みてわかったのは、厄介事ってもんは、どの方向からやってきても厄介事でしかないのだということ。スーツに派手なストライプを選ぶ男はあらゆる意味でセンスがないこと。そのセンスのない男はダリオという名前で、ヨハンの兄貴分を自称していること。

「はっは！　悪ぃな。ぼろぼろのヨハンをあんたが連れてっちまったって聞いたからよ、オレぁてっきり誘拐事件かなんかだと思ってよ」

小男の声は妙に耳に障るというのも、わかったことのひとつだ。

ウォリックはそのとき、強烈な拷問（ごうもん）を受けていた。

たいして速度を出せるわけもないエルガストルムで、男の助手席に座らされ、楽しげなお喋りを聞きながらドライブするという拷問だ。

拷問という意味では、なかなか徹底している。ダリオの愛車は、人々の眉間（みけん）に深く皺を刻み込ませるための発明だとしか思えない代物（しろもの）だった。おそらくフィアットの一種だろうが、その車種が本来持つ愛くるしさはことごとく刈り取られている。フロントガラスのすぐ下あたりが、横一線に大きくへこんだ奇抜なデザインのせいだ。闇（やみ）に閉ざされた深海で、みてくれという言葉の意味も知らないまま死んでいく深海魚を連想させるフォルムだ、とウォリックは思った。塗装はビビッドなヴァイオレットで、ボンネットには犬だか狼（おおかみ）だか、とりあえず茶色い生き物が笑うイラストが大きく描かれている。

ダリオは左手を軽くハンドルに添えたまま、右手でダッシュボードに転がっていたガラムから一本を取り出して咥（くわ）える。彼がその箱をこちらに向けたので、ウォリックは手のひらで断って自分のポールモールを一本抜いた。ダリオは器用に片手でブックマッチを擦って、二本のタバコにそれぞれ火をつける。

「さっきは失礼な真似（まね）して悪かったな、エリックさん」

「さんはいらない。年はそれほど離れちゃいねぇだろ。それと、ウォリックね」

「ああ、ウォリック。申し訳ねぇ、名前ってのがどうも苦手なんだ。そういう面倒なのは全部ヨハンに任せてる」

悪びれた様子もなく、ダリオは煙を吐き出す。彼の甘ったるい煙をポールモールで押し返す。狭苦しい車内でふたつの煙が混じり合い、窓の外へと流れ出ていく。

ダリオはゆるゆると煙を吐き出すタバコの先をこちらに向けた。

「いや、おかしいとは思ったんだよ。銃口を顎に添えられてもクールに笑ってるナイスガイが、あの優しいヨハンをどうこうするなんてよ」

「お前こそ。銃の意味を知らないのかと思ったよ」

この奇妙な――趣味が合うとも思えない男の車にウォリックが乗ったのも、それが理由だった。銃口を向けられて平静を装(よそお)う男は見たことがある。覚悟を決める男も、怒り狂う男も、場合によっては歓喜する男も。だがダリオはどれでもなかった。彼は心臓の一インチ隣に添えられたその深い穴を、まったく気にもとめていないようだった。頭から完全に、銃口の存在を無視しているように見えた。

そのいかれ方は、普通じゃない。少し、ほんの少しだけ、相棒を連想させる。

はっ、とダリオは大胆に笑う。

「ふたりが銃を向け合っているなら、鉛玉が飛び出ても死ぬ確率は半分だろ？　オレは五割のギャンブルになら負けたことがないんだ」

「五割じゃない。相打ちもある」

「ほう、なるほど。そいつは思いつかなかったな」

彼は感心したように頷(うなず)いている。

ウォリックは煙と一緒に、素直にため息を吐き出した。

「ギャンブル好きなんだろ？　ルーレットのゼロをなんだと思ってんの」

「ルーレットにゼロなんてあったか？」

「カジノの総取り。地獄の穴」

「まあ、そう細かいことは言うなよ。オレたちはこうして出会ったんだ。ツイてるぜ、ウォリック」

「ツイてる？　どこが」

「ヨハンを助けた。次はオレが、あんたを助けてやる。酒だって溺(おぼ)れるほど飲ませてやる」

「金もねぇのに？」

「これからできる」

テオの医院で、ヨハンを助けてくれた礼に奢(おご)らせてくれ、とダリオは言いだした。次の言葉は「カジノはどこだ？」で、要するに金がないからこれから稼ぐということのようだった。もちろん馬鹿げた話だが、その男の隣に座っている俺の方がより馬鹿げてるんじゃないか、とウォリックは苦笑する。まあ、この男を医院に留めておくよりは正しい判断だったろう。

「次、右ね」
「オーケイ」
　ウォリックの指示に従い、ダリオがハンドルを切る。騒々しい言動に反して、運転は意外なほど丁寧だ。
「そこの、タバコ屋の前で停めてくれ」
「切れたのか？　オレの好きに吸っていいぜ」
「お前の煙は甘すぎる。それにね、こう見えて俺ちゃん注意深いのよ。タバコはそうそう切らさない」
「じゃあなんだ、あんなちいせぇ店がカジノだってのか？」
「ヨハンの恩人に奢りたいんだろ？」
「ああ。オレは嘘をついたことがないんだ」
　タバコ屋の前で、おそらくは史上最悪のフィアットが停まる。
　ウォリックは親指で、窓の外を指した。
「なら、相手はあっちだ」
　親指の先には、ヨエルばあちゃんの愚痴を聞き流す仏頂面（ぶっちょうづら）があった。

　ダリオは本当に嘘をつかないようだった。
　彼は金を持っていなかった。金どころか財布さえ持っていなかった。
　ウォリックは彼に、女の叫び声を聞いた報酬を貸し与え、彼はそれを瞬（またた）く間に四倍にした。ダリオはカジノに入ってまず、一〇分ほどバカラのテーブルを眺めていた。何かを分析する様子は別段なく、ただウォリックと馬鹿話をしていただけだ。しかし、それから席について二ゲーム。いきなり全額をプレイヤーに賭（か）けて倍にし、さらに次でそれを倍にした。以上、終了。
　裏通りにある、カウンターとテーブル二つだけの小さなバーに入り、ウォリックは貸していた四枚の紙幣をダリオから受け取った。なんだか騙（だま）されたような気分で、それをひらひらと宙で躍らせる。
「本当に強いんだな、ギャンブル」
「ああ、負けたことがねぇ。大事なもんは、みんなギャンブルで手に入れたんだ」

「大したもんだ。ならもっと稼げばいい」

「オレは物を持ち歩くのが嫌いなんだよ。タバコと銃だけで充分だ」

「そいつは勿体(もったい)ねぇな。金がありゃ、表のイカした車も買い直せるんだぜ？」

「どうして最高の車を買い直す必要がある？」

　ダリオは本気であのヴァイオレット・モンスターが最高だと思っているようだった。人には様々な趣味嗜好(しこう)がある。車のセンスが悪いくらいで文句を垂れることもない。もう助手席に座らされることもないだろう。

　ウォリックとダリオはそれぞれ銘柄の違うウィスキーで乾杯する。隣でニコラスは、ペリエを舐(な)めるように飲んでいる。彼はウィスキーボンボンで酩酊(めいてい)できるほど効率的なアルコールとの親和性を誇る。

　ウォリックはオールドパーのロックに口をつけて、今夜はワインにしようと決めていたことを思い出した。だが飲み始めてしまった以上、仕方がない。極端に照明を落としたバーに、ワイングラスが似合うとも思えない。

　信じられないことにボウモアなんてものを選んだダリオは、一口で顔をしかめて「なんだよこれ不味(まず)いな」とぼやく。初めてウォリックとの好みの一致をみせたわけだが、なら注文するなよと言いたかった。

　テーブルにはマルゲリータだとか、ミモザサラダだとか、エスカルゴのアヒージョだとか、そのオリーブオイルに浸して食べるためのチュロスだとかが並ぶ。ウォリックはそれほど空腹でもなかったが、飲めないニコラスを無理につき合わせている形なのでそちらへの配慮だ。彼はゆっくりと、だが確実に、ゾウの行進のようにそれらを処理していく。

　ダリオはといえば、ボウモアはテーブルの脇に避(よ)けて新たにヴェネツィア・モヒートなんて似合わないものを注文し、だがそちらも特に味わいもせずにニコラスの腰にある日本刀に夢中だった。

「おいおい、なんだこいつがサムライ・ソードってやつか？　なあちょっと抜かせてくれよ」

　マルゲリータをかじる合間に、ニコラスがこちらにメッセージを送る。

『邪魔だ。引きはがせ』

「自分でやれよ、それくらい」

『今日は充分働いた』

「健常者(ノーマル)をたった三人だろ？」

『いや。本当の依頼は、ばあさんの愚痴をきくことだった』

「そいつはお疲れ。同情するよ」

　ふたりのやりとりを見たダリオは、興味の対象を日本刀からニコラス本人に移したようだった。手を小刻みに、ニコラスをまねて動かす。

「不便じゃねえの？　これ」

　その気遣いのなさに、ウォリックはむしろ感心した。面と向かって不便じゃないかと尋ねられる経験は、ニコラスにとっても珍しいだろう。

『普通』

「生まれつき？」

『ああ』

「へえ。ならそれが当たり前なんだろうな」

　ニコラスの応対は機械的だった。それよりも、当たり前のようにニコラスと会話を成り立たせているダリオに、ウォリックは唇を尖（とが）らせる。

「おい、お前、今のがわかるのか？」

「そりゃわかるだろ。ボディーランゲージは万国共通だ。赤ちゃんだっていないいないばあで笑うぜ？」

「あれってボディーランゲージなの？　それに俺たちのは、手話だよ」

「ああ、手話か。じゃあわかんねぇな」

　ふざけた話だが、本当にそれっきり、ダリオにはニコラスの言葉がわからなくなったようだった。それでも馴れ馴れしく絡まれたニコラスは面倒くさそうに顔をしかめて敬遠したが、それもダリオは理解しなかった。

　互いに二杯ずつ空け、彼の頬がほんのり赤く染まってきたころ、ウォリックはようやく本題を切り出す。

「お前と、あのヨハンって坊ちゃん。この街の生まれじゃねぇよな」

「ああ、ちょっと違う。どうしてわかった？」

「訛（なま）りでね。中か外かはすぐわかる」

　ヨハンは口数が少なくぼそぼそとした話し方だったが、ダリオは耳障りなほどよく喋る。

「出身をきいても？」

「ノースゲート」

　エルガストルムを囲みこむように、東西南北には四つの市が隣接している。それぞれはゲート市と呼ばれ、政府軍が駐在している。黄昏種（トワイライツ）を見張るためだ。

　黄昏種（トワイライツ）は、基本的にはエルガストルムでしか生きられない。しばらくの間生き残れても、いずれはエルガストルムに戻ってくる。生命を維持する矛盾の毒薬、セレブレが安定して手に入るのはエルガストルムだけだからだ。それでもうっかり外に漏れ出してしまわないように、この街は四つのゲート市で遮られている。

　有事の際には各ゲート市を代表する傭兵（ようへい）隊およびそれに準ずる武装集団が招集され、政府軍と連合して事態の収拾にあたる。中には黄昏種（トワイライツ）を相手どるための、専門の戦闘員もいる。

　彼らの足を止めるには、そういった大仰な武力か、あるいは同じ黄昏種（トワイライツ）が必要だ。それほどまでに彼らは圧倒的な力を持つ。
　ウォリックはニコラスの首からぶら下がっている、面白みのないタグに目をやった。
　――つまり、ダリオもタグ付きの危険性は充分に理解しているわけだ。彼がニコラスの聴覚障害を生まれつきだと当てたのも、黄昏種（トワイライツ）と代償の知識があったからだろう。
　なのに彼は、ニコラスに壁を作らない。そのことで少し酒が美味（うま）く感じて、ウォリックは苦笑する。――おいおい、そうじゃないでしょ。ニコラスは「悪いやつをぶった斬る」のが仕事だから、こういう不審者の善悪を見分けるのは、ウォリックの仕事だ。
「で、どうしてお前らはエルガストルムにやってきたわけ？　観光？　出稼ぎ？　それとも戦争？」
「オレとヨハンじゃ目的が違う。オレは、約束を守るためだ」
「へぇ。どんな約束？」
「たいしたもんじゃない。実際、あんまりよく覚えてない」
　なんだそりゃ。はぐらかされているのか。
「じゃあヨハンちゃんのほうは？」
「あいつは、自由だからな」
「自由？」
「オレたちは野良犬なんだよ。鎖の先っぽはオレたちが決める」
　ダリオは楽しそうに、唇をめくりあげて笑う。
「来たかったから、来た。ほかには理由なんかいらねえんだ」
　このふざけたような男を信頼したわけではなかった。ウォリック自身不思議だが、なぜだか見下そうという気にもなれなかった。警戒心は維持したまま、それでも安全圏の質問から、もう一歩だけ先に踏み出す。
「ヨハンは襲われた。なぜだと思う？」
　ダリオは、やはりあっけらかんとしていた。
「そう。それが謎（なぞ）なんだ。いったい、誰がどうしてあいつを襲った？」
　彼の瞳を、ウォリックはじっと見つめていたけれど、なにかを隠している様子はなかった。肩をすくめる。
「ま、この街じゃ裏通りを歩いてて、襲われない方がおかしい」
　問題は、なぜヨハンが裏通りを歩くことになったのか、だ。
　ダリオならまだわかる。なんにも考えてなかったんだろうと納得できる。だがヨハンがそれほど無謀な性格だとも思えなかった。臆病（おくびょう）な青年があそこに足を踏み入れるには、それなりの理由が必要だ。

　けれどウォリックは、それ以上は深入りしなかった。三杯目のオールドパーに口をつけて、にたりと笑う。
「これからは気をつけなよ。どっか行くなら、あのイカしたスーパーヴァイオレットに乗っけてやればいい」
「そうだな。あいつとはできるだけ、ばらけないようにするぜ」
　ありがとよ、とダリオも笑う。そして彼は、テーブルの隅に避けていたボウモアに口をつけて、「なんだよこれ不味いな」とまた顔をしかめる。
　それからしばらく、ふたりは彼のフィアットの話で盛り上がった。

　こんな風にして、二組のふたり組は出会った。
　まるで運命的に、だが実のところはただの偶然で。
　まとめてしまうと、こうなる。
　――エルガストルムが、狭いだけだ。
　この街がもう少し広ければ、また違った物語もあったのかもしれない。あるいは物語なんてものは存在しなかったかもしれない。
　なんにせよ、それぞれのふたり組のうちのよく喋る方が散々酒を飲み、酔っ払った夜から数えて三日後に、ひとつのニュースがエルガストルムに流れる。ぐらぐらと歪（ゆが）んだ映像で、ノイズ混じりの途切れがちな音声で。
　それはこの街じゃ取るに足らない、ありふれたニュースだが、ウォリックとニコラスにとってはまったく無意味というわけでもなかった。
　そのときふたりは、ある巨大なマフィア組織の総代と顔を合わせていた。

#2

酔っぱらった二日後から話を始める必要がある。

夕暮れどき、ウォリックとニコラスは、黒いスーツを着た集団に襲われた。つい最近にもこんなことがあったと思ったが、この街でスーツを着ている男が得意とするのは営業よりも暴力だ。驚くことじゃない。それを、ふたりは返り討ちにした。ネクタイを締めていなかったとしても、暴力が得意なのは便利屋も同じだ。むしろ涼しげなぶんだけスマートだとウォリックは自負している。

相手は銃を持っていた。銃口の意味を理解していて、引き金を絞ることにも躊躇(ためら)いはなかった。だから殺すしかなかった。それはそれでいい。ただし問題がひとつあった。たとえ悪臭がこびりついた裏通りでも、いくつもの死体を放置していくわけにはいかない。これでも街の美化には気を遣っているほうだし、なによりこの街には火薬と血の臭(にお)いに敏感な老犬がいる。

襲われてからだいたい五分、殺してからだと二分とちょっと。白髪交じりの老警官が古めかしいセダンに乗って現れた。窓から半身を出して叫んでいる。

「またお前らか便利屋(ガキ)ども！　許可なく暴れるなつってんだろうが、いつになったら覚えるんだ」

チャド・アトキンスはウォリックたちがエルガストルムに来てからずっと付き合っている、中央警察署捜査一課所属の警部だ。五〇歳を超えており、ふたりが知っているだけでも二〇年は勤続している。街での生き残り方をよく知っている模範的な汚職警官で、ふたりにとっては幼少期から変わらず口うるさい人生の先輩でもある。

チャドはウォリックとニコラスの前で車を止め、血を流すスーツとその中身を窓から一瞥(いちべつ)する。

「よりによって面倒くせぇのを殺しちまいやがって。警察は街の清掃係じゃねぇんだぞ」

ニコラスがチャドの死角で面倒だと顔に出し、気だるげな手話でぼやく。

『清掃係なら、もうちょっと役に立つよな』

チャドがニコラスを振りかえり、げんこつを容赦なくぶつけた。

「うるせぇ、クソガキが」

『なんでその角度から見えてんだよ』

「見る必要もねぇ。悪ガキが考えそうなことはだいたいわかんだよ。ったく、マフィアに手ぇ出すなら、うちに話を通してからにしやがれ」

チャドがショートホープを咥(くわ)える。ウォリックはジッポライターをこすり、窓から両手を突っ込んでその先端に火をつけた。

「俺らはてっきり、営業熱心な銃弾のセールスマンかと思ったんだけどね。やっぱり、殺しちゃまずかっ

た？」

「ああ。お前が考えている以上にな」

「どういうこと？」

「そいつら、ロンバルディ組（ファミリー）の残党だ」

　ウォリックは記憶をたどる。――ロンバルディ組（ファミリー）。

「マフィアってよりは、それに憧（あこが）れてる若い不良共（ストリートギャング）だろ？　特別ヤバい相手じゃない」

「だが、他の弱小とは一括（ひとくく）りにできねぇ。こいつら、『ダイナマイト』って胸糞（むなくそ）わりぃ商品を、でっけぇ組織にも卸してやがった」

「やっぱり武器屋さんじゃん」

　チャドが前歯でフィルターを強く噛（か）む。

「中毒が特にひでぇ死にかけのタグ付きを、異常な濃度のセレブレ――それも促進剤（アツパー）だけとセットで売る。使い方は簡単、タグ付きに薬を過剰摂取（オーバードーズ）させて、自爆テロよろしく敵に突っ込ませる。こいつがダイナマイトだ」

「へぇ。そいつは怖いねぇ、吐いちゃいそうだ」

　セレブレは本来、二種類でひとセットだ。一方を促進剤（アツパー）、もう一方を抑制剤（ダウナー）と呼ぶ。促進剤（アツパー）は一時的に黄昏種（トワイライツ）の身体能力を高め、生命力を漲（みなぎ）らせるが、一方で副作用も大きい。促進剤（アツパー）の副作用を軽減し、効果の持続時間を薄く引き延ばすのが抑制剤（ダウナー）で、生命維持を前提として考えた場合、この二種類のセレブレを同時に服用することが望ましい。

　死にかけの黄昏種（トワイライツ）に促進剤（アツパー）だけを過剰摂取（オーバードーズ）させるとどうなるか？　想像は難しくない。一時的に身体能力が跳ね上がり、極度の興奮状態により錯乱し暴れまわって、薬が切れるころにだいたい死ぬ。一発限りの大規模破壊兵器――たしかにその効果は爆弾によく似ている。

「あいつらはパウルクレイギルドみてえなタグ付きの派遣組合じゃねえ。使い捨ての商品しか持たねぇから、管理費が浮いてお得ってことだ。もうまともに使えないタグ付きなら、安値で手放す連中も少なくない」

　ウォリックは顎（あご）に手を当てる。据わった目でまた、へぇ、と呟（つぶや）いた。

「それで、残党っていうのは？」

「そのまんまだ。つい最近、ロンバルディ組（ファミリー）はひと通りぶっ壊れた」

「商品の管理にしくじって自滅ってわけ？　賢い奴（やつ）らだ」

「いや、それはねぇな。現場を見りゃ、外からの侵入者がいたのは瞭然（りようぜん）だ。それに爆発にしちゃ死体が

綺麗（きれい）すぎた」
「なんにせよ、恨みを買うのも得意な連中だったってだけだろ？」
「問題は、誰から恨みを買っていたのか、だ」
「目星はついてんの？」
「ああ。お前らだよ」
　チャドはセダンの窓から手を伸ばし、タバコの先端をこちらに突きつける。それで、長くなっていた灰が落ち、ウォリックの革靴の先を汚した。
「わお。わくわくするね。どゆこと？」
　ウォリックはセダンの屋根に手をつき、片足を持ち上げて灰を払う。頭上の手を、チャドが振り払う。
「侵入者は少人数だ。おそらくひとりかふたり。対してロンバルディの連中は一五か一六か——」
「若者はすぐに群れる」
「その群れが皆殺しだ。銃器で蜂（はち）の巣ってわけでもねえ。こんな芸当が可能なのは、タグ付きだけだ。この時点で相当絞られる」
「おいおい、タグ付きの事件はみんな俺たちのせいになるのか？」
「まだ続きがある。ロンバルディ組（ファミリー）はタグ付きに偏見のねえ奴ら——つまりてめぇらみたいのから恨みを買っていた。ダメ押しは、死体に鋭利な刃物の傷が残っていたことだ。ここまで揃（そろ）ってりゃ、うちのケツの青い新入りどもでもマルを貰（もら）える、簡単な連想ゲームだろうよ」
「そいつは、ツイてないねぇ」
　ウォリックはポールモールを咥え、右手で髪の毛を掴（つか）む。
　チャドはもう一度、路上の死体に目をやった。
「大方、その噂（うわさ）を信じちまった残党が敵討ちにのこのこやってきたってとこだろう。とはいえこうして、ロンバルディ組（ファミリー）の構成員をお前らが死体にしたって事実は残ったわけだ」
「構成員じゃないでしょ。元構成員だ」
「ああ。噂話が、それだけ丁寧に伝わりゃいいがな」
　チャドは本気で俺たちを疑っているわけではないだろう——と、ウォリックは考える。とはいえただの噂話でも、こうした取引の材料にはなる。咥えたままだったポールモールに火をつけ、煙混じりの深呼吸をしてから、尋ねた。
「で、どうすりゃ俺たちがシロだって証明できるわけ？」
「さあな。俺は知らんよ」
「ねぇ、チャドさん。俺たちとアンタの仲だろ？　余計な探り合いはいらねえ。交換条件でも善良な市民

の協力でも、名目はなんでもいいからさ、さっさと依頼を教えてよ」
「今回はそういう話じゃねえんだよ、本当にな。どっちかっつーと、あちらさんが判断する問題だ」
「あちらさん？」
「ダニエル・モンロー。お前らの顔を見たがってる。せいぜい尻尾（しっぽ）を振ってきやがれ」
　想像よりもでかい名前に、ウォリックは思わずタバコを落としかける。
　ダニエル・モンロー。
　モンロー組（ファミリー）の総代にして、エルガストルムにおける最重要人物だ。四大父（よんだいふ）と呼ばれるこの街最高の権力者のひとりに数えられ、中でもとびきりの発言力を持つ。この街に暮らす人間ならば誰も彼に逆らうことは許されない。加えて言うなら、ウォリックとニコラスは、かつて彼の組員だった。
「どうして。あの人は、タグ付きにも優しい」
　ダイナマイトだかなんだか知らないが、そんな趣味の悪いものを扱う連中のひとつやふたつがこの街から掃除されたところで、いちいち口を開くような人じゃない。
　チャドがつまらなそうに吐き捨てる。
「問題は、ロンバルディ組（ファミリー）なんてスケールには収まらねぇんだよ」
「ずいぶん焦（じ）らすね」
「まだ極秘って赤い判がつかれた情報だ。俺の見立てじゃ、明日の夜にはニュースで流れるがな。なんにせよそれまでは、俺から言えるのはこんくらいだ」
　せいぜい上手（うま）く立ちまわりな、とチャドはハエでも追い払うように手を振った。
　古めかしいセダンが唸（うな）り、走り出す。
　ウォリックもへらへらと手を振り返しながら、内心で顔をしかめる。
　四大父はただの通り名じゃない。ルールで保護された、この街の根本的なシステムだ。エルガストルムなんて不安定な街は、毎日綱渡りをしているようなものだ。そしてその綱を張る四つの柱が四大父だ。彼らが強い力を持つことで、どうにかエルガストルムはバランスを崩しきらないでいられる。
　なにか、この街の根底に関わるでかい問題が起こっているのだ。極めて迷惑な話だが、どうやら関わらないわけにはいかないようだった。

チャドの予言通り、ニュースは翌日の午後七時に流れた。

だがウォリックとニコラスは、そのニュースを見ることができなかった。

理由のひとつは、ふたりの事務所にはテレビがないこと。

ふたつめは、ちょうどその時間、ダニエル・モンローからディナーの誘いを受けたことだった。

愉快な談笑の舞台は、彼自身がオーナーを務める高級イタリアンだ。オレンジ色の照明が食欲を刺激し、ただでさえ美味（うま）そうな料理を一層引き立てる——そんな風に演出されているが、モンローに名指しで呼び出されてがつがつと頬張れる奴は頭がおかしい。ウォリックたちにとっては元主人であり、一定の信頼関係は築けているはずの相手なのでまだましだが、やはり緊張感は拭（ぬぐ）えない。あの狂犬じみたニコラスですら、ウォリックの横でいくぶん場をわきまえている。まったく似合っていない襟元のナプキンは、まるで首輪だ。

モンローは片手で軽く内側に折り曲げたピッツァを前歯で噛みちぎり、垂れるモッツァレラを子供みたいに唇で追いながら言う。世間話のように。

「ちょうど今、テレビでやっているんだ。先週末で、四人死んだ」

正体不明のマフィア殺し。ロンバルディ組（ファミリー）を潰（つぶ）した連中と同様の手口で、名の通った組（ファミリー）の幹部（カポ・レジーム）にも手を出している。

ウォリックはロゼのシャンパンで口を湿らせて、尋ねる。

「アンタのところも、ロンバルディ組（ファミリー）と関係あんの？」

「うちにひとり、ギャンブル好きがいてね。金が欲しくて、黄昏種（トワイライツ）をひとり売った。これはなかなか、困った話でね。黄昏種（トワイライツ）も家族だ。下手な死に様で、うちの名前を汚（けが）されると迷惑だ」

「取り戻したんすか？」

「穏便に、買い戻した」

「向こうにしてみれば丸儲（まるもう）けっすね」

「そう。うちと彼らのあいだにはなんの感情もない。敵対もしていない」

「そしてもちろん、愛情もない」

「この街のやんちゃな子供たちに注ぐ垣根のない愛情を別にすればね」

言ってモンローは、汚れた口元をナプキンで拭う。

「問題は、火遊びが好きな子供たちのチームがひとつ潰れたことじゃない。それを発端とする、マフィアが無差別に襲われる事件のほうだ」

どれくらい問題ですか、と尋ねようとして、だがウォリックは口をつぐんだ。モンローに対してあまり愚かな

質問は口にしたくなかった。この人の前にいると、親を相手に点数稼ぎをする良い子ちゃんの気持ちが少しわかる。それだけ格が違うということだろう。

　モンロー組（ファミリー）の構成員にまで手を出しているのなら、マフィア殺しを笑ってもいられない。四大父はこの街の基盤で、そこに手を出すことは禁忌だ。

　モンローは無邪気に見える、だが品のよいため息をつく。

「最近の若い連中は賢くてね。酒場でニーチェなんか読んでいる。賢くなると、馬鹿（ばか）がわからなくなるものだ。そうだろう？」

「つまりマフィア殺しには裏がある。その意図を探り合ってる、ってわけすか」

「うちに手を出して良いことはなにもない。それでも手を出してきたなら、別の『もっと良いこと』がきっとあるというわけだ」

「まったく、怖（おそ）ろしい話っすよ。その良いことが金でも権力でも、俺にはちょっと真似（まね）できない」

　モンローは笑う。

「疑われてるらしいじゃないか」

「不幸な誤解です」

「ああ。私はよく知っているよ、お前たちは中立だ。誰にも属さない。ただ、ニーチェもハイデガーも、お前たちの性質までは説明してくれない。それにどれだけ精神を高めても、最後に意味を持つのは手で触れられる現実だ」

　ウォリックは片頬をひくつかせて笑う。

「依頼と受け取っても？」

「そう聞こえるか？」

　微笑（ほほえ）んで、まっすぐにウォリックを見つめるモンローの視線は子供みたいに曇りがない。呼吸のように命を奪い、夜眠るように命を奪われかけてきた男に、なぜこんな目つきができるのかウォリックは理解できない。その瞳（ひとみ）の奥にウォリックたちへの害意がないと信じることは容易（たやす）いが、それは彼にとってふたりが可愛（かわい）い元部下で、使える駒（こま）だからだろう。信頼を失うような返答はしたくなかった。

　ウォリックは落ち着かない手でピクルスを摘（つ）まみ、口に放る。値段を想像するのは恐ろしいが、少なくともダリオとバーで齧（かじ）ったものとはゼロの数が違う代物（しろもの）のはずだ。味を手放しに楽しめる状況じゃないのが残念だった。

「貴方（あなた）にはお世話になってます。もちろんできるかぎり、ご期待には応（こた）えます」

　さて、彼の期待とはなんだろう？

　マフィア殺しとやらの首にリボンをかけて、花束と一緒に贈ればいいのか。それとも、五体を揃えたまま

お話できるテーブルをセッティングするべきなのか。どちらがより喜んでもらえるだろう、と想像力を働かせていると、横でパスタをゆっくりと口に運んでいたニコラスがフォークを置いた。

「じょ、ぉけん、わ」

　手話でなく、自分の声で言った。ニコラスはモンローに対して手を使わない。彼の中にもルールはある。その言葉は声量を調整できないため歪（いびつ）だが、だからこそ誠実だ。

　モンローは、まるで擦り寄ってきた犬にむけるような優しげな微笑を浮かべた。結局一ピースだけを食べて残したピッツァの横にナプキンを置き、立ち上がる。

「安い肉はどう料理しても不味（まず）い」

　ダニエル・モンローとの会合のあとは、高価な飯もワインも、胃に入らずにすっと消えてしまったようだった。事務所に戻ったウォリックは、空腹感を覚えて電話を一本かけた。

　相手はダリオだ。先日、酒を飲んださいに、彼が部屋を取っているホテルのブックマッチを押しつけられていた。それはもう捨ててしまったが、幸か不幸か、ウォリックは一度目にしたものは忘れない。

　フロントにダリオの名を告げてから、受話器を置いてポールモールを吸っていた。二、三分後に彼の大声が聞こえて、ウォリックは再び受話器を手に取り、飯を食おうと誘う。

　ダリオは二つ返事でそれを受け入れた。安いバルの名前を告げて、電話を切る。彼にこの街の土地勘があるとも思えなかったが、まあなんとかなるだろう。

　ウォリックはスーツを着替える。もっとも見栄（みば）えの良い一着から、多少——血かなにかで——汚れても気にならない一着へと。それから自虐（じぎゃく）的なトレーニングを始めたニコラスに手を振って、事務所を出た。

　約束のバルの前には、すでにあのビビッド・ヴァイオレットが停まっていた。どんな景色にも合わない車だ、と苦笑する。

　ダリオは店の、いちばん奥の席に陣取っていた。彼はウォリックの姿を見つけると、まるで旧友に再会したように、嬉（うれ）しげに笑って手を上げる。

　マフィア殺し、と聞いて、まず思い浮かんだのがこの無邪気な顔だった。根拠はない。ただ、ニーチェなんて国籍さえ知らないようなこいつなら、その場のノリでモンロー組（ファミリー）にだって銃口を向けられそうだ。それ

に、最近街の外からやってきた、というのも怪しい。黄昏種（トワイライツ）は基本的にエルガストルムでしか生きられないが、しばらくの間であればゲート市で生き残るはぐれという事例がある。

黄昏種（トワイライツ）には守らなければならない規則がある。三原則と呼ばれる。

一、黄昏種（トワイライツ）はその意思で人間に危害を加えてはならない。またその危険を看過することによって人間に危害を及ぼし、全ての均衡を崩してはならない。

二、黄昏種（トワイライツ）は人間の命令に絶対従わなければならない。ただし与えられた命令が一に反する場合はこの限りではない。

三、黄昏種（トワイライツ）は一と二に反するおそれのないかぎり、自己を守らなければならない。

このうち、街で生きるために特に大事なのは一の「全ての均衡を崩してはならない」だ。均衡とはつまり四大父であり、ダニエル・モンローだ。

黄昏種（トワイライツ）は運動能力で健常者（ノーマル）を遥（はる）かに上回るが、健常者（ノーマル）から与えられるセレブレがなければ生きていけない弱い生物でもある。級（カテゴリー）の高い黄昏種（トワイライツ）ほど、この立場の差を理解している。だから三原則を守る。セレブレの流通とそれによる黄昏種（トワイライツ）の支配はマフィアの大きな商売で、だからこそ黄昏種（トワイライツ）によるマフィア殺しなんてものは馬鹿げている。いずれ確実に捕まると目に見えているし、殺されるのも明白だ。

街に暮らして長い人間ほど、そのような奇行に走る可能性は低い。常識というのは時間をかけて本能に刻まれるものだ。新参者のダリオ。彼には、この街の常識が欠けていてもおかしくはない。

そういった疑心を軽い笑顔で覆（おお）い隠し、ウォリックはダリオに近づく。彼はコロナの瓶をあおって飲み干し、まるで抱擁を期待するように両手を広げる。

「よう、今度はあんたからお声がけたぁ、光栄だね」

「迷惑だったか？」

「いんや。年中暇してるもんでな、日中はぶらぶらとお散歩よ。でもあんたらのほうは忙しそうだ」

ぶらぶらとお散歩、というわりに目にはうっすら隈（くま）を作っている。そういったささやかな嘘（うそ）の意味を想像してしまう。ただ彼の場合は他の可能性も、いくつも想像できる。実際ダリオは目と目の間を摘まみながら、恥ずかしげもなく真顔で「ポルノの見すぎでな」と言った。こういう男はミステリの登場人物にそぐわない。

ウォリックが席に着き、ダリオとともにオールドパーをダブルで注文する。料理はウォリックが適当に選んだ。ガーキンスと玉ねぎのピクルス、オレンジを効かせたレバーパテ、軽く炙（あぶ）った鯖（さば）のマリネ——どれもこの店のものはそこそこいける。

乾杯のあと、ダリオが不作法にグラスの氷を指で転がしながら、首を傾（かし）げた。

「そういや、片割れはどうした？」
「ニックはああ見えて働き者でね、仕事だよ」
　別に、部屋でトレーニングをしていると素直に答えてもよかった。小さな嘘を交えてダリオを観察してみるが、望む反応は得られない。こちらをこっそりとうかがう様子もタグ付きを探すような素振りも、彼にはない。ウォリックの言葉をそのまま受け取ったようだった。駆け引きのし甲斐（がい）がない相手だ。
「ヨハンちゃんは回復したの？」
「おかげさまでな。病院にいたのは一泊だけだ」
「なら彼もつれてくりゃよかったのに」
「いや。まだ完治ってわけじゃない。部屋のベッドで休ませてる」
「悪いのか？」
「心配いらねぇよ。ただまあ、あんたと飲んだら滅茶苦茶（めちゃくちゃ）になるだろ？　怪我人（けがにん）に飲み過ぎはよくねぇ」
「おいおい、滅茶苦茶にしたのはお前だろ」
「そうだったか？　まあどっちでも一緒だ」
　そう言って彼はオールドパーをあおる。ウォリックはまずピクルスから手をつけた。ここのピクルスは常識的に考えて甘みが強すぎるくせに美味い。
「お大事にって伝えといてよ。今日は手のかかる相棒を持つもん同士、子育て相談会を開くのも悪くない」
　ダリオはすでに、ダブルのオールドパーを半分ほども空けていた。湿り気を帯びた息を吐き出して笑う。
「ヨハンに手間がかかったことなんてねぇよ」
「つい三日前、傷だらけになったばっかでしょ」
「暴漢に襲われるのが迷惑か？　だとすりゃ、オレの方がよっぽどあいつに迷惑をかけてる」
「へぇ。結構、荒事も多いほう？」
「よく覚えちゃいねぇよ。いつの間にか傷跡が増えてんだ」
「お前は何を覚えてんだよ」
「あんたがヨハンを助けてくれたことは覚えてる。あとはオレの、最高のフィアットだ。最高の女が褒めてくれたんだ」
「ああ、さっらさらの黒髪で足が馬みたいに長いんだろ？」
「あん、どうして知ってんだ？」
「このあいだ、散々聞いたよ」
　以前ダリオと飲んだときに言っていた。彼は泥酔（でいすい）していたため単語の羅列みたいな話し方だったが、そ

れもウォリックは誤りなく覚えている。
「そうかい。とにかく、最高の女だった。センスもよくてよ。可愛い顔してるって指先でつつくんだ」
「可愛い？　お前の顔が？」
「馬鹿野郎、フィアットに決まってんだろ。それで晴れた日曜日によ、ふたりでボンネットに、鎖が千切れた犬の絵を描いた」
　ダリオは空になったグラスを掲げて、「おい、もう一杯だ」と叫ぶ。それからガラムを咥えて、ポケットを叩いた。
「火、忘れた。貸してくれ」
「どんだけ物忘れが激しいんだよ」
「そこがオレの良いところでよ」
「自分で言うなよ」
　ウォリックがジッポライターを擦り、ダリオが顔を寄せる。薄暗い店内で、彼の顔を一瞬、揺れる火が照らす。ウォリックは手を引き戻すついでに、自分のポールモールにも火をつけた。
「つまりよ、オレの頭ん中にゃあ、大事なことしか残らないのさ。忘れるのはつまらないこと、どうでもいいこと。わかりやすくていいだろ？」
「そ。けど何度も同じ話を聞かされる方にしてみりゃ、たまったもんじゃない。ヨハンちゃんも内心じゃため息をついてるかもよ」
「同じ話ってなんだよ」
「あの車とかさ」
「そう、フィアットだ。最高の女が褒めてくれた最高の車。オレは一生、あいつに乗るぜ。犬の絵もいかしてる」
「なんで犬？」
「お、興味津々か？　でも残念だったな、覚えてねぇ」
「またかよ」
「どうせつまんねぇ理由だよ。それよりもよ、最高の女と一緒に絵を描いたってところが良いんだよ。しかもボンネットだ。いつだってオレのちょっと前を、とびっきりの思い出が走ってるんだぜ」
　ウォリックはぷらぷらと、咥えたままのポールモールを振った。
「確かに素敵だ。そんなに良い女だったのか？」
「間違いねぇ。優しくて、ちょっと気が強くてよ。それに頭もよかった。勉強ができるってんじゃなくてさ、なんていうか、言うことがいちいちぴりっとしてんだよ」

「でも、あの車を褒めた」
「だから、だろ。あんたにあのセンスがわからないのは仕方ないけどよ、他人の宝物にまでケチをつけるなんてだせぇことは、まさかしねぇよなナイスガイ」
「悪かったよ。美人のガールフレンドが羨（うらや）ましくて、ちょっとからかっただけだ」
「だろうと思ったよ。じゃあ改めて乾杯だ。――おい、もう一杯くれ。こいつは美味い」
「ちょっとピッチが速すぎないか？」
「オレは気分がいいんだ。新しい街にきて、こうやって新しい友達ができた。これより酒が美味い夜があるか？」
　友達？　――引っかかったが、口は挟まなかった。
　ウォリックも、もう一杯、オールドパーを注文する。ダリオの酒の飲み方は、品がいいとはいえないが、でも不思議と悪くない。
「この街に来てどれくらいだっけ？」
「ま、一週間ってとこか？　だいたいそんなもんだ」
「エルガストルムはどう？　ノースゲートとはずいぶん違うだろ」
「どうかな。どこでも同じようなもんだ。だせぇことに拘（こだわ）った、つまらねぇ奴らがのさばってやがる」
「ださいこと、ねぇ。たとえば？」
「そんなつまらねぇことはいちいち覚えてねぇよ。感覚だ感覚。どうせ酒や服の値段だとか、どんぐりの背比べみたいな縄張り争いだとかだろ」
「あとは、タグ付き？」
「ああ？　タグ付きがどうした？」
「いや。お前はタグ付きに偏見がなさそうだと思ってさ」
「どうでもいい奴はどうでもいいよ。タグがあろうが、なかろうが。でも、あんたの片割れは悪くない」
「光栄だね。どこがよかった？」
「特に目つきだ。ぎらぎらしてやがる。あいつは相当、腹が減ってる」
「確かに、ニックはよく食う」
「鈍い奴らは、みんなもう満腹してんだよ。でも隣の奴が美味そうなもんを食ってたら、自分も食ってみたくなるんだ。そういう食欲はつまらねぇ。本当に腹を空（す）かしてる奴は、それだけで見ていられる。わかるか？」
「なんとなくね」
　ニコラスは確かに、腹を空かせた獣のようだ。彼は特別に血に飢えている。勝つことに？　きっとそうで

はない。もっと純粋に、暴力に。

　ウォリックはまたポールモールに火をつける。それを見てダリオもガラムを咥える。煙を吐き出しながら、彼はにっと笑う。

「あんたはよくわからない」

「わからないって、なにが？」

「腹が減ってるのか、満腹なのか」

「どうかな。このあと、マルゲリータの一枚くらいならいけるけどね」

　ダリオが、マフィア殺しなのだろうか？

　だとすれば彼は黄昏種（トワイライツ）でなければいけない。だが彼の胸元にタグはない。タグを捨てたタグ付きなんてものがいるのだろうか。まずありえない。セレブレに縛られた彼らにとってその行為は自殺に等しい。この街の均衡を崩すよりも可能性の低い奇行としか思えなかった。

　ダリオは一時間ほどで酩酊（めいてい）し、そのあとも二時間は飲み続けていた。

　ウォリックもそれに付き合い、二日酔いを覚悟した。

　店を出るころには小雨が降っていた。湿度と気圧の変化で眼帯の下が痛む。それで、雨音の聞こえない騒々しい店内にいたころから天気には予想がついていた。

　平衡感覚を失ったダリオを見かねて、肩を貸してやる。あのビビッド・ヴァイオレットのシートでしばらく眠らせておけば、そのうち正気を取り戻すだろう。

　表に停めてある車に乗せようとしたところで、ぬかるみにダリオが足を突っ込み、スーツの裾（すそ）に泥の線が入った。彼はぎゃんぎゃんとがなり立てた。

「おいおい、汚すなよ」

「お前がまともに歩かないからだろ。ちっとは人間らしく左右順番に脚を出せ」

「そりゃ無理だ」

「なんで偉そうなんだよ」

「良いセンスだろ」

「は？」

「女が褒めてくれたんだよ、昔な」

「褒めてくれたのはフィアットじゃなかったのか？」

「ああ？　だから、フィアットの話をしてるんだよ」

「スーツはどうした」

「こんなのどうでもいいよ。ただちょっといかしてるってだけだ。フィアットは比べものにならねぇ」
「いや、よくはないでしょ。その泥」
「なんだと？　オレのフィアットを馬鹿にするのか？」
「だから、俺はスーツの話をしてんの」
　糸の切れたマリオネットみたいに脱力しているダリオを、どうにか運転席に押し込む。そのとき、彼の胸ポケットから、一枚の写真がすべりおちた。
「おい、落としたぜ」
　ウォリックはその写真を拾い上げる。ほんの一瞬だけ、表が見えた。今よりも少しだけ若いヨハンと、一二、三歳の少女が写っている。
「ああ。すまねぇ」
　ダリオはその写真を、丁寧な手つきで受け取り、再び胸ポケットに戻した。
「彼女が、フィアットを褒めてくれたって女？」
　とてもそうは見えなかった。冗談で尋ねただけだ。
「弟の、妹だよ」
「へえ。お前の、じゃないんだな」
「オレに妹はいない」
　ダリオとヨハンは兄弟のような関係だが血は繋（つな）がっていない。その弟の、妹にあたる少女の写真。どうしてそんなものをダリオが持っているのか。気にはなったが、酩酊した彼からまともな返事をもらえるとも思えなかった。
　ダリオはしばらく、ハンドルに両手をついていた。
　うつむいたまま、小さな声でつぶやく。
「臭うな」
「ああ。お前は酒臭い」
「そうじゃない。別の臭いだ」
「鼻がいいね、酔っ払い」
　後方からしゅるしゅると、濡（ぬ）れた石畳を踏みつけるタイヤの音が聞こえた。黒いセダン――安っぽい車だ。それがヴァイオレットの隣を通過し、尻（しり）を九〇度回転させて前方を塞（ふさ）ぐ。
　黒いセダンには、五人が乗っていた。運転席と助手席から、それぞれ男がひとりずつ。後部座席から、男がひとりと女がふたり。一様につまらないスーツ姿だ。黒いセダンと合わせて、没個性に徹しているようでもあった。

小雨で濡れた前髪を撫(な)でながら、ウォリックは尋ねる。

「通行止めとはきいちゃねえけど？」

男は答えず、銃を抜いた。

ウォリックは咄嗟(とっさ)にフィアットのドアを大きく開き、それを盾にして後方に距離を取る。発砲。二発だ。ドアの窓ガラスにひびが入る。身体(からだ)に痛みはない。当たりはしなかったようだ。

濡れた地面を転がり、汚れたブロック塀の陰に隠れる。コルト・ガバメントを構え、顔を覗(のぞ)かせる。敵の位置を確認する。うぇ、と間の抜けた声が漏れた。

ダリオが躊躇いのない足取りで、まっすぐに、さきほど車を撃った男に近づいていく。的になるには最適な位置だったが、男は戸惑いのためか引き金を絞るのを忘れ、怪訝(けげん)そうな表情を浮かべていた。

「おい。酔いが冷めちまったじゃねぇか」

確かに、彼の声も歩みもしっかりとしている。だがその行動は理性がアルコールで吹き飛んでいるとしか思えなかった。

「てめえ、なにしてくれてんだよ」

ダリオがちらりと、フィアットの割れた窓ガラスに目をやる。そんなこと言ってる場合かよ、とウォリックは内心で舌打ちする。まさかこいつ、この状況を危機だとも思っていないのか？　タグ付きであれば、そうかもしれない。たとえばニコラスであれば、いくら拳銃(けんじゅう)を持っていようが、正面から向かい合った健常者(ノーマル)五人くらい相手にならない。

ようやく自分の役割を思い出したのか、スーツのひとり——後方に立っていた女が、ダリオに向かって銃を構えた。だがそれが発砲されるよりも先に、ウォリックの方が撃っている。銃声。数秒の時間差で、女の身体が崩れ落ちる。手の中の銃を撃ったつもりだったが、血の染(し)みは右肩に広がっていた。左目を失(な)くしたせいだろうか、狙撃(そげき)は得意ではない。

なんにせよダリオは無事だが、状況は悪化した。戦意を取り戻したスーツのうち、ふたりが銃口をダリオに向ける。残りのふたりは、銃は持っていないようだ。スーツには似合わない警棒を構えている。それを見たダリオも腰からコルト・ウッズマンを抜くが、間に合いそうもない。

ウォリックは、咄嗟に駆け出そうとしたが、その直前、理性だか好奇心だかがつぶやく。

——ダリオは、この状況をどう切り抜けるつもりだ？

異様な早撃ちを見せるのか？　超人的な身体能力で銃弾を避(よ)けるのか？　どちらも黄昏種(トワイライツ)であれば可能だ。

その想像で足の動きが止まった。なにもないとは思えなかった。ダリオの行動からは危機感が欠落している。

直後。発砲は四度聞こえた。
スーツの、銃を持ったふたりが、それぞれ二発ずつ。ダリオは撃っていない。彼はその場から動きもしなかった。銃弾の三発は外れ、一発が彼の太腿（ふともも）にめり込む。
──なんもねぇのかよっ！
ふざけんな、くそ。ダリオはコルト・ウッズマンを落とし、その場にうずくまる。ふたつの銃口が彼を追って会釈（えしゃく）する。ウォリックはとにかく引き金を引いた。ろくに照準も合わせていないが、運よく一発が命中する。その結果を確認する前に、威嚇（いかく）射撃を続けながら塀の陰から飛び出し、ダリオの腰に腕を回す。
彼の身体が小さくて、まだ助かった。そのまま勢いで転がり、狭い脇道（わきみち）に身体を滑りこませる。と同時に、堰（せき）を切ったように銃弾が飛び交う。ウォリックの肩を一発が掠（かす）めた。深い傷じゃない。だが高熱のような痛みが肌を這（は）う。奥歯を噛みしめてそれをやり過ごし、起き上がって体勢を整える。塀から顔を覗かせ、また威嚇射撃。肩では痛みの熱が暴れている。
「足が痛（いて）え」
とダリオがつぶやく。
「知るか」
濡れた石畳に転がっている彼の襟首を掴んで引き寄せる。
「さっさと酔いを覚ませよ。頼むぜダリオ」
「もう酔ってねぇよ。でもオレは運が良いんだ。それにあいつら、オレのフィアットに──」
「聞きなよイカれストライプ」ダリオの胸元に銃口をつきつけた。「これはバカラじゃねえし俺はお前に命まで貸すつもりはねえ。死にたくなけりゃ、真面目（まじめ）にやるんだ」
「これ以上なく真面目だっての。オレがいつふざけた？」
ダリオは相変わらず、銃口など気に留める様子もなく肩をすくめてみせた。
──こいつは、本当にこれで本気なのか？
わからない。が、演技にしては身体を張りすぎだ。銃弾を太腿に一発受け、ストライプがくすんでいる。
役に立たないダリオか、あるいは自分のつまらない好奇心かに苛立（いらだ）って、ウォリックは舌打ちした。
「マーブル柄が今年のトレンドか？」
「流行でファッションを語る趣味はねえ」
ダリオは相変わらず平然としているが、彼のコルト・ウッズマンは威嚇射撃のど真ん中に転がっていて、役に立ちそうもない。道具の数でも人数でも負けている。このままでは状況は悪くなる一方だ。さっさと逃げ出したいが、足を引きずるこのマーブル柄をつれて走り回る気にもなれない。さて、どうしたものか。

周囲の地図を思い出していると、銃声に混ざって、背後から物音が聞こえた。

先にダリオが気づき、ウォリックの名前を呼んだ。振り返りながら銃口を向ける。男のひとりが警棒を持って近づいてくる。肩の傷が痛む。引き金を引く。銃口はぶれている。弾はブロック塀にぶつかり甲高い音を立てる。二発目は撃てなかった。妙にゆっくりとした時間の中で、男の警棒がウォリックの額にめり込む。

霞(かす)んだ視界でもう一度、コルト・ガバメントの銃口を向ける。

だが、引き金を引く前に、ウォリックの意識が途絶えた。

気を失っていた時間が正確にわかるはずもないが、一五分か二〇分か、おそらくその程度だろう、とウォリックは当たりをつけた。

冷たいコンクリートの床に鼻を押しつぶされているのが苦しくて、身体を回転させる。

どうやら古臭いガレージに転がされているようだ。四台ほどなら楽に駐車できそうなスペースがあるが、車はない。そもそも物がほとんどない。床に酒瓶がいくつか転がり、壁際(かべぎわ)には古い木箱が積みあがっている。それだけだ。入り口はひとつ、大きいが脆(もろ)そうなシャッターだけ。壁の上部には採光用の小窓があるが、人間が出入りできるサイズではない。

周囲には三人のスーツたちがいた。車から降りたのは五人、うち二人には銃弾が命中したはずなので数が合うが、ウォリックが右肩を撃ち抜いた女は目の前の三人に含まれている。であればベッドに寝ているのがひとり、外の見張りがひとりというところだろう。

ウォリックは、両手と両足を縛られていたが、口は自由に動いた。こちらを見下ろす三人のうちの、適当なひとりに向かって言う。

「ここって禁煙？　よければ、ポケットのタバコを咥えさせて欲しいんだけど」

肩に包帯を巻いた女が、こつこつと足音を立てて近づく。

「ニコチンよりもよく効くのをあげるわ」

革靴の裏が、ウォリックの頬骨を打つ。

口の中に広がった鉄の味を飲み下しながら考える。

——俺は殺されなかった。

考えられるシンプルな理由は、ニコラスへの人質にすることか。健常者（ノーマル）のたった四、五人が黄昏種（トワイライツ）を相手にするなら、人質というのは理解できる発想だ。彼らはまるで獣のようだが、セレブレと社会によって、本能の深いところで飼い馴（な）らされてもいる。極端な話、ウォリックが死ねと言えば、ニコラスは死ぬかもしれない。とはいえ現実的には、ウォリックに銃口が向いている程度ではあのニコラスをどうこうできるとも思えない。彼らが小賢（こざか）しく考えている限りはあまり危機感もなかった。問題があるとすれば、あいつの助けを待つのは恰好（かっこう）が悪いという点だ。

軽く笑って、ウォリックは尋ねる。

「これから俺をどうするつもり？」

答えたのは、やはり肩に包帯を巻いた女だった。

「使うだけ使ってから殺す。でないと割に合わない」

「そんなに高かったんだ、君のスーツ。そりゃ悪いことをしたね」

女は不快そうに顔をしかめ、ウォリックの腹を蹴（け）った。体重が軽いからだろう、それほど強い衝撃ではなかったが、反応して殴られた額や、銃弾が掠めた右肩がずきずきと痛む。

「そうよ。男に買わせたものだったけれど、もう新しく貢（みつ）がせる当てもないわ。笑い方が下品で勘に障（さわ）ったけれど、組（ファミリー）の幹部（カポ・レジーム）に取り立てられるだけの器量は持っていた。これからというところだった」

ウォリックは首を振る。

「マフィア殺しは、俺たちじゃない」

彼女たちは、その煽（あお）りをくらった人種だろう。ウォリックとニコラスが犯人だという噂は、思ったよりもよく広がっているようだ。

「少なくとも、貴方たちがロンバルディ組（ファミリー）の残党を狩っていたのは事実よ」

「一方的に襲われたんだ。不幸な誤解でね。実は俺たちも、マフィア殺しを追ってる」

「どうだか。貴方たちの後ろにいるのはだれ？　一体どんな目的で、この街の均衡を崩しているの？」

「俺たちはそんなことしていない。本当に。背後関係なんてややこしいものはないし、エルガストルムをどうこうしたいわけでもない」

「けれど、街の外から現れた不審な男と連絡を取り合っている」

ダリオ。あいつが怪しい、と告げればこの場を切り抜けられるだろうか？　だがダリオは弱すぎる。ただのチンピラにぼろぼろにされていたヨハンもだ。あいつらがマフィア殺しだと疑うには、根拠が弱い。

仕方なく首を振る。

「偶然一緒に酒を飲んだだけだよ」

「そして偶然、私の新しいスーツの当ても台無しにした」

「それは違う。俺は君の男なんか知らないし、もちろん殺してもいない」

　ダリオは無事だろうか？　あいつのことを少しだけ心配している自分に気づいて、苦笑する。あの馬鹿がいなければこんな事態にはならなかった。

　とくに理由があったとも思えないが、女はまたウォリックの腹を蹴った。唾（つば）を吐き捨てて女は言う。

「なんでもいいわ。前々から、貴方のことは気に入らなかったの。便利屋なんて気取ってタグ付きとおままごとをしている偽善者がね。貴方が優しく頭を撫でてあげれば、タグ付きがまともな人間にでもなると思った？」

　ウォリックは笑う。

「まともな人間って、なに？」

　どうせなにを言おうが、もうしばらく殺されはしないだろう。いくら末端でもマフィアはマフィアだ。捕えた人間の使い方くらいは知っているはずだ。

「勘違いと思い込みで銃をぶっぱなして、塩漬け干し鱈（バカラーダ）みてぇに醜く顔を引きつらせてスーツの染みについてぎゃんぎゃん騒ぎ立てるのがまともな人間か？」

　女は怒気を隠そうともせず、ウォリックを見下ろす。左手で不格好に銃を抜いた。

「私、右利き（みぎき）だけど、そっちは貴方が使い物にならなくしてくれたから。六回撃つわ。もし当たったらごめんなさいね」

　なるほど。こいつは期待したよりも冷静じゃないのかもしれない。女のヒステリーは、これだから扱いが難しい。

　最悪死ぬな、とウォリックは思う。不思議と恐怖心は薄いが、つまらない死に方ではある。

　女がセフティを外す。直後。爆発のような、巨大な音が響き、シャッターがぶち破れた。

　現れたのはニコラス――ではない。

　まず見えたのは、ビビッド・ヴァイオレットをバックに、不適に笑う不細工な犬のイラストだった。

　趣味の悪いその車は瞬（また）く間に、へこんだフロントをぶつけてシャッター前にいた男のひとりを跳ね飛ばす。ボンネットが曲がり、犬が一層笑みを大きくする。狂犬はさらにもうひとり男を跳ねながら、まっすぐウォリックに向かってくる。右の車輪が木箱を跳ね上げる。女がひきつった表情で、どうにか飛び退（の）く。割れたフロントガラスの向こうで、犬と同じ顔で笑うダリオと目が合う。ウォリックは動けない。車体が横滑りし、沈み込んだ拍子にコンクリートを擦って火花を散らす。その火花がウォリックの鼻先で止まる。

　跳ね上がっていた木箱が落下し、濁点の混じった音を立てて砕けた。滑ったタイヤの跡が焦（こ）げた臭いを上げる。ダリオが颯爽（さっそう）と、ドアを開ける。その風がウォリックの前髪を揺らした。

「よう、友達（フレンド）。元気かよ？」
　ダリオは額から血を流している。割れたフロントガラスかなにかで切ったのだろう。彼は滑り落ちるようにシートから降りて、どうにか取り出したナイフでウォリックを縛るロープを切った。
　ウォリックは笑う。
「なんで？」
「言っただろ。あんたはツイてる。なにせヨハンを助けた。次はオレが助ける番だ」
「覚えてたのかい」
「大事なことは忘れねぇ」
「俺が捕まったのは、お前のせいだよ」
「そうだったか？」
　発砲音が聞こえた。女が撃ったようだが、弾は曲がったボンネットの、犬の眉間（みけん）を撃ち抜いただけだった。ダリオもコルト・ウッズマンを引っ張り出す。しかし無茶をしすぎたせいだろう、もうまともに握力もないようで、それを取り落とす。
　ウォリックは地面に転がったコルト・ウッズマンを拾い上げ、撃つ。
　とくにどこを狙（ねら）ったわけでもないが、女の胸で血が広がる。狙い通りだということにしておいていいだろう。
　コルト・ウッズマンを人差し指に絡（から）めて回転させ、ダリオに差し出すと、彼はそれを腰のホルスターに仕舞い、そこで力尽きたようだった。コンクリートの上に、大の字に寝転がる。
「あちこち痛（いて）え。こいつは重傷だぜ？　さっさと病院に連れていってくれ」
「ちょっと待ってよ。こっちも疲れてっから」
　ウォリックはポールモールを取り出す。ダリオも、仰向けに寝転がったまま、ガラムを咥えた。ウォリックが二本のタバコに火をつける。
　タバコと一緒に、ビビッド・ヴァイオレットを背負った犬も黒々とした煙を吐き出していた。エンジンが完全にいかれたのだろう。
「悪かったね、フィアット」
「あ？　なにが？」
「宝物だろ」
「ああ――」
　ダリオはちらりと、不敵な犬と目を合わせた。
「もう忘れちまったよ」

　ウォリックはしばらく目を閉じて、ビビッド・ヴァイオレットと犬のイラストに黙禱(もくとう)を捧(ささ)げた。それから唇のポールモールを手に取り、弾(はじ)いて灰を落とす。
「お前、ニーチェは読んだか？」
「ニーチェ？　誰だよ。ポルノスターか？」
「その通りだよ。刺激的で、若者を虜(とりこ)にする」
　マフィア殺し。エルガストルムのルールに反する無法者。小難しく考えれば、そいつは得体のしれない背後関係を持つ凶悪犯だ。
　でも馬鹿みたいに事実だけを眺めれば、ただ気に入らない奴(やつ)らをぶち殺して回っているだけのようにも見える。
「ピンナップじゃあ、尻はでかければでかいほどいい」
　とダリオがつぶやく。
「ニーチェの尻のサイズまでは知らないな」
　とウォリックは答える。
　仰向けに寝転がっていたダリオの顔にガラムの灰が落ちて、それで彼が、不機嫌そうに顔をしかめた。

#3

笑う犬が暴れまわったガレージを出てから、事務所に戻るまで二時間ほどかかった。

ガレージの外ではヨハンが待っていたので、自分の足で歩こうとしないダリオは彼に押しつけた。とはいえウォリックもいくらか負傷していたため、彼らふたりと共にテオの医院に顔を出す必要があった。

ニナに包帯を巻いてもらって事務所に戻ると、ニコラスが呆(あき)れ顔をこちらに向けた。彼はソファに寝ころがったまま、炭酸水の入ったガラス瓶を唇に押し当てている。喉(のど)を二度鳴らしてから、テーブルに置いた。

ニコラスは右拳(こぶし)を顔の前に持ってきて、その手首を曲げながら左胸を叩(たた)いた。それから右手全体で頭を掴(つか)むような動作をする。――『なにトチってんだアホ』。

それで満足したのか、床に置いていた紙袋から串焼(くしや)きを取り出し、嚙(か)みちぎる。

「なに食ってんの」

『魚の塩焼き。露店で買った』

ウォリックは笑う。

「そ。美味(うま)い？」

『まずまず』

「俺ちゃんが酷(ひど)い目にあってるときに、のんきなもんだねぇ。死んでたらどうすんの」

『生きてるじゃねぇか』

ニコラスはソファから身体(からだ)を起こす。早々に食べ終わった串を、ゴミ箱に放る。カコンと音を立てて落ちる。見るともう三本、同じ串がゴミ箱の中にあった。

『つーか、狙(ねら)われてるってわかってるのにひとりで出歩くなよボケ』

「んな冷たい顔すんなって。これもお仕事なのよ」

ウォリックは隣にもうひとつあるソファに、どかっと腰を預ける。ニコラスが表情のない視線を向ける。

『あいつがマフィア殺しか？』

「どうかな。まだわかんない」

『お前はあいつを気に入ってるもんだと思ってたよ』

「そう見えた？　俺ちゃん、知らない人と仲良くするのは結構得意だかんね」

ウォリックはポールモールに火を点(つ)ける。片頬を上げて、意地悪く笑う。

「お前さんは、あいつのこと苦手だよね」

『嫌いなだけだ。なんとなく』

「はは、そんなにはっきり。わからんでもないけど」

　無口なニコラスと、多弁なダリオは真逆だ。でも一方で、その価値観は意外に似通っているのではないか、という気がしていた。もしウォリックがダリオに対して友好的なように見えたのだとすれば、それが理由だろう。

　ふたりは共に、社会のルールを歯牙（しが）にもかけない。自分の中に強固なルールがあり、それは理性よりも本能と繋（つな）がっている。ニコラスのルールは、黄昏種（トワイライツ）として生まれたことから始まる、彼の複雑な生い立ちによって形成された。一方、ダリオの方はよくわからない。だが彼にもなんらかの、首筋に食い込む鎖のような過去があることは想像できる。彼は異様に、過去に拘（こだわ）っている。「忘れる」という形で。子供の恋愛と同じだ。じっと見つめるのも、決して目を合わさないのも同じ意味だ。その対象に過剰に執着している。

　あるいはニコラスの感情は、同族嫌悪（けんお）に近いものなのかもしれない。──ま、過去がどうこうと言い出せば俺もそうなるんだろう、とウォリックは苦笑する。

「でも俺ちゃん懲（こ）りたから、今度はニックちゃんにもついてきてもらいたいね。こわい人たちから守ってちょうだいよ、相棒」

『知るか。自分の身くらい自分で守れ』

「そうすねなさんな」

『誰がだ』

　ウォリックがタバコの煙をニコラスのほうへ吐き出すと、彼は犬みたいに顔をしかめた。

　ニコラスは必ずウォリックを守る。自らの命を賭（と）してでも。

　そこにある感情はきっと、友情でも、使命感でもない。もっと彼の本質に食い込んだ、本能の一部のようなものだ。

　やはり疲労が溜（た）まっていたのだろう、ウォリックは翌日の昼ごろまで眠った。女が出てくる夢を見たような気がする。よくは覚えていない。

二日酔いだか、殴られた影響だかは知らないが、鈍い頭痛と共に目を覚ます。シャワーを浴びると、昨日銃弾が掠(かす)った肩の傷がぴりりと痛む。でもそれはただの擦り傷みたいなもので、頭を洗うのにも不自由はない。

ウォリックはニコラスと共に事務所を出て、昼食に屋台でケバブサンドを食った。それでチャド警部との約束に一〇分ほど遅れ、さらに一〇分間、余計な説教を聞き流すはめになった。

合計二〇分遅れて、本題が始まる。

「まったく。連日、ゴミ掃除に精がでるな」

チャドがショートホープの煙を吐き出しながら、顔をしかめた。警察署の一角にある、指名手配された極悪人たちのポスターで彩(いろど)られた取調室だ。

頬杖(ほおづえ)をついたウォリックは、そのまま器用に肩をすくめてみせる。

「俺たち綺麗(きれいず)好きなんすよ。な、相棒？」

『俺は関係ねぇ』

とニコラスが手振りで示した。

ウォリックはチャドに尋ねる。

「昨日の五人、お家はどちら？」

「バンデーラ組(ファミリー)」

「へえ。そこそこでかいね」

「あいつらは末端だ。つっても、有力な幹部(カポ・レジーム)の子飼いだった」

「でもその幹部(カポ・レジーム)が、マフィア殺しにやられた」

ヒステリックな女の話ではそうだった。

チャドが頷(うなず)く。

「死体が見つかったのは一昨日(おととい)だ。自宅のベッドで、額を撃ち抜かれていた。抱き枕(まくら)にしていた女もろともな。家の中にいたのは七人と一匹。生き残ったのは犬だけだった」

「そいつらは、斬(き)られちゃいねぇの？」

ウォリックとニコラスがマフィア殺しの濡(ぬ)れ衣(ぎぬ)を着せられている理由は、凶器が刃物だったことも一因だ。

「お前の得物はコルト・ガバメントだろ」

チャドはフィルターまできっちり吸ったショートホープをステンレスのチープな灰皿におしつけて、新しい一本を口にくわえる。

「チャドさん、吸い過ぎじゃない？」
「うるせぇ。もうすぐ署内が禁煙になるって話なんだよ。吸えるうちに吸っておく」
『そろそろ引退時じゃねぇか？』
　意地の悪い笑顔で手を動かしたニコラスの頭を、チャドが叩く。
「まだしつけ足りねぇクソガキどもがいるんだよ」
『なんで俺ばっか』
「で？」
　チャドにつられて、ウォリックもポールモールに火をつける。
「実際、どれくらいヤバいの？　俺ちゃん、もうしばらくバンデーラ組（ファミリー）に狙われそう？」
「モンロー組（ファミリー）が間接的に押さえてる。あくまで、間接的に、だ」
「そりゃそうだろうね」
　ダニエル・モンローはこの街の強力なバランサーだ。たったふたりの便利屋に、一方的には肩入れできない。彼からの依頼は、純粋に俺たちを守る意味もあるのだろう――と、ウォリックは考える。
　チャドはフィルター越しに深く息を吸い込み、まっ白な煙を吐き出して告げる。
「血が流れるたびにお前らは恨みを買う。具体的な恨みだ。わかるな」
「ん。チャドさんが、俺たちを心配してくれてるのはわかるよ」
「黙れ。俺はこの滅茶苦茶（めちゃくちゃ）な街を、これ以上滅茶苦茶にしたくねぇだけだ」
　ウォリックも煙を吐き、灰皿の上でポールモールを弾（はじ）く。
「昨夜は？　マフィア殺しは出た？」
「まだ報告は受けてねえ。お前が殺（や）った五人の他にはな」
「五人？」
　ウォリックが撃ったのはふたりだ。確実に死んだのはひとり。もうひとりはわからない。加えてダリオが轢（ひ）いたのもふたり。みんな死んでいたとしても、四人。数が合わない。
「五人、全員死んだの？」
「ああ。路上でふたり。ガレージで三人。確認しなかったのか？」
「昨日はけっこう、飲んじゃったからねぇ」
　ウォリックが意識を失っていたあいだに、ダリオがひとり、あるいはふたり殺したのだろうか。だとすれば数は合う。だが足を撃たれて、銃も落としていたあいつが、どうやって？
　頭の中に浮かんだつまらない想像に、ウォリックは笑う。
　――演技だったってことか？

なにが？　どこまで？

ウォリックはポールモールを灰皿に押しつけて、頭を掻（か）いた。

なんにせよ、事態は悪化し続けている。深い沼に沈み込むように、確実に。

「ロンバルディ組（ファミリー）が、ダイナマイトの取引をしていた相手を知りたいね。ひと通り洗ってんでしょ？」

それがマフィア殺しの発端だ。確かな手がかりと言えるものは、ダイナマイトしかない。

だがチャドは首を振った。

「まだ調査中だ」

「ずさんだねぇ。そいつら、記録もつけてなかったの？」

「いや。金にうるせぇ組（ファミリー）だったことは間違いない。ダイナマイトの取引記録は、何者かが持ち去ったんだろう」

「へぇ、誰だろうね」

そんなものマフィア殺しに決まっている。

やはりそいつは、私怨（しえん）で動いていると考えるのが自然だ。ダイナマイトに関する怨恨――犯人が黄昏種（トワイライツ）なら、そんなものいくらでも想像できる。

「ほかに、資料は？」

「ロンバルディ組（ファミリー）にあった紙くずはみんなかき集めてる。ガキの作文みたいな脅迫状からピンナップの切り抜きまでだ。見るか？」

「うん」

頷いて、ニコラスにちらりと視線を向けた。長話に飽きたのだろう、彼は指名手配犯の写真を貼（は）り替えて遊んでいる。どうやら髪の毛が少ない順に並べているようで、片端にはスキンヘッドの群れができている。

「ニックちゃん。悪（わり）ぃんだけど、もうちょっと遊んでてくれる？」

『もう飽きた』

「次は鼻がでかい順にでも並べるといい」

『なにが面白いんだよ、それ』

このままだと、彼がどこかにふらふらと歩み去っても不思議はない。だが今は、別行動は取りたくなかった。

「あと五分だけ。すぐに終わらせるよ」

どれだけ資料があるのかは知らないが、ぺらぺらとめくるだけであればそう時間はかからないだろう。そし

てウォリックは、一度見たものは忘れない。いつでも完全に思い出すことができる。内容の意味は、あとで考えればいい。

「こっちだ」

　とチャドが席を立った。

　そのおよそ一〇分後に、ふたりは警察署を後にした。

　花屋にヴァイオレットがあるのを見つけて、それを一束買う。

　ダリオの病室に顔を出すつもりだった。彼の見舞いに花束というのは場違いも甚だしいけれど、手ぶらというのも味気ない。

　テオ医院の二階のベッドに寝転がったダリオは暇そうに本を読んでいたが、ふたりの来訪に気づくと顔を上げた。

「よう友達（フレンド）。今日も酒の誘いか？」

「お見舞いだよ。ずいぶんやられちゃってたからね」

「おー、わざわざ悪いな」

　ダリオは栞（しおり）代わりに使い終わったブックマッチの外紙を挟み込み、本を閉じる。

「なに読んでんの？」

「ああ——ニコちゃんだっけか、あの子が気をきかせて持ってきてくれた童話だよ」

「ニナちゃんな」

「そう、ありゃいい子だ。手際（てぎわ）もいい。いい女になるぞ」

「同感だ」

　ウォリックは言って、眉（まゆ）を上げる。

「なにお前、ひょっとして泣いてたの？」

　ダリオの目じりには、微（かす）かに涙の跡がある。

「ん？　まぁな」

　ダリオは恥ずかしがる様子もなく本を掲げてみせる。

「東のほうの作品らしい。子供向けだからってなめてたが、すげえぜこれ」

　ウォリックは笑う。

　銃口を気にも留めず、脚を撃たれても愛車でふたりを轢き殺し、童話で泣く。明らかにちぐはぐだが、この男を前にしていると、自然なことのようにも思えた。

　ウォリックの肩をニコラスが叩く。彼は興味なげに手振りで示す。

『俺は出とく。なんかあったら合図しろ』

　ニコラスは、すん、と鼻をすすった。消毒用アルコールの臭いが鼻にくるのだろう。二階にはベッドが四つも並び、下よりも病院然としている。ん、とウォリックは頷いた。

「じゃ、こいつをニナちゃんにプレゼントしといてね」

　ウォリックが差し出した花束を、ニコラスはじろりと眺め、ため息をついて受け取った。肩に載せて歩き出す。

　ダリオはベッドの上で、下品な笑みを浮かべる。

「確かに褒めはしたがよ、あんな小さな子まで口説くのか？」

「口説くなら花束は自分で渡すよ。彼女はニックちゃんのペアなの。花はあんたのフィアットのために買った。色もお揃いだろ」

「車に花を贈るのか。変わってんな」

「命の恩人だからね。身をていして俺を助けてくれた」

「車は車だ。便利だが、ただの道具だ。二本の脚にゃ敵わねぇよ」

　ダリオは本当にフィアットの思い出を忘れているようでもあった。少なくとも彼に、フィアットを失ったことを悲しんでいる様子はない。

「この病院はどう？」

　と尋ねる。

　ダリオは肩をすくめてみせた。それで傷口が痛んだのか、顔をしかめる。

「気に入ってるよ。ヨハンもだ。でもあのセンセイ、口数少ねえのな」

「話し相手がいなくて暇？」

「まぁな。とはいえもちろん、質問ばっかしてくる医者よりはずっといい」

「へえ、意外だな」

「なにが」

「お前はお喋りが好きなんだと思ってたよ」

「医者との会話なんてろくなもんじゃねえだろ」

「そう？　医者は治すために喋るんだよ。仕事で、義務だ」

「それが気に入らねぇんだよ。あいつらは、だいたいが義務として身体の具合を訊いてくる。ダリオさん調子はどうですかっつってな。こっちはそれがわかんねーから高ぇ金払って診てもらってんだよ。患者任せにするんじゃねえっての、ヤブかよ」

　ウォリックは頬を緩める。確かにテオは口数が少なく、腕もいい。悪徳医者ではあるが、一部の患者

からは理想に近いのかもしれない。
　ダリオはそれから五分ほど、息をするように病院の文句を垂れ続けた。消毒用クレゾールの臭いがどことなくバルで飲んだボウモアに近いだとか、出てくる飯の味付けがいちいち薄すぎて魚の餌（えさ）みたいだとか。かといって、この医院の対応に不満はないらしく、他の病院と比べることで遠回しに感謝を示しているようにもとれた。
　ようやく彼の舌が小休止に入ったところで、ウォリックは尋ねる。
「訊きたかったんだけどさ」
「おう、なんだ？」
「昨日。なにがあったの」
「なにがって、なんだよ？」
「正直ね、あのガレージで目を覚ましたとき、十中八九お前はもう生きちゃいねぇと思ったよ。奴（やつ）らが捕えてないなら殺してる。なのにお前は生きていた。それに、俺の居場所がわかったのも不思議議だ」
　昨夜、ダリオが助けに現れたことで、彼がマフィア殺しではないかという疑念は多少強まっていた。
　この男はおそらく強くもないし、有能でもない。強運なのは認めるが、ただそれだけだ。なのに彼は危機を乗り越え、ウォリックを助けた。まだこちらからは見えていない、彼の特別な技能のようなものがあると疑うのは自然だ。
「そんなことかよ」
　ダリオは笑う。
「オレは運がいいんだ」
「みーんな、その幸運のおかげだっての？」
「なんだってみんな運だ。腹が減っていて金もないときに、リンゴの木を見つけるのも運、財布を拾うのも運、飯を奢（おご）ってくれる友達に出くわすのも運。だろ？　昨日は運よく、ヨハンが助けに来てくれた」
　それはなんとなく予想がついていた。
　ガレージの外には彼がいて、ダリオが出てくるのを待っていた。
「あの坊ちゃんが？　どうやって」
「それは知らねぇよ。オレはしばらく気を失っていたんだ。ヨハンに訊いてくれ」
　恰好（かっこう）悪いことを堂々と言う男だ。
「なんにせよ、あのガレージの場所がわかった理由がない」
「鼻がいいんだ」
「鼻？」

「そう。オレは幸運の匂(にお)いと不運の臭いを知っている。それにヨハンは――」

　と、そこで、部屋のドアがノックされた。

　ニナだ。トレイの上に、瓶に入ったオレンジジュースを二本と、花瓶に挿したヴァイオレットを載せている。

「あ、お話し中でしたか？」

　ウォリックは息を吐き出して、首を振る。

「ささやかな世間話だよ」

　ニナがほほ笑んで、窓辺に花瓶を置く。それからオレンジジュースを、ベッドのサイドテーブルに並べた。その一方を、ウォリックは手に取る。

「ありがと。気が利(き)くね」

「いえ、これはヨハンさんから」

　ウォリックがダリオを見る。

「オレが頼んだんだよ。ちょっと買い物をな。あいつはどうしてる？」

「下で、ニコとお話を」

　へえ、とダリオが、意外そうに笑った。

「あいつらの話ってのは想像できねぇな」

　ウォリックも同感だった。狂犬じみたニコラスに対し、ヨハンは品のいいマダムにでも飼われているチワワみたいだ。しかし一応、助け、助けられた関係なのでそういった儀礼的やり取りがあるのだろう。

　ニナがぺこりと頭を下げて、部屋を出てから、ダリオが話題を変える。

「ヨハンはな、妹を捜すためにこの街にきたんだよ。あいつはどうも、妹が生きがいみたいなところがある」

「前の写真に写ってた子？」

「それだ。少し前に面倒くせぇ事情で別れちまってな。最近やっと、この街にいることがわかった」

　言い方からも、わざわざこんな街に来なくてはいけなかった事実からも、写真の少女が穏やかでない立場にあるのだろうと推測はつく。

「ヨハンちゃんは自由だからこの街に来た――って、言ってたね」

「あいつが？　そんなこと言ったのか？」

「お前がだよ。本当になんでも忘れるんだな」

「そうかい。まあ、確かに言いそうなことだ」

「どゆこと？」

「そのままだよ」

　さすがにダリオも怪我で体力を失っているのだろう、眠たそうなあくびをひとつした。
　それからどこかぼんやりした声で続ける。
「自由っつってもよ、いろいろ不自由がある。生きてりゃ腹も減るし、眠くもなる。鉛玉にぶつかればたまに死ぬ」
「その通りだ。お前は知らないと思ってたけどね」
「誰だって首から鎖をぶら下げてんだ。不自由の先っぽを、どこにひっかけるのかを選べたなら、それが自由だ。あいつは妹にそれをひっかけた。わかるか？」
「とてもよくわかる」
「なら、そういうことだ」
　ダリオは目を閉じる。
「その子、見つけられそうなの？」
　とウォリックは尋ねる。
　返事は期待していなかったが、ダリオは、むにゃむにゃと答えた。
「必ず見つける。オレは運がいいんだ」
「どうやって？」
「それは知らん。ヨハンに訊いてくれ」
　言い終わったすぐあとに、彼は寝息をたて始める。
　喋りたいことだけを喋り、すぐに寝てしまう。まるで子供だ。
　ウォリックは、ダリオがへんに寝返りを打っても腕が当たらないよう、サイドテーブルごとオレンジジュースの位置をずらした。それからシーツをかけてやり、病室をあとにした。

　一階に降りても、ニコラスとヨハンはいなかった。代わりに、テオが壁にもたれて紫煙を吐き出していた。
「ニックちゃんは？」
「知らん」
「ヨハンちゃんは？」
「それも知らん。俺は奴らの保護者じゃない」
　ウォリックも壁にもたれかかり、ポールモールをポケットから出す。
「ここのところ世話になりっぱなしだな。礼を言うよ」
「いらん。礼の代わりに金を貰っている。それに大した手間ではない。あれの場合、そう面倒な怪我じゃ

ない」

「片足を撃たれて、それから車でガレージに突っ込んでるんだ。大した怪我じゃないってこともないでしょ」

「それでも尾を引くような怪我はひとつもない」

「見るからにしぶとそうだかんね。運がいいんだろう、よかった」

「それを言うなら、あいつのツレのほうだ」

「ヨハンちゃん？」

　テオは頷く。

「診察に一晩。徹夜は堪(こた)える」

「そんなに悪かったの？」

「今も悪い。あれは治らんよ。今は運よく動いているだけだ。お前の片割れといい、奴らはまったく面倒な身体をしている」

　ウォリックは怪訝(けげん)そうに眉を下げる。

「タグ付き？」

　テオは無表情で煙をふかす。

「知らずに連れてきたのか？　呆れたな」

　ウォリックは頬をかく。

　――鼻がいいんだ。

　とダリオは言った。

　――オレは幸運の匂いと不運の臭いを知っている。それにヨハンは。

　いったいヨハンには、どんな臭いがわかるというのだろう。

「どれくらい悪いの？　あの坊ちゃん」

「二年後にも生きていたなら、奇跡と呼べるくらいの幸運だ」

「どうして。あの夜の怪我じゃないよな？」

「奇妙な代償の影響もある。だが相当無茶なセレブレの使い方をしてきたことが主な理由だ」

　セレブレのせいで弱るタグ付きは多い。そ、とウォリックは軽く返す。

「代償ってのは？」

　テオはタバコを持った手で、前髪の辺りを指した。

「あいつのここ、ひと房だけ白かっただろう」

「思春期なんじゃねえの？　恰好いいと思っちゃったんでしょ」

「あいつの肉体はばらばらに歳(とし)をとる」

　理解し難い話だった。

　ゆっくり咀嚼(そしゃく)してから、ウォリックは尋ねる。

「髪の一部だけ、爺(じい)さんになってるってわけ？」

「髪だけなら、知ったことじゃないがな。あれはまず右手だけが、次に左足だけが、という具合に歳をとる。心臓が急速に老いれば、もちろん寿命はずっと短くなる。元々歪(いびつ)な肉体が、過剰摂取(オーバードーズ)を繰り返せば――わかるな？」

　ウォリックは煙を吐き出し、それが消えていく様子を眺める。

「悪かったね、また治せる患者じゃなくって」

「まったくだ」

　テオは手にした灰皿に、半分ほど残ったタバコを押しつけて、ウォリックに背を向ける。

「ちょっと。灰皿がなくなると、俺ちゃん困っちゃうよ？」

「知るか。床は汚すなよ」

　テオはそのまま、奥の部屋へと入っていく。

　ウォリックは行き場を失ったポールモールを眺めながら、ニコラスのことを考えた。彼はヨハンと会っているはずだ。

　一五分ほど前だ。

　ニコラスが階下に降りると同時に、一階奥の診察室からニナが出てきた。彼女はニコラスの姿を見て、微笑(ほほえ)む。

「あ。ちょうどよかった。先生が、これをって」

　彼女は胸に抱くように持っていた、二本のプラスチックケースを差し出す。

　セレブレだ。促進剤(アッパー)と抑制剤(ダウナー)。黄昏種(トワイライツ)の生命線にして、死の要因。

　セレブレは高価なものだ。薬が貴重というよりは、「高い」こと自体に意味がある。セレブレは極めて直接的に、黄昏種(トワイライツ)を健常者(ノーマル)のルールに縛りつける。黄昏種(トワイライツ)にとってセレブレは「健常者(ノーマル)の情けによって与

えられる命の残高」でなければならず、簡単に購入できてしまえばそのバランスが崩れる。
　だから通常、黄昏種（トワイライツ）を飼えるのは、そのセレブレの管理を生業（なりわい）とする有力なマフィアか金持ちだけだ。ウォリックにそれほどの金も権力もないため、こうしてテオが独自ルートで入手したものを横流ししてもらうことになる。
『先生の手伝いは、もういいのか？』
　ニコラスが手で示す言葉を、ニナは完璧（かんぺき）に理解する。
「うん。今入院してるのは、ダリオさんだけだから。容態も安定してるし。先生は奥で他のカルテとにらめっこしてるよ」
　こくり、とニコラスは頷く。
　それから彼女の視線が、ニコラスの顔の少し脇（わき）に逸（そ）れていることに気づき、ヴァイオレットの花束を思い出した。
『ウォリックからだ』
　とニコラスはその花束を差し出す。
「え？　私に？」
『上で寝ている野郎の見舞いだとよ。でも野郎に花束なんてもんは、豚に真珠よりも意味がねえ。貰っとけ』
「そういうわけにはいかないよ。でも、病室にお花を飾れるなら、私も嬉（うれ）しいな。ありがとう」
　ニナが両手を伸ばすので、ニコラスは花束を宙に持ち上げる。反射的にニナが跳びあがる。でもぎりぎり、指は花束に届かない。彼女の着地と同時に花束を下ろし、ジャンプと共にまた上げて、と繰り返していると、彼女は「うー」と唸（うな）った。
　ニコラスにしてみれば、別にニナが嫌いなわけでも、困らせたいわけでもない。ただ困った表情の彼女はどことなく楽しそうで、しばしばこういう風にからかうことにしている。本格的に彼女が不機嫌になる前に、ニコラスは『飽きた』と呟（つぶや）いて――声には出さずに唇だけを動かして――彼女の胸にヴァイオレットを押しつけた。
　ニナは嬉しそうに笑って、花束を優しく抱く。
「ありがと」
　と彼女は言う。
　ニコラスは他人の心の機微に注意を払う方ではないが、ニナの言葉の真意は理解できた。礼を口にしたあとで失言に気づいたように、少しだけうつむいた理由も。
　花束の礼ならウォリックに言えばいい。そうではなく、ニナは彼女とニコラスの関係性に感謝したのだろ

う。ニコラスにとっても彼女と過ごすのは嫌な時間ではないが、義務的な仕事の一種だともいえる。

　彼女の本心には気づかなかったふりをして、ニコラスは中指の先で、軽く彼女の額を弾く。

『礼ならウォリックに言え』

「うん。あ、でも、ダリオさんへのお花でお礼を言うのも、なんか変だね」

　ふふ、と彼女は笑う。

　まるで「人間ごっこ」をしているようだ、とニコラスは思う。黄昏種（トワイライツ）である自分が――本能の深いところにタグをぶらさげた自分が。とはいえそのことが心地よいとも悲しいとも思わない。健常者（ノーマル）になりたいとも思ったことはない。子供が犬や猫の鳴き声を真似（まね）て遊ぶのと同じようなものだろう、ただのお遊戯に暇つぶし以上の意味はない。

「いい香り。花瓶、用意するね」

　とニナがまた笑ったとき、入口の扉が開いた。ニコラスはそちらを睨（にら）む。

「ニコラスさん」

　見覚えのある男が立っている。そのひょろりとした体格には明らかに大きすぎるダウンジャケットを着た青年だった。

「あの夜は、ありがとうございました」

　ヨハンはびくびくした様子で軽く頭を下げた。白メッシュの入った真（ま）っ直（す）ぐな前髪がさらりと揺れる。

『お前を助けたのは俺じゃねえ』

　ヨハンは眉を上げ、申し訳なさげに頬をかく。

「すみません、手話はわからないんです」

　ニコラスは、ふん、と鼻から息を吐いた。別に、この青年と会話したいとも思わない。彼は右手に紙袋を抱えている。ダリオになにか買ってきたのだろう。さっさと行け、という意味をこめて、天井を指さした。

「あ、はい、ありがとうございます」

　ヨハンはまた頭を下げ、ニコラスの横を通り過ぎようとし――そこで足を止めた。

　ニコラスは軽く緊張し、片目を細める。

　振り返ったヨハンも、瞼（まぶた）を薄く閉じ、ニコラスを見つめる。

「ニナさん、すみませんがこれ、ダリオに持っていってもらえますか？　オレンジジュースが二本入っているので、片方はウォリックさんに」

　ニコラスは、思考したわけではなかったが、肌で違和感を覚えた。

　子供と言っても差し支えのないニナに敬語を使うこと。ダリオを呼び捨てにしたこと。ウォリックがいると確信した様子で語ったこと。だいたいはその辺りに。

それでもなお、彼に対する興味はさほどなかった。一方で、ヨハンの方がニコラスになんらかの興味を持ったのはわかった。

「え？　あ、はい」

ニコラスは苦労して、花束と一緒に紙袋を抱きかかえる。持つのを手伝ってやろうか、と思ったが、そうする前にヨハンは言った。

「すみませんニコラスさん、少しだけお時間をいただけませんか？」

ニコラスは首を傾(かし)げる。なぜ、と言葉を発するのも面倒だった。

「お願いします。お尋ねしたいことがあります。少し、外に」

彼の長い前髪の向こうに見える、尖(とが)った目つきには、殺意に似た何かがあった。だがそれは殺意ではない。本物の殺意であればすぐにわかる。

ニコラスはウォリックの安全についてごく短い時間、思考する。一応、守れというようなことを言われた気はする。であればここを離れるべきではない。

「すぐに済みます。前の通りへ」

ヨハンは背を向けて歩き出す。

ニコラスはふうと息を吐き出した。それから、彼のあとに続く。

そう離れなければ、病院で起こった変化を見逃しはしないだろう。ニコラスは目がいい。銃弾で割れた窓にも気づける。

今までになく堂々とした歩調で進むヨハンをこのまま無視すればどうなるだろう、と好奇心が言ったが、それよりも彼の目つきの意味が気になっていた。

テオ医院を出てすぐにヨハンは足を止めたが、ニコラスは立ち止まらなかった。二〇ヤードほど離れたところにチキンの屋台があるのを思い出したのだ。ケバブサンドひとつでは、昼食には足りない。

今度はニコラスがヨハンを引きつれて歩く形になり、骨付きのモモ肉に香辛料をまぶして焼いた食いものを買う。ヨハンにも一応、『そこそこいけるぞ』と勧めた。一方的な手話で伝わったようだったが、彼は首を振る。

ニコラスは医院に引き返しながら、大口でチキンに噛(か)みつく。皮がべろりとはがれて、それを吸い込むように口に含む。味覚は鈍い方だが、スパイスと焦(こ)げた油は匂いだけでも美味い。

ヨハンがようやく喋り始めたことに気づき、その唇を読む。

「――から離れていただいたのは礼を言います。あんなに煙いと、お喋りもできない」

彼の言葉にニコラスは答えない。店先から移動したのは後続の客がニコラスのタグを見て嫌そうな顔

をしたからで、店主に迷惑をかけないためだったが、手話の通じないヨハンにそれを伝えるのは面倒だ。
　医院まであと五ヤードというところで足を止めて、ヨハンは切り出した。
「この街には、妹を捜すために来たんです」
　ニコラスは片足の裏を塀につけ、体重を預けている。チキンの持ち手あたりに歯を立てて、顎（あご）で先を促す。
「この子です。知りませんか？」
　彼は一枚の写真を差し出した。青年と少女が写っている。一方はヨハンで、もう一方は知らない。彼の言う妹だろう。一二、三歳の少女で、天使の翼のようなものを模（かたど）った、銀色のネックレスをしている。
　見覚えはなかった。ニコラスは首を振る。
「嘘（うそ）だ」
　と、ヨハンは鋭い口調で言う。
「あなたからは妹の匂いがする」
　くんくんと、ニコラスは自分の腕を嗅（か）いでみせる。今はチキンの匂いしかしない。
　ヨハンの目は真剣だった。
「必ず知っているはずです。僕は、匂いは間違えません。昨日はそれで、ダリオも、ウォリックさんも見つけました」
　そう言われても、知らないものは知らない。
「実を言えば、あの病院からも少しだけ、妹の匂いがします。でも薬品が強すぎて、はっきりとはわからない。なにか思い当たりませんか？」
　まったく覚えはない。
　テオ医院の少女といえば、ニナくらいしか思い当たらない。あとはアルコールの臭いをまき散らす無法者ばかりだ。
　わからない、とニコラスは手を振る。
「僕は、嘘は嫌いです」
　嘘じゃない。本当に知らない。
　ニコラスは、面倒で嘆息する。チキンはもうほとんど棒切れになっていた。腹はそこそこ満たされた。残った骨を近場のゴミ溜（た）めに放る。そういえばこの青年を見つけたのも廃棄場だったなと、指先の汚れを塀になすりつけながら思い出す。しかし、思い出したところで意味もないことだった。
　ヨハンを横目で見る。口調が早まっており、読み取りづらい。
『用事はそれだけか？』

そのジェスチャーに、ヨハンは訝(いぶか)しむように首を傾げた。

ニコラスの言葉は彼に届かない。もとより伝えるつもりもなかった。

もういいだろう。院内に戻ろうと、塀に預けていた片足を離す。ヨハンに背を向けると、後ろから声を感じた。

「待て！」

と、叫んだのだろう。あいにく口元は見ていなかったが。

彼は体格に対して明らかに大きいダウンジャケットの下に手を突っ込む。銃？　あるいはナイフ。なんにせよ対面した相手を壊すことを目的としたなにかに触れている。それが瞳(ひとみ)の種類でわかる。

殺気だ。しかし鈍い。あくびが出る。

『それを抜く覚悟ができたらまた遊びにきな』

声には出さずにそう告げて、ニコラスは医院に向かって歩き出す。やはりヨハンはこちらを睨みつけるだけで、殺意は具体的な形にならなかった。

吸い殻は結局、テオを追いかけて処理した。

奥の一室から診察室に戻るドアをあけると、ちょうど向かいのドアも開き、ニコラスが顔を見せた。

ウォリックは軽く笑って、彼に手を振る。

「おかえり、ニックちゃん。ヨハンちゃんとケンカしなかった？」

『殴り合っちゃいねえ』

「そ。なんか微妙な返事ね」

ドアを閉める前に、顔だけ隣の部屋に突っこんで、告げる。

「じゃあね、センセ。また来るよ」

「もう来るな。お前の傷は勝手に治る」

「そじゃなくて。忘れ物したから」

ウォリックは手をひらひらと振り、ドアを閉める。それから「取りに戻るから付き合ってね」とニコラスに告げる。

　隣に並んだニコラスの顔を確認し、あれ、と目を丸くした。

「お前さん、なんか食べてきた？」

　そういえば、ヨエルばあちゃんから受けた依頼、報酬の回収をニコラスに任せたきりだった。あの夜はダリオと飲んだせいで記憶があやふやだが、たぶんまだ受け取っていない。

　ニコラスは唇を拭（ぬぐ）う。ペッパーがついている。

『正当な報酬だ。あんときはほとんど俺が働いた』

「勝手に横取りしたんでしょ。おかげで俺は子守りを押しつけられてよ」

『お前はあいつと仲良くしたかったんじゃないのか？　添い寝は得意だろ』

「俺ちゃんの肉体労働はニックちゃんのより高いのよ、報酬を貰わなきゃ。美味かった？　どこのチキンよ？　俺ちゃんも食いてぇんだけど」

　テオ医院を出たところで、ニコラスが左右を見渡す。

「なに、屋台が消えちゃった？」

　襲撃の気配はない。少なくとも、ウォリックはなにも感じない。

『ヨハンがいない』

「へぇ」

　ウォリックも周囲を見渡し、それから気づいた。二階の窓がひとつ開いている。

「上。窓から入ったのかもね」

『窓？』

「お前さんも、急いでたらやるでしょ」

　ニコラスの怪訝そうな表情を見て、気づく。なんとなく彼は理解しているのではないかと思っていたが。

「あの坊ちゃんの首にもタグがぶら下がってるらしいよ。でかいダウンジャケットに隠れてたけどね」

『へぇ』

　ニコラスが攻撃的な笑みを浮かべる。それは、空腹の肉食獣のような。

　ウォリックは苦笑する。

「顔、怖いよ。どったのニック」

『強引にでも抜かせておけばよかった』

「やっぱケンカしてたんじゃないでしょうね。俺ちゃん心配よ？」

『もう一歩だった』

「あ、そ」

『おしかった』

「ちょっとだけ、平和主義に目覚めてくんないもんかね」

『知ってるか？　人間以外じゃ、平和と戦争は同じ意味だ』

　お前らも人間でしょ、と言おうとして、止(や)めた。ウォリックもヨハンに刃(やいば)を抜かせるつもりでいる。今夜か、明日になるか。そう遠くない未来に。

　さっさとヨハンが刃を抜いていたなら、話はもう少し単純だったかもしれない。あるいはあの夜に、彼を拾わなければ。でもそうはならなかった。

　不思議なことだ、とウォリックは思う。

　なぜあの夜、ヨハンは一方的に暴行を受けたのだろう？　彼が戦っていたなら、たった三人のギャングなんか相手にならないはずだ。三原則を守った？　そうじゃないはずだ。もっと、なにか別の──

　理由が、と考えて、つい笑う。

　──いや。小賢(こざか)しくなっちゃだめなんだ。この話は。

　ヨハンは黄昏種(トワイライツ)だ。おそらくはマフィア殺しの正体でもある。だが頭をよぎったのは、彼よりもダリオのことだった。

　であれば、理性も論理もいらない。銃口を気にも留めず、足を撃たれても愛車でふたりを轢き殺し、童話で泣く。相手はそういう馬鹿(ばか)なんだ。

　空を見上げると雲が出てきたようで、夕暮れがそれを鈍い黄金色(こがねいろ)に染めていた。湿度が高くなってきたな、とウォリックは失った左目を押さえた。

#4

事務所を目指して、人のいない裏通りを歩いていた。
ニコラスとの会話も、とくにない。ウォリックはいくつかのことを思い出していた。警察署で見たロンバルディ組の資料。ダリオから聞いた話。彼が落としたヨハンと少女の写真。それからある女性が最期に遺した依頼――
狭い角を曲がってすぐ、ニコラスがすん、と鼻を鳴らす。目つきが鋭い。ウォリックは左の脇に手をやる。ニコラスがジャケットのポケットに手を突っ込み、セレブレを取り出す。蓋を捻ろうと握る。そこで、ケースが何かに弾かれた。
手元から離れたケースは真っ二つに切られ、宙で躍り、地面を転がる。中身がばらばらと散らばった。小鳥の声のような小さな音をたてて、塀にぶつかった投げナイフが転がる。
またマフィア殺しの濡れ衣か。それとも。
なんにせよ相手は黄昏種だ。ニコラスが躊躇いなくセレブレを服用しようとした、その一点だけでも充分証明になる。
次に飛んできたのは銃弾だった。少しずつ違う角度から四発。敵は高い場所――おそらく屋根の上を移動しながら、極めて精密にニコラスを狙撃する。ニコラスは腕を振り、それらを弾く。その手には刀を握っていた。ギィンと金属音が狭い小路に反響する。ウォリックにはまだ敵の姿を捉えることさえできなかったが、ニコラスの視線の動きで位置を予想し、彼の邪魔にならない立ち位置を探す。
「どうよ？　やれそう？」
『黙れ』
ニコラスが唇の右端を過剰に持ち上げ、笑う。
『楽しんでんだよ。邪魔すんな』
見るとニコラスのカーゴパンツが裂け、血が滲んでいた。左足のふくらはぎだ。先ほどの銃撃の一発が掠めていたのだろう。
――やばいね。
ウォリックは内心で冷や汗をかく。深い傷ではなさそうだが、敵の攻撃をかわせなかった、その事実が致命傷にもなり得る。ニコラスがひとりきりならあの傷は負わなかった。弾が到着する前に飛び退くことができたはずだ。強引にでもその場で銃弾を叩き落とすことを選んだのは、後ろにいたウォリックを守るためだ。
――こっちを狙われたら、ジリ貧だ。

　ニコラスはウォリックの前から移動できない。自慢の刀も敵に届かない。防戦一方ならいつかは失点だってするだろう。今のところ、この戦いのルールブックにタイムアウトの記載はない。

　敵は遠距離からの狙撃を続けるだろうと踏んでいた。おそらくはウォリックを狙って。向こうだけに有利なこの均衡を崩す理由はない。だが、違った。

　追加で銃弾が二発。投げナイフ一本。共にまっすぐニコラスを狙っている。次に飛んできたのは、襲撃者自身だった。

　壁を蹴(け)ったのだろう、その影は高速でニコラスに肉薄する。間近から先端に錘(おもり)のついたワイヤーを投げる。ひゅんと空(くう)を切る音。それをニコラスが刀で絡(から)めとり、引く。敵は引かれるままさらに地を蹴って跳び、宙でワイヤーを離す。ウォリックの目が次に捉えたのは、つばぜり合いをする二人だった。ニコラスはもちろん刀。相手は少し湾曲した大振りのコンバットナイフ。そのコンバットナイフがいつ抜かれたのかも、ウォリックにはわからなかった。

　──俺は、狙われちゃいない？

　三原則を守っているのか、それとも黄昏種(トワイライツ)には少なくないバトルマニアの類(たぐい)か。ともかく力対力の戦いでは、ニコラスはそうそう負けない。簡単に相手のナイフを弾き飛ばす。

　──いや、違う。

　敵は意図的にそのナイフを手放したようだ。そう理解した時には発砲音が聞こえていた。──くそ、目が追いつかない。ともかく相手はほぼゼロ距離でニコラスに向かって発砲した。ニコラスは、どんな反射神経なのかそれを躱(かわ)している。バランスの崩れた身体(からだ)で強引にぶん殴る。その拳(こぶし)も空を切る。敵は三ヤードほど離れた位置まで跳び退き、そこに落ちていたナイフを拾い上げ、ゆっくりと立ち上がる。

　それでようやく、彼の顔が見えた。

　ヨハン。

　彼にはほとんど表情がなかった。その瞳(ひとみ)はニコラスを見てさえいない。彼は眠ってでもいるように、じっと目を閉じている。ニコラスは刀に絡みついたままだったワイヤーをむしり取り、放り投げる。

　彼がヨハンに飛びかかる前に、ウォリックが前に出た。ニコラスが肩を摑(つか)む。振り返ってウォリックは囁(ささや)く。

「盛り上がってるとこ悪いんだけどさ、今はまだ俺の番だ」

『そいつとやり合えば死ぬぞ』

「どうだろうね。俺ちゃん、けっこうしぶといよ？」

　ウォリックは再び、ヨハンに向き直る。

「それにさ、ほら、俺たち信用第一の便利屋だから。依頼には誠実じゃなくっちゃね」

　ニコラスには背を向けている。その言葉は見えなかったはずだ。でもともかく、彼はもうウォリックを止め

なかった。

　そのままヨハンに歩み寄る。ようやくヨハンが瞼（まぶた）を持ち上げ、驚いた風な表情を浮かべる。それでもウォリックは歩みを止めない。近く、近く、尖（とが）ったナイフの先に身体を預けるように。ヨハンの方がナイフを引いた。

「どったの、ヨハンちゃん。俺たちを殺しに来たんじゃないの？」

　しばらくの沈黙。ウォリックはじっと、彼の口が開くのを待つ。

　やがて張りつめた声で、ヨハンが言った。

「あなたのほうは、まだ許可が下りていません」

「ケンカをするのにもいちいち、お兄ちゃんの許可がいるのか？」

「知っているでしょう。黄昏種（トワイライツ）は、そういう生き物です」

「でも、お前らは違う」

　ヨハンがマフィア殺しだったなら、彼は三原則を無視して、エルガストルムのバランスを崩している。

「あの夜、チンピラに良いようにされてたのも許可がなかったから？」

「ダリオからは、必要なときのほかは暴れるなと言われています」

「へぇ。あいつがそんなに理性的だとは思わなかったな」

「気まぐれに出した指示でしょう。でも、彼には本能的に正しい方向を嗅（か）ぎわける鼻があります」

「どうかな。勘違いじゃなきゃいいけど」

　ウォリックはまた思い出す。

　ロンバルディ組（ファミリー）の資料。ヨハンと、少女が映った写真。

　慣れ親しんだ商売用の軽薄な笑みを浮かべ、告げる。

「捜してるのは、ソフィアちゃん？」

　首筋の、もう傷（いた）まない、だが痕（あと）だけは残った二本の傷を意識する。

　ソフィア。その名前は、ロンバルディ組（ファミリー）の資料でも読んだ。人員リストじゃない。取り扱っている商品の一覧に、ドラッグや娼婦（しょうふ）なんかと一緒に、ダイナマイトのひとつとして載っていた。

　ヨハンが笑う。左右の目の大きさを変えて、歪（いびつ）に。

「そうか。あなたのほうだったのか」

「ニックより、俺ちゃんの方がもてるんだ」

「そうじゃない」

　ゆっくりと、ヨハンは首を振る。

「あなたはちょっと、臭(にお)いすぎる」

「ひどいね。ま、綺麗(きれい)好(ず)きだとはいわないけどさ」

「香水のことです。いくつもいくつも重なって、あの子の匂(にお)いがわからなかった」

　ソフィアがいたのは、ひと月も前のことだ。

　その匂いが、ヨハンにはわかるというのか。無茶な話だ。

　ウォリックは首を傾(かし)げる。

「俺たちは逃げも隠れもしない。今夜、ダリオに会いに行く。ここは引いてくんない？」

「残念ですが、そういうわけには」

「じゃあどうするってんだ、坊ちゃん。お兄ちゃんの命令を無視して、俺の胸にナイフを突き立てるか？」

　ヨハンは沈黙する。

　困ったような彼の表情は幼い。普段の臆病(おくびょう)な様子も、おそらくは演技ではないのだろう。

「引けよ、少年。こっからしばらくは大人の時間だ。安心しな、うちのニックだってやる気満々みたいだから。すぐに楽しく遊びまわれるさ」

　ヨハンはしばらく、ウォリックの顔を睨(にら)みつけていた。

　でもふいと背を向けて歩き出す。ウォリックも彼に背を向けた。

　ニコラスが、真下を指さす。

『ここでやらせろよ』

「慌(あわ)てんなって。依頼は、誠実に」

『依頼ってなんのことだよ？』

「あれ？　言ってなかったっけ？」

　ソフィアから受けた依頼だ。

　――あと三年、私をかくまって。

　彼女は自分の死を充分に自覚していたはずだ。なにか奇跡が起きて生き長らえるとも期待していなかった。だからなぜそんな依頼を遺したのか、ずいぶん不思議だった。

　けれど、ようやく意味がわかった。

　もう引き受けてしまった依頼だ。わかってしまったなら、従うしかない。

　ニコラスに事態の全貌(ぜんぼう)を理解させるのには少し手間取った。普段ならそもそも興味も示さなそうなことだが、今回はおあずけくらって虫の居所が悪かったのだろう、八つ当たりのように言ってくる。

『そもそもおかしいだろ。ソフィアって女は、あのガキより一〇も歳を食ってた。妹なわけがない』

「だから、さっきから言ってんじゃん。ヨハンちゃんはちょっと変わった代償を持ってんの。身体の部分がばらばらに歳を取るんだってさ。あのダウンジャケットの下を覗いてみたら、右腕はおじいちゃんで、左腕は幼児かもよ？」

『つまりあいつは、実年齢よりずっと顔がガキだってことか？』

「どっちかっていうと、反対じゃない？　たぶんソフィアちゃんも、同じ代償を持ってた。だから年齢のわりには顔つきが大人びてたんだよ」

　思えば彼女は、過剰に肌を見せようとしなかった。遺体は服を着たまま焼いてくれと頼まれたことを覚えている。ウォリックは自分と彼女がそう違わない歳だと思っていたが、きっと彼女は一〇歳以上も若かった。

　女性にとっては、とくに残酷な代償だろう。もしも彼女が隣にいたなら、慰めてやることもできた。でも今となっては、もうどうしようもない。

『じゃあどうして、あのガキはあんな写真で聞き込みしてたんだよ。バカなのか？』

「ニックちゃんもあれ見たの？　問題はそこなんだよねぇ」

　そう答えながら、理由はもうだいたい予想がついていた。

　ヨハンの捜査はその特殊な代償を前提としていなかった。であればきっと、ソフィアが彼に代償を隠していた。

　以前、彼女の症状について、テオから聞いた言葉を思い出す。

　――外見はそれほどでもないが、内臓がほとんど壊れている。

　あれはセレブレの過剰摂取の影響を指しているのだと思っていた。でも考えてみれば、彼女の代償について語っていたのかもしれない。ソフィアはまず内側から歳を取った。だとすればヨハン相手には、上手く代償を隠せていても不思議ではない。

　ニコラスは、そろそろこの会話にも飽きてきたのか、ぞんざいな手つきで告げてくる。

『で、結局あいつらがマフィア殺しなのか？』

「ほとんど決まりだ。まずロンバルディ組を潰し、次にそいつらと取り引きのあった組に手を出してる。みんな、ソフィアちゃんを取り戻すためでしょ」

『つまり、あいつらをぶっ殺せば終わりだ』

「ん。ニックちゃんは、それだけわかってりゃ充分」

　頷いて、ウォリックはニコラスの左脚に目をやる。先ほど負傷したふくらはぎから、血が流れ続けている。思いのほか傷は深そうだ。

「それ、大丈夫なの？」
『俺はお前みてぇにやわじゃねえ』
「あとでニナちゃんに包帯まきまきしてもらっといでよ」
　ニコラスは答えず、ただ頭を掻(か)いた。
　あとは軽い雑談を交わしながら事務所に戻る。ドアを開けると同時に、電話のベルが鳴り始めた。
　日が暮れてから鳴る電話はたいてい厄介事だ。そう思いながら受話器を取る。相手はモンロー組(ファミリー)の古株、マイルズだった。モンローと似た迫力を持つ人だが、いくぶん穏やかでウォリックたちとは親しい。想像した中ではまだましな相手だ。とはいえわざわざ彼が電話をよこす時点で厄介事に変わりはない。
「珍しいっすね。マイルズ兄から連絡くれるなんて」
「総代の配慮だよ。やんちゃな子たちの様子が気がかりで夜も眠れないとさ」
　よく言うよ、とウォリックは内心で苦笑する。
「どうなってる？」
「目星はついてますよ」
　手短に告げると、受話器の向こうでマイルズが、ふっと笑った。
「さすがだな、便利屋」
「もちろん。俺たち真面目(まじめ)がうりなんでね」
「お片づけも任せていいな？」
　はい、とウォリックは返す。
　マフィアは世界でも数少ない、合理的で打算的な理由から報復を行う組織だ。やられたら、やりかえせ。暴力の世界では無敵でいろ。強者の称号がマフィアの根本的な商売道具だと言ってもいい。だからどの組(ファミリー)も自分のところで報復を成し遂げたがる。
　マフィア殺しは色々な組(ファミリー)に手を出しすぎた。その首を大勢が狙っている。報復を誰が行うのかという点も今後の厄介事の火種になり得る。もちろんエルガストルム内の力関係でいえばモンロー組(ファミリー)というのは文句のつけようのない報復者だが、それよりもウォリックやニコラスのような街のチンピラがうっかり殺すほうがより穏便だ。ダニエル・モンローが生け捕りという条件をつけなかったのは、そのあたりが理由だろう。
「明日にはマフィア殺しを詰め込んだプレゼントボックスを手配できる予定ですよ。ああ、そうだ。モンローさんは、ヴァイオレットはお好きですか？」
「ん？」
「花っすよ。売店でたまたま、綺麗なのを見つけたもんですから。ほら、あんまり血が臭いすぎてもいけな

い」

　マイルズは数秒の間をあけた。意図を測りかねたのだろう。だが結局、詮索（せんさく）はせず穏やかに返した。

「勝手にしろ。明日すべて済んだら連絡をよこせ」

「もし遅れたら、どうなります？」

　答えはわかりきっていたが、一応尋ねた。

「あちこちの組（ファミリー）が鬱憤（うっぷん）を溜（た）めてる。爆発すれば、死体の数が一桁（けた）増える。その中に誰がカウントされるかまでは、コントロールしきれんかもな」

　遅れるなよ、と優しく言い残して、マイルズは電話を切った。

　世知辛いねえと呟（つぶや）き、ウォリックも電話を置く。元々、そんなつもりもなかったが、指だけ切り落としてお終（しま）いというわけにはいかないようだ。

　大抵のものには、良い面と悪い面がある。帰宅早々、マフィア組織の男から電話を受ける生活というのにはため息が漏れるが、自分の立場を確認させてくれる。ものを忘れないというのも同じだ。まず良い面。探し物には便利だ。自分が仕舞ったものであればすべて場所を覚えている。次に悪い面。だから、部屋を片付けようという気にならない。

　ウォリックは階下に降り、キッチンに並ぶフックの、フライ返しの隣にとりあえずひっかけてそのままだったネックレスを手に取った。天使のような翼を模した、シルバーのネックレスだ。

『忘れ物ってそれかよ』

　壁に寄りかかったニコラスが面倒くさそうに唇をひん曲げている。

「依頼の報酬だ。先払いで貰（もら）った」

『どう見ても安モンだろ』

　ウォリックはネックレスを人差し指にひっかけて、くるくると回した。

「確かにちょっと、値引きすぎたかもね。別に好みの子でもなかったんだけど。ま、引き受けちゃったんだから仕方ない」

『あの女はもう死んでる』

「うん。死んだ女の頼みだ。この世でいちばん守られるべき依頼だよ」

『よくわからねえな。結局、どんな依頼だったんだ？』

　ウォリックは、その質問には答えず、ネックレスを首にかける。

「そうだ。ひとつだけ、好きなところもあったな。俺はね、これから死ぬとわかっていてもばっちり化粧する女がいい。見栄（みえ）は最後まで張ってこそ意味がある」

『おい答えろよ。俺はどうすりゃいい？』

「簡単だ」

　相棒の黒い瞳を見て、ウォリックはにっと笑う。

「ニックがさっき言ったとおり。あいつらがマフィア殺しで、ぶっ殺せば終わりだ」

　ニコラスも笑う。狂気じみた表情で。

『ああ、わかりやすくていい』

　死んだ女の依頼は完遂する。マフィアのボスからの半ば強制的な依頼も、もちろん。今回に関していえばそのふたつは矛盾しない。それは、幸運なことだろうか？

「綺麗に終わらせてやる義理はない。ただ依頼どおり忠実にやればいい。過不足なく。いつもと同じだよ、相棒」

　言い終えるよりも早く、ニコラスは歩き出している。ウォリックもあとに続く。事務所を出たところで一度だけ、少しきついネックレスに手をあてた。

　ヨハンが病室に戻ったとき、ダリオはいびきをかいて眠っていた。

　この男のことが、ヨハンは今でもよくわからない。出会ってからもう一年といったところだが何を考えているのか未(いま)だに想像できない。

　彼がとんでもない馬鹿(ばか)に見えることもあった。ヨハンは自分に社会的な常識がないと認めているが、それでも、ダリオに比べればよほどましなのではないかという気がした。

　一方で、彼に対して純粋な尊敬の念もある。

　少なくとも、自分たちはまだ生きている。

　ヨハンはダリオによって生かされている。彼の手に渡るまでの劣悪な環境に比べれば、ずっと心地よく。それはこの男だけが成し得たことだ。戦えば弱く、頭が切れるわけでもない、だが抜群の嗅覚(きゅうかく)を持つこの男だけが。

　ヨハンは鼻がいい。

　黄昏種(トワイライツ)は健常者(ノーマル)に比べて肉体の性能で勝るが、中でもヨハンの鼻は群を抜いている。

　でも本当に大事な匂いをかぎ分けられるのはダリオの方だ。彼の鼻炎気味の、花粉が舞えばずるず

るいう鼻に導かれて、ふたりは生き抜き、ここまでやってきた。

――僕にはもうなにもない。

そうヨハンは考える。この肉体が長くは持たないこともわかっている。

――いや。

ひとつだけ持っている。

それはダリオから与えられた、ささやかな自由だけだ。

ヨハンは父親の顔を知らない。

名前さえ聞いたことがなかった。

母親に関してもそう違わないが、枯れ枝のような、細く硬い、水気のない手に撫（な）でられる感触だけは覚えていた。きっとあれが母の手なのだろう。でもおそらく妹――ソフィアはその手さえ知らないはずだ。なんにせよ母は、ヨハンが三歳、ソフィアが生後半年ほどのころに死んだそうだ。理由は聞いていない。

物心がついたときから、ヨハンたちはマフィア組織に飼われていた。

それを不思議だと思ったことはなかった。悔しいとも、悲しいとも別に思わなかった。自分はそういう生き物だと納得していた。

飼い主は何度か変わった。

最初の組（ファミリー）では家畜のように扱われていた。味のない餌（えさ）を与えられ、気分次第で殴られた。その組（ファミリー）は別の組（ファミリー）との抗争に敗れて散り散りになり、ヨハンとソフィアは戦利品として相手の組（ファミリー）に引き取られた。八歳ごろのことだったように思う。

二番目の組（ファミリー）は、まだしも平穏だった。彼らはヨハンたちを商品として扱い、最低限の品質は管理した。ヨハンはそこで、身体を鍛えることと、文字を読むことを学んだ。初めて人を殺す仕事を任されたのもこの組（ファミリー）にいるときだった。誰もヨハンやソフィアと口をきこうともしなかったが、ノルマを達成してさえいれば、食事と寝床は保障されていた。四年ほどでヨハンたちは次の組（ファミリー）に売られた。それなりの金になったらしく、最後に一度だけ、ヨハンたちの世話係だった女に褒められた。その女は名前も知らない。

ともかくヨハンが一二歳、ソフィアが九歳のとき、ふたりは彼に出会った。

ガムと呼ばれていた男だが、これは本名ではないようだ。脂（あぶら）ぎった長髪のため他の構成員から付けられたニックネームなのだということが、彼らの会話からなんとなく読み取れた。彼の本名をふたりが知ることは、最後までなかった。

ガムはノースゲートのマフィア組織で、若くして幹部（カポ・レジーム）の地位についていた。小さな組（ファミリー）ではないようだから、おそらくやり手ではあったのだろう。彼は羽振りがよく我儘（わがまま）だった。そして我儘を通すために必要なのは効率よく暴力を使うことだと知っていた。だから、ヨハンたちを買った。優秀な自分のための暴力として。

初めて顔を合わせたときから、ヨハンはその男が自分たちになんの興味もないことを知っていた。ガムはろくにヨハンの顔も見ず、代わりに胸に吊（つ）り下げたタグを手に取って言った。

「まずまずだな」

それからタグを手放し、脈絡なくヨハンの頬を殴った。特別、痛いというほどでもなかったし、別に驚きもしなかった。

微動だにしないヨハンを見て、ガムは笑った。

「不格好なわりには芯（しん）がぶれない。そこそこは使えそうだ。おい」

ガムはヨハンに対して語りかけているわけではなかった。すべて取り巻きへの言葉だ。

「俺はこの程度じゃ満足しないぜ？　必ずＡ級を手に入れる。こいつらを飼うのは、あくまで繋（つな）ぎだ。派手に使い潰す」

黄昏種（トワイライツ）はアルファベットと数字を組み合わせた級（カテゴリー）で管理される。そのとき、ヨハンの級（カテゴリー）は「Ｃ／２」、ソフィアの級（カテゴリー）は「Ｄ／１」となっていた。Ａ級は希少で、メルセデスの最上位モデルよりも入手は難しい。

「てめえら、勝手に汚すなよ？　こんなもんでも、俺の道具だ」

そして、ガムの元での生活が始まった。

ガムがヨハンを「不格好」と表現したのには理由がある。

一二歳のころ、ヨハンは左手に比べ、ずっと右手の方が大きかった。武器を握り続けてきたためどちらも柔らかではないが、でも左手はまだ年相応の幼さを残していた。対して右手はごつごつとして節が太く、いくつもの皺（しわ）が入っており、まるで大人のようだった。

ヨハンは子供の左手と大人の右手で、命じられるままに大勢を殺した。殺した数でいえばソフィアもそう変わらなかった。ガムは反逆者を殺すのにも、商売敵を殺すのにも、うるさい野良犬（のらいぬ）を殺すのにもふたりを使った。未成熟な身体はセレブレの過剰摂取（オーバードーズ）で補われ、ふたりは急速にその寿命を縮めながらも仕事を仕損じることはなかった。ガムは下品な男だったが、狡猾（こうかつ）な知恵はあった。正確にヨハンたちの

力量を把握し、標的を間違えなかった。

ヨハンはやがて、セレブレの過剰摂取（オーバードーズ）には、ある種の快感が伴うことを知った。

自分自身を忘れ、溢（あふ）れ出る身体能力を暴力に委（ゆだ）ねるのは快適だった。人を殺しているあいだは、なにも考える必要がない。人が死に際（ぎわ）に流す血はひどく臭く、吐き気さえ伴うが、肉体が苦しむとなぜだかヨハンは晴れ晴れとした気分になる。殺し続け、自らを苦しめ続けることがヨハンの日常で、そこに浸っているあいだは少なくとも悩みとは無縁だった。

ヨハンは不幸だった。でもそのことに無自覚だった。生まれてから一度も幸福を経験したことがないという事実が、心をぎりぎりの一線で守っていた。

知らなければ求めようもない。

求めなければ、ただ生きていることは容易（たやす）い。

ヨハンが少しだけ変わったのは、ガムに飼われてから二年ほど経（た）ったある日だ。

そのころヨハンは、ナイフと銃を初めとして、様々な武器の扱いを身につけていた。ガムから圧倒的な暴力を手に入れるよう指示されていたことが理由だが、大きさの違う左右の手では握りやすいナイフも違うため、最適な武器を探すうちに扱えるものの種類が増えていった。特殊な代償の影響もあり、あまり体格が大きくならなかったヨハンは、機動力を活（い）かした戦い方をメインにしていた。小まめに間合いを変化させるその戦い方には、多用な武器の使用が上手く嵌（はま）っていた。

警備の意味もありガムの屋敷の片隅に建てられた簡素な小屋で暮らしていたヨハンは、中庭で我流のトレーニングを終え、部屋に戻ろうとしたとき、小さな唸（うな）り声を聞いた。小屋の裏からだった。

そちらに回り込んでみると、ソフィアが、昼食に出されたパンの欠片（かけら）を握ってしゃがみ込んでいた。彼女の目の前には泥だらけに汚れた一匹の老犬がいた。ヨハンに犬の種類はわからなかったが、おそらく雑種だろう。値段のつきそうな犬ではなかった。

足音を聞いたソフィアがぴくりと肩を震わせ、こちらを見る。それから相手がヨハンだと知って、安堵（あんど）の息を吐いた。

ヨハンは尋ねる。

「どうしたの。その犬」

「怪我（けが）、してたから」

ヨハンはその犬をじっと見る。いや、臭いで観察する。

確かにその老犬は、左足に傷を負っているようで、そこから血の臭いがした。だがその傷はもうほとんど

治りかけていた。
　ソフィアは笑う。
「もうすぐ、走れると思う」
「いつから？」
「え？」
「いつから、その犬の世話をしてるの？」
「一週間くらい前、かな」
　獣はよく臭う。犬の存在に気づかなかった自分が意外だった。でもその理由は、簡単にわかった。
　──僕は、興味がないんだ。
　犬にも、妹にも。ずっと無関心だった。
　ヨハンはなんだかひどく混乱して、トレーニングに使っていたナイフに触れた。それからしばらく、じっと妹を見つめていた。
　──なんなんだ、一体。
　頭がくらくらする。
　──どうしてこの子は、犬の世話なんかできるんだ。
　ソフィアも自分と同じなのだと思っていた。ただ殺し、その合間でただ苦しむ日常を受け入れているのだと。なのに。どうして、同じように生まれ、同じように育った妹は、犬にパンを分け与えて笑うことができるのだろう。理解できない。
　とたんに目の前の少女が、尊い、価値のあるものに見えた。彼女は自分とは違うのだ、と強く思った。
　ヨハンはソフィアに近づき、そっと頭を撫でる。頭を撫でるなんて行為は、誰からも教わったことがなかったけれど、自然とそうする。あるいはほんの幼いころに知った母親の手を思い出したのかもしれない。
　ソフィアは少しだけ驚いて、それから、目を細めて笑う。
「どうしたの？　お兄ちゃん」
「いや──」
　言葉を上手く見つけられなかった。
「ソフィアは、偉いね」
　どうにかそれだけ答えた。
　手の中で少女が笑うと、胸を指先でなぞられるような、そわそわとした違和感を覚えた。それが、ヨハンが最初に感じた幸福だった。
　──僕はもう、どうしようもないけれど。

この子だけは壊れないでほしい、とヨハンは願った。
自分と同じように、これまで何度も何度も人を殺してきた少女の中にある、野良犬に注いだ感情を守りたいと思った。
そしてその日の夜に聞いた、一発の銃声により、ヨハンは妹への思いを一層強めることになる。

銃声。
その騒々しい、どこか悲痛な音をこの屋敷で聞くのは初めてではない。ガムは簡単に敵を作る男だ。
だが違和感があった。聞こえた音は一発だけ。襲撃の様子ではない。
火薬の臭い、血の臭い、獣の臭い。
人間はふたり。――ソフィアとガム。
それだけを感じながら、ヨハンは小屋を出た。
目の前の景色を見て、なにが起こったのかひと目でわかった。
ガムは屋敷の窓から顔を突き出し、にやにやと中庭を眺めている。中庭ではソフィアが瞳に涙を溜めている。彼女の手の中には一丁の銃がある。老犬はどす黒い血を流して地面に倒れている。
ヨハンに気づいたガムは、汚らしい笑みを浮かべたまま言う。
「おい。兄貴ならしっかり教育しておくんだな。ゴミを拾ってくるんじゃないってよ」
いつものことだ、とヨハンは思う。
ガムが殺せと言う。ふたりは殺す。いつものことだ。
怒りは感じなかった。ただ涙を溜めたソフィアを見るのが嫌だった。老犬は声も出さずに転がっている。その気持ちの悪い血の臭いに向かって、ヨハンは歩く。
犬は絶命しているように見えた。血に濡れた犬の顔をじっと見つめて、踏み潰す。感触は卵を割るのとそう違わなかった。
ひっ、とソフィアの喉(のど)から、小さな悲鳴が漏れた。それから重苦しい、長い沈黙のあとで、彼女は声をあげて泣き出した。
ガムが不機嫌そうにヨハンに向かって怒鳴る。
「おい。耳障(みみざわ)りだ。泣き止(や)ませろ」
ゴミの掃除もしておけ、と言い残し、彼は唾(つば)を吐き捨てて窓を閉める。
ヨハンはソフィアを抱きしめる。
「君が殺したんじゃない。僕が殺した」
腕の中で、妹は泣き続けている。

「君が殺したんじゃない」
　と、ヨハンは繰り返す。
　この子が傷ついてはいけない。他はどうなってもいいから。ソフィアだけは守らなくてはいけない。
「ねえ、お願いだよ。泣き止んで」
　次はこの子に、なにか死なないものを贈ろうと思った。
　どうせまたすぐに殺しの仕事はくる。死体のポケットから金を抜き取るチャンスなら、いくらでもあるはずだ。

　ヨハンはひたすら自分を鍛え上げ、ひたすら暴力を磨き上げた。やがてタグに書かれている級（カテゴリー）はCからBに上がった。
　強くなればガムは自分ばかりを使うはずだ、とヨハンは考えていた。妹がもうなにかを殺す必要がないくらいに強くなりたかった。
　戦闘の技術が高まると確かに、ガムがヨハンを使う頻度は高まった。ヨハンも率先して仕事を引き受けた。黄昏種（トワイライツ）とぶつかることも増えた。黄昏種（トワイライツ）の力は、持って生まれたものが占める割合が大きい。ヨハンは特別優秀な黄昏種（トワイライツ）というわけではなかったが、足りない部分はセレブレで補い、ガムの希望を叶（かな）え続けた。
　そんな風にして、さらに七年ほど経った。ヨハンは二一歳に、ソフィアは一八歳になっていた。
　ある日、小屋で身を潜めていると、帰宅したガムの声が聞こえてきた。それでヨハンは不安を感じた。
　ガムは怒り狂っていた。
　酒瓶、椅子（いす）、テーブル、飼い犬、メイド、取り巻き――そのあたりのものを片っ端から蹴り飛ばし、怒声を上げていた。
　ガムの声は耳障りだ。けれど念入りに耳を澄まして聴きとらなければならない。彼に呼ばれれば出ていく必要がある。その時間は一定の秒数以内でなければならない。遅ければ余計な傷が増える。最近ガムは、ヨハンに苛立（いらだ）つとソフィアに当たるようになっていた。底意地の悪い男だった。
　繁殖期の獣のように唸るガムの言葉から拾い上げることができた情報は少ない。でも、彼の怒りの原因は、おおよそ理解できた。どうやらギャンブルで大敗したらしい。
「くそっ、あの馬鹿野郎が。馬鹿の癖に調子に乗りやがって」
　ガムはそう吐き捨ててから、ふたりを呼んだ。
　ヨハンたちは足音でガムを苛立たせないよう注意しながら、でも素早く中庭に並んだ。
　リビングのソファに腰を下ろしたガムは、開いた窓からこちらを一瞥（いちべつ）し、火のついた葉巻をヨハンに向

かって投げた。それは見当はずれの方向へと飛んでいき、そんなことで、彼の機嫌はまた一段と悪くなったようだった。
「おいタグ付き。ここに来てどれくらい経つ？」
　質問の意図を測りかねたが、ヨハンはどうにか答える。
「九年、ほどです」
「そうか。てめえは思いのほかよく働いた。疲れただろう？　そろそろ休め」
　ヨハンはこれまでにない恐怖を感じた。
　彼が自分をねぎらうなんて、あるはずがないのだ。事実、言葉とは裏腹に、その声には高熱の怒気が満ちていた。殴られるのでも蹴られるのでも誰かを殺すのでもない、日常を逸脱したなにかを感じた。
　ガムは新しい葉巻の先端を乱暴に切り、火をつける。ゆっくりと煙を含み、ぽっと吐き出して告げる。
「ヨハン。動くな」
　額を冷や汗が伝う。
　ガムの真意はわからないが、彼の命令に従うとよくないことが起こる。でも、そうわかっていてもヨハンの身体は、命令通りぴくりとも動かなかった。黄昏種（トワイライツ）は三原則に縛られているから？　ガムから与えられるセレブレがなければ生きていけないから？　そうではない。
　物心がついたときにはもう、ヨハンは飼われていた。本能の深くに刻み込まれたルールが、主（あるじ）に逆らうことを許さない。
　次にガムは、葉巻でソフィアを指して、告げた。
「おい、ソフィア。ヨハンを殺せ」
　わけが、わからない。
　ヨハンが思い出したのはあの老犬だった。ソフィアが撃ち、ヨハンが頭を踏み潰した老犬。彼女が自分を撃ったとして、じゃあいったい誰がその頭を踏み潰すのだろう。ヨハンは妹に自分を殺させたくはなかった。彼女が引き金を引く前に、自分で自分を殺せばよいのだろうか。ジャケットの内側には、練習で使っていた投げナイフがある。人差し指よりは少し長い程度のささやかな刃だが、自分の首を掻っ切るのには不自由しない。
　けれど、ヨハンは動けなかった。
　理由はたったひとつ。ガムが動くなと言ったから。
　徹底的に飼い犬として育ったヨハンは、その馬鹿げた命令に逆らえない。
「おい、さっさとやれ」
　とガムが言う。

　ソフィアが冗談みたいにがちがちと震えた手で、銃口をこちらに向ける。彼女の汗と、涙の匂いがした。長いあいだ、引き金は引かれなかった。
「どうして」
　ソフィアが言う。
「どうして、お兄ちゃんを殺さないといけないんですか？」
　ガムは不機嫌そうに舌打ちした。
「早くやれ。もう飽きた」
　ソフィアが銃のセフティを外す。
　歳のわりには幼い顔立ちの、妹の瞳には涙が溜まっている。血の気が引いて、唇も色を失っている。首元にはヨハンが贈ったネックレスがぶら下がっている。彼女があのタグを首に下げているのが嫌で、彼女だけはもっと自由であるようにと、翼をモチーフにしたものを選んだ。ガムは気づきもしなかったけれど。
　ヨハンは最後にもう一度だけ、ガムに目をやった。
　これが趣味の悪い遊びなら気を変えてくれないかと、生まれてはじめて神に祈った。でもガムは窓枠の向こうで、まるでまったく別の世界にいるように、こちらをぼんやりと見ながら葉巻をふかしているだけだった。
　ソフィアの人差し指に、力が込められる。だが。
　銃声よりも先に、ノックの音が聞こえた。玄関の方だった。
　それを言い訳にしたのだろう、ソフィアの指から力が抜ける。窓の向こうのガムは、反射的に目線を壁の方へ向けたが、それだけだった。顎(あご)でソフィアに続きを促す。と、すぐにまた音が響いた。今度は大きい。なにか、壊れるような音。
　ガムを見れば、苛立った様子で「おい、静かにしろ」と叫び声をあげる。
　だが音は止まなかった。あるいはガムには聞こえなかったかもしれないが、ヨハンの敏感な耳はその音を拾っていた。足音だ。乱雑な、なにも警戒していない種類の足音。
　ヨハンはその音が自分たちにとって、幸運を告げるのか、さらなる不幸を告げるのか想像した。幸運を告げる足音なんてものがあるとは思えなかったが、一方で、今よりもさらに悪い状況というのも想像し難かった。
　ともかくその足音はまっすぐにリビングに近づき、ドアを開けた。
　窓越しにヨハンは、それをまったく別の世界の出来事として見ていた。ガムが、銃を握ったソフィアを見ていたときも、同じような気分だったのだろうと思った。
　現れたのは、三〇ほどの男だ。

派手なストライプのスーツ。ヨハンは最愛の妹に銃口を向けられたまま思う。希少な色合いで覚えやすい。あと、虫に似ている。くすんだ景色の中で、その男はやたらと目立つ。やはり現実味がない。

ただ、彼には見覚えがあった。以前、ガムの護衛として組（ファミリー）の会合についていったことがあり、そこで見た。名前は知らないがガムと同じ、幹部（カポ・レジーム）のひとりだったはずだ。たしか――

「おい。薄汚ねぇ野良犬がなんの用だ？」

そう、野良犬。この男は野良犬と呼ばれていた。

組織に繋がれない、嫌われ者の狂犬。なぜそんな男が幹部（カポ・レジーム）のひとりなのかと疑問だったが、そんなことよりもスーツの柄の方で覚えていた。

虫みたいな野良犬は、歪に口をめくり上げて笑う。

「ギャンブルで勝ったぶんを受け取りにきたんだよ。ほら、明日になると忘れちまうかもしれねぇだろ」

「安心しな。今夜には届けてやる」

「臭（くせ）え死体はいらねえんだよ。てめえが賭（か）けたのは、一〇〇人殺した狂犬だろ」

「指の一本まで揃（そろ）えてくれてやるって言ってんだ、犬っころは骨でもしゃぶってやがれ。それ以上はねだりすぎだ。まずは鉛玉から贈ってやってもいいんだぜ？」

ふたりのやり取りで、おおよそ事情がわかった。

ガムはギャンブルにヨハンを賭けたのだ。そして、負けた。だからガムは、ヨハンを死体にしてからあの野良犬に渡すことに決めた。

ソフィアは銃口をヨハンに向けたまま、すがるような目で派手なストライプを見ていた。ヨハンも同じ気持ちだった。

――これで、助かる。

妹に自分を殺させずに済む。

ヨハンはガムに、動くなと命令されている。だが主はもう、ガムではない。あの野良犬がひと言、逃げろとでも命令をくれれば、それでこの場は収まる。わざわざギャンブルの勝ちを台無しにはしないだろう。

まず叫び声を上げたのはガムの方だった。

「なにをしている、さっさと撃て」

そうソフィアに命令する。

彼女は丁寧に銃口の狙（ねら）いを定めたが、まだ引き金は引かなかった。野良犬の言葉を待っている。

ヨハンもその男に注目していた。だが彼は、ちらりとこちらを一瞥すると、不思議そうに眉（まゆ）を上げ、ただ尋ねた。

「おいお前。ピンチじゃん。なんでぼうっと突っ立ってんだよ」

　ヨハンは思わず目を見開く。それくらいわかってくれよと言いたかった。前の飼い主の命令に従っているだけだ。
「あなたが、新しい命令をください」
　とヨハンは懇願する。
　野良犬はもう、ガムには興味を失ったようだった。
　彼は窓辺に歩み寄り、そこに足をかけ、ひょいと飛び出してくる。そんなことに、ヨハンはひどく動揺した。窓の向こう側とこちら側は決して混じり合わない、別の世界だと思っていた。なのに、その男は平然と歩み出てきた。派手な色が目に痛い。臭いは埃っぽく、獣じみている。まさに野良犬の臭いだ、と思った。
　極彩色の野良犬が笑う。
「はっ。わかったぜ。てめえ、相当甘やかされて育ったな？」
　甘やかされて？
　さすがに、それはないのではないかと思う。一般的な育ち方というのもわからないが、これまでの人生に甘さなんて欠片もなかった。
「てめえ、人を殺したことないだろ？」
「いえ。大勢殺しました」
「いいかい坊や。銃も弾丸も人は殺さないんだよ。殺すのはいつだって人間だ。オレは後ろの髪型がだせえ馬鹿みたいに甘くはねぇからよ、いちいちてめえの殺意を肩代わりしてやんねえよ。鎖に繋がれた犬に興味はねえ」
　ヨハンは息を呑む。そして考える。
　――僕の中に、殺意なんてものがあるだろうか。
　命令ではなく殺したい相手がいるだろうか。
　男は大げさに両手を広げ、どこか狂気的な目で言った。
「楽しもうぜ、ヨハン。殺したければ殺せ。死にたければ死ね。オレはてめえをこき使うが、自由だけは保障してやる」
　約束だ、と彼は言った。
　ヨハンはソフィアの顔を確かめたかったけれど、そうはしなかった。
　彼女のためではない、誰のためでもない、自分自身の殺意はもう見つけていた。
　投げナイフを抜いて、放つ。それはあっさりとあの窓を通り抜ける。
　ガムの喉が容易に裂ける。ひどく臭う息が、ひゅうと一度だけ漏れる。あんなにうるさかった男は最期に

声も上げない。ヨハンは初めて、本当の意味で人を殺した。

　飼っていた黄昏種（トワイライツ）が幹部（カポ・レジーム）を殺したということで、組（ファミリー）の中では大きな問題になったようだ。

　結果、野良犬――ダリオという名の男は、ヨハンを連れて組（ファミリー）を出た。

　上からはヨハンの首を差し出すようダリオに指示があり、しかし彼はそれに従わなかったのだ。「飽きたから辞めた」とダリオは言うが、組（ファミリー）から一方的に縁を切られて追われる身になったのが実情だ。

　ヨハンはセレブレの入手も困難な生活を強いられることになったが、不思議と死にはしなかった。ダリオの無茶苦茶な言動は、しかし軽快に様々なトラブルを乗り越えていった。彼はヨハンを弟と呼ぶようになり、ダリオのことも呼び捨てにするよう求めた。

　彼はいつも楽しげで、そのことがヨハンには理解できなかった。

「どうして僕のために、そこまでしてくれるんですか？」

　と尋ねてみたことがある。

　幹部（カポ・レジーム）が黄昏種（トワイライツ）のために組（ファミリー）を追われるというのは、やはり異例だ。

　ダリオは心底、不思議そうに言った。

「どこがお前のためなんだよ。オレはいつだって面白（おもし）れぇ方を選ぶんだよ」

「僕といてなにが面白いんですか」

「だってお前、変じゃん」

「どこが。あなたほどじゃないでしょう」

　だがダリオは笑うだけで、その理由を説明してはくれなかった。

　心残りだったのは、ソフィアのことだ。彼女は未だに、組（ファミリー）に所有されていた。

「どうしたい？」

　とダリオに尋ねられ、

「取り戻したい」

　とヨハンは答えた。

　それから二人組の目的は、ソフィアの奪還になった。

一年もかけて調査をした結果、すでに組（ファミリー）は彼女を手放していたことがわかった。

取引相手はロンバルディ組（ファミリー）――エルガストルムの、さして大きくはないマフィア組織だ。

それを追って、ふたりはこの街にやってきた。ロンバルディ組（ファミリー）を潰してもそこにソフィアはおらず、さらに彼らの取引相手を調べてひとりひとりマフィアを殺した。そして今、ダリオは体中に包帯を巻きつけて、患者用のベッドで高いびきをかいている。代わりにソフィアの居場所が判明した。ウォリックという片目の男と、ニコラスというタグ付きのふたり組。あとふたり殺せば、ようやく終わる。

ヨハンは呑気（のんき）に眠るダリオを見下ろして考える。

この身体（からだ）は、もってあと二年だと医者から聞いた。そう長くないとは自覚していたし、心残りなのはソフィアのことだけだ。本当は心優しい、あの少女の幸福を作って死ねるなら、そんなに満ち足りた終わりはない。

ソフィアもヨハンと同じようにガムにこき使われて生きたが、どちらかといえばヨハンの方が無茶をした回数は多い。それに彼女は、ヨハンが知る限りでは代償もない。まだまだ長く生きられるはずだ。

彼女の幸福な生活を考えると、それだけでヨハンの胸は温度を持つ。彼女はどこか落ちついたところで暮らす。血の臭（にお）いがしないところだ。今度こそ本当に、彼女が犬を飼えればいい。その辺りの野良犬を拾ってきて、ふっくらとしたパンを分けあって。ただそれだけで、ヨハンは笑いながら死ぬことだってできる。この糞（くそ）みたいな人生を、幸せだったということだってできる。

やがてダリオがいびきを止めて、目を開いた。

「また客かよ」

と彼は呟く。

ヨハンももちろん、その気配を察知していた。

「ウォリックさんと、ニコラスさんです。殺しても？」

「どうしてオレに訊（き）くんだよ」

「この街では勝手に暴れるな、と言ったのはダリオですよ。それに、ニコラスさんの方は殺（や）る許可が出ていますが、ウォリックさんはまだです」

「あ？　なんでそんな面倒なことになってるんだっけか？」

「知りませんよ。ダリオの気まぐれでしょ」

「そうかよ。ま、この街は不運の臭いが強すぎるからな。ちょっとクレバーにいきたかったのかもしれねえ」

どうして自分の思考さえはっきり覚えていないんだ、と指摘したかったけれど、その前にドアが開いた。

相変わらず吐き気のする、様々な化粧品や香水が混じり合った劣悪な臭い。だが今回は、はっきりと妹の匂（にお）いを感じた。

　部屋に入ってきたウォリックは、その首にネックレスをぶらさげている。ヨハンが妹に贈ったものだ。

　ダリオがベッドの上で身体を起こし、声をかける。

「よう、友達（フレンド）。片割れはどうした？」

「ニックは下にいる。起こして悪（わり）ぃね」

「寝るのはあまり好きじゃない。暇だからな。で、また見舞いか？」

「訊きたいことがあんだけどさ」

　ウォリックは別に嬉（うれ）しげでも、悲しげでもない、軽薄な笑みを浮かべて言った。

「マフィア殺しって、お前ら？」

　ダリオは、躊躇（ためら）いなく答える。

「ああ、そうじゃねえの？　そんなだせえ名前は知らねえが、心当たりはあるぜ」

　それから彼は、ウォリックの首元を指さした。

「オレにも教えてくれよ。ソフィアって女を買ったのは、あんたか？」

　ウォリックの方も、簡単に頷（うなず）く。

「もてちゃってね。いい女だよ、誰にもあげない」

「そいつは困る。オレはあの女が欲しい」

「お前じゃなくて、そっちの坊ちゃんでしょ。ま、なんでもいいけどな。ちょうど俺も困ってたところなんだ。お前らふたりの首を手に入れないといけない」

「なら、ちょうどいいな」

「ちょうど？　なにが？」

　ダリオが笑う。

　無邪気に、狂気的に。善悪から解き放たれた獣のように。

「互いに欲しいものがある。ベットが揃っているなら、あとは何に賭けるか決めるだけだ」

　ウォリックは呆（あき）れた風に肩をすくめてみせた。

「そのベット、つりあってる？」

「なんだよ。男の首ふたつじゃ、女ひとりぶんの価値はないってのか？」

「当たり前だろ？　俺ちゃん、野郎が何人いようが一緒に酒なんか飲みたくないけど、良い女ならひとりで充分よ？」

「でも友達となら飲むだろう？　首の片方はこのオレだ。大目にみろよ」

「我儘だねぇ」

　唇を歪（ゆが）めて、ウォリックは笑う。

「ま、いいよ。何に賭けるのかは、こっちが選んでも？」

「いいぜ。つまらねぇイカサマはなしにしてくれよ」

　たまらずヨハンは、横から口を出す。

「ダリオ。僕がやります。ギャンブルなんて、わざわざあやふやなことしなくても――」

「じゃ、それにしよう」

　と、ウォリックはヨハンを指さした。

「うちの相棒と、お前の弟が戦って、勝つほう。どっちに賭ける？」

　ダリオは楽しげに笑う。

「もちろん、弟だ。あんたはあの無口な兄ちゃんでいいのかよ？」

「当然。ニックは負けない」

「なら成立だ。オレが賭けるのは、オレとヨハンの首。あんたが賭けるのはソフィア。勝った方の総取りだ。文句はねぇな？」

「ないよ。でもね、俺たちちょっと急いでんの。すぐに始めていい？」

「こっちは初めからそのつもりだぜ？」

「いいのか？　味気ない病院食が最後の晩餐（ばんさん）になっても」

「オレは負けない。ギャンブルで負けたことがないからな」

「その話、本当かよ？」

「細かいことは覚えてねえ。たぶん負けてねえと思うが、ヨハンに訊いてくれ」

　ウォリックは、どうよ、とヨハンに顔を向ける。

　ヨハンはため息を吐き出す。ダリオがギャンブルに強いのは事実だが、もちろん無敗ということはない。彼自身が言うとおり、負けなんていちいち覚えていないだけだ。

　でも今夜は違う。

「もちろん、本当ですよ」

　と頷く。

　ウォリックは頬を上げて笑い、こちらに背を向ける。

「最後にふたりで話したいこともあるでしょ。ヨハンちゃんを拾った、あのゴミ溜めのソファのあたりで落ち合おう。あんまり待たせないでね」

　ウォリックは手を振り、病室を出た。

　ダリオはベッドから跳び降りて、入院着を投げ飛ばし、包帯をはぎ取る。

「おい弟、オレのイカしたスーツはどこだ？」

　ヨハンはクローゼットから彼のスーツを取り出しながら、尋ねる。

「よかったんですか？」

「なにが？」

「僕のために、命まで賭けて」

「どこがお前のためなんだよ？　ひりひりするギャンブルじゃねぇか。今、最高に楽しんでるのは、オレだぜ」

　ダリオは「なんか痛え」と呟いて、撃たれている太ももを押さえる。

　彼が羽織りやすいようスーツを広げ、ヨハンは言う。

「ありがとうございます。僕は負けません」

「当たり前だよ」

　ダリオは唇をめくりあげ、にぃと豪快に笑う。

「オレはなんにもできねぇからな。オレを勝たせるのは、お前の仕事だ」

#5

テオには、二階の怪我人が早期退院する旨を手短に伝えた。
彼からの抗議はなかった。「傷口が開いても知らんぞ」と言ったきりだ。ダリオの治療はひととおり終わっているようだった。
ヨハンにやられた足の怪我をニナに診てもらっていたニコラスが立ち上がる。ニナは彼を心配げな瞳で見上げたが、なにも言わなかった。ニコラスは軽く手を振って、ウォリックの隣に並ぶ。
医院を出て、適当に見つけたバルに入り、ウィスキーを一瓶とショットグラスをふたつ買った。「うちは食器屋じゃないぜ」とぼやく店主の胸ポケットに紙幣をねじ込む。
あの裏通りの廃棄場に向かった。相変わらず鼻をつくような異臭を放っているが、それでも昨日降った雨で洗い流されたのか、いくらかましではある。
ぼろぼろのソファがひとつある。ヨハンが倒れ込んでいたソファだ。触れてみると、それほどは汚れていないようだ。ウォリックはそこに腰を下ろし、相棒を見た。
彼はくあ、と大きなあくびのあとで、眉を上げ、面倒くさそうに辺りを見回す。
『なんでゴミ捨て場なんだよ。臭えだろ』
「ご近所に迷惑かけて怒られると面倒でしょ」
『待つほうが面倒だ。あの病院でやればよかった』
「壁を壊すと弁償だ。それに、ニナちゃんを巻き込むわけにはいかない」
はっ、と顔をしかめて、彼はセレブレのケースを取り出した。まだずいぶん残っていたが、それをざらざらと口の中に流し込む。空になったケースを、ゴミ山の一角に投げ捨てた。
どう見ても摂取のしすぎだ。しかしウォリックはそのことを咎めはしなかった。
心配していないわけじゃない。ただ、彼が無茶をするたびに、どこか好ましく思っている自分もいる。その感情を正しく理解することはウォリック自身にもできない。この場では適当な言葉を並べて納得しておく。
「激しい夜になりそうだ」
『野良犬を始末するだけだ』
「でも、そこそこできる野良犬だぜ」
『この礼はする』
ニコラスは右足の爪先でとんとんと、地面を軽く叩いた。彼の治癒能力が格段に高いとはいえ、さす

がにまだふくらはぎの怪我は全快していない。あの臆病なタグ付きは、少なくとも同類であるニコラスに傷を負わせるだけの力を持っている。薬の量は、ニコラスから彼への正当な評価ということにしてもいい。

　とはいえ、不安もなかった。

「任せたぜ、相棒」

『任されてやるよ、相棒』

　ニコラスの目つきが細く、鋭くなる。それはほほ笑んだようでもあった。ほどなくウォリックの耳に、二人分の足音が聞こえた。

　ダリオが胸を張って両手をポケットに突っ込み、堂々とやってくる。撃たれた脚をひきずるようにしているが、痛みは顔には出さない。彼のすぐ後ろを、影のように、ヨハンが静かに歩く。

　ダリオはそのまま、ウォリックの隣に腰を下ろした。

「もったいねえな。いいクッションを使ってやがる」

「ああ。いい酒もあるぜ」

「そうかい。なら今夜はいい夜だ。酒があり、ギャンブルがあり、友人がある。他にはなにもいらねぇな」

「お前は安くていいな。俺はもう少し欲張りだ」

　夢なんて言葉で連想するのはいつの間にか悪夢だけになったし、希望なんて言葉は耳にも口にもしなくなって久しい。それでも平穏に明日が始まることを、まだ諦められないでいる。

　ショットグラスの一方をダリオに渡し、黒いボトルをかざす。硝子が遠い街灯の光を取り込み、チープな赤みを帯びた。ゴミ溜めみたいな街の、本物のゴミ溜めでも、綺麗に輝くものもある。オールドパーの一二年。ウォリックのお気に入りで、ダリオもこいつを美味いと言っていた。

　ふたつのグラスに、半分ずつそそぐ。

「奢りか？」

「お前に本当に良い酒の味を覚えさせたくてね」

「氷もねぇのかよ」

「知らねぇの？　ショットグラスは、美味いウィスキーをストレートで飲むためのグラスだよ」

「あんたはいろいろ知ってるな」

「お前がなんにも知らないだけだ」

　は、とダリオが笑う。

　彼は乱暴にショットグラスを持ち上げて、雫が指にかかり、それを舐めとる。

「なんに乾杯する？」

「別に、なんでもいいさ。これまでだって理由はなかったろ」

「いや、今夜は事情が違う。弟が兄貴のために、派手に暴れ回る晴れ舞台だ。こんなに気持ちのいい酒はない」

「ヨハンちゃんの気苦労を察するよ。酔いすぎて滅茶苦茶（めちゃくちゃ）にしねぇよう気をつけな」

「兄貴のために苦労するのが弟の仕事だろうが。ああ、そうだ、だったらこうしよう」

　ダリオはまだ酔ったわけでもないだろうが顔を明るくすると、気負う様子も、恥ずかしがる様子もなくショットグラスを掲げる。

「オレたちの勝利に」

　ウォリックは口元を緩める。やはり絶望的に、センスがない。でもいちいち指摘するのも面倒だ。

「なら、俺たちもそれで」

　ふたつのグラスがぶつかり合う。

　安物のグラスでも、意外に澄んだ音が鳴った。

　だがその直後に響いた、刃（やいば）と刃がぶつかる音で、すぐにかき消された。

　笑みを抑えきれなかった。

　もっとも、初めから抑えようという気もなかった。

　前方のヨハンに向かって、ニコラスは首につりさげたタグを軽く掲げてみせる。そこに刻まれた級（カテゴリー）はA／0——概（おおむ）ね、死神と同義の二文字だ。

『お兄ちゃんにおしめは取ってもらえたか？』

　ヨハンにニコラスの言葉は通じない。同じようにタグの文字も、まるで意味を理解していないように、気に留めた様子はなかった。

　彼もタグを掲げる。級（カテゴリー）はB／１。上級（ハイカテゴリー）と呼ばれ重宝される部類だが、ニコラスよりは格が下がる。ヨハンはほほ笑んで言った。

「殺し合いは、カードゲームではありません。Ａ（エース）が常に強いわけじゃない」

　その唇をニコラスは読んだが、答えは返さない。既に準備が済んでいることを確認できればもうお喋（しゃべ）りに興味はなかった。

　ヨハンが静かに瞼（まぶた）を閉じる。途端、ニコラスの見ている景色さえも色を暗く落とした気がした。目線だけ空にやれば、雲が厚くかかっている。だが、それもどうでもいい。星を眺める趣味はない。

　視界の端で、ウォリックとダリオがグラスをぶつけ合う。

　それがきっかけだったわけでもないだろうが、ヨハンが腕を振った。空を切り裂くように。そして、実際に空を切り裂いて。投げナイフの刃が目の前に迫っている。知覚したときにはもう、ニコラスの身体（からだ）も動いていた。手にした刀でそれを弾（はじ）き飛ばす。刃と刃がぶつかり、高い音が鳴り響いたのを、耳ではなく肌で感じる。純度の高い殺意の音。

『いいじゃねえか』

　級（カテゴリー）は健常者（ノーマル）が黄昏種（トワイライツ）を管理するために設けた指標だ。

　ヨハンの言うとおり、本質的な強さを図る指針ではない。あくまで結果のうしろをついてくる数字だ。そんなものを見るだけで勝敗がわかるのなら、戦争は見せ合いっこで穏便に終わる。つまらない。

『簡単にはくたばるなよ？　俺を楽しませてくれ』

　ニコラスは駆ける。ヨハンとの距離は七ヤード。それを、短く息を吸う間に詰めて、振りかぶった刀を下ろす。まるで見知らぬ土地で会った同郷の友に会釈（えしやく）でもするみたいに。切っ先が掠（かす）め、オーバーサイズのダウンジャケットが破れた。綿毛が飛び散る。舞う白の向こうで、青年が笑っている。殺気の肌触りを楽しむように。やはりこの青年とはタグの級（カテゴリー）などという分類を越えた、もっと深い部分で共通している。そう思うとニコラスの方も笑えた。──俺らは人間とは決定的に別物だ、と思う。自嘲（じちよう）だろうか。違う。事実だ。黄昏種（トワイライツ）は人間に飼われ、内側に獣を飼う。

　ヨハンがジャケットを脱ぎ捨てた。投げナイフ、コンバットナイフ、何丁ものハンドガン、ワイヤー、爆薬、形を持った様々な殺意──それらが、華奢（きやしや）な身体にぐるぐると巻きつけられている。

　それでも、もっとも目を惹（ひ）いたのは彼の右腕だった。骨ばっていて、皺（しわ）が多い。まるで老人だ。代償だろうと一目でわかる。そんな腕に大した力があるわけもない。もちろん健常者（ノーマル）に比べればましだろうが。

　その老人の右腕は、いったいどんな素材でできているのだろう、ニコラスの知覚を超えた速度で動く。コンバットナイフの先端が右目の眼球の二インチほど手前に迫っていた。その刃は刀の背で押し止（とど）めている。本能が身を守り、本能が敵を殺す。脳はただ本能に忠実であればいい。

　ニコラスは左手一本で刀を握り、それが押し止めているコンバットナイフを右手でつかむ。指先が少し切れたようだが気にならない。コンバットナイフを捻（ねじ）ると、ヨハンはあっさりとそれを手放した。彼は潜り込むようにして身を沈める。そのときにはもう、彼の左手が銃を抜いている。ニコラスは奪い取ったばかりのナイフを彼の銃口に突き刺す。ヨハンは躊躇（ためら）いもせずに引き金を引く。当然、銃は暴発する。ヨハンは地面を転がり、ニコラスはそれを追う。弾丸（たま）の行方など知らない。とりあえず、どちらにも当たらなかった

ようだ。ひしゃげた銃が、ゴミが敷き詰められたコンクリートの上を転がっていく。

相手が様々な種類の武器を使いこなすことはわかっていた。そのすべてをひと通りつかわせてみたいとニコラスは思った。すべての種類の殺意に身をさらしたかった。すべての種類の殺意を粉々に砕き、それからこの男の胸に刃を突き立てたかった。

誰が捨てたのだろう、地面に転がっていた車の左側のドアにぶつかったヨハンは、そこで動きを止めてまだ幼さの残る左手をこちらに向ける。尖(とが)った殺気。針だ。なにかのギミックで撃ち出したようだ。躱(かわ)しようがなく左肩で受ける。そのままヨハンを踏み潰(つぶ)そうと足を出す。ヨハンは地を滑るように低く、だが長く跳び、ニコラスの背後に回り込む。ニコラスは咄嗟(とっさ)に追って身体の向きを変え、直後、背後になにかを感じた。先ほどまでヨハンが寄りかかっていた車のドアがニコラスに向かってくる。ワイヤーをひっかけていたようだ。左手で受け止め、それをヨハンに向けて投げる。ヨハンは割れていた窓の穴を器用に潜り抜け、ニコラスに迫る。二本目のコンバットナイフが振り下ろされる。ナイフを叩き切るつもりで刀を振り上げる。むしろコンバットナイフの方が刀を受け止める形になった。反動で、ヨハンがさらに宙(そら)高く跳びあがる。ニコラスも追って跳ぶ。ヨハンはさらに左手の針を放とうと構える。彼の左肩を強引に殴りつけ、針の軌道を逸(そ)らす。ニコラスは宙でヨハンを追い抜く。ヨハンはハンドガンを握っている。彼は目を閉じたまま、口元を緩めている。それは殺気ですらない。ただただ楽しそうだった。目の前の狂犬が笑っているのが嬉(うれ)しくて、ニコラスは宙で回りながら彼に斬(き)りかかる。まだ死ぬなよ、と内心で願う。期待したとおり、ヨハンは上手に、ハンドガンで刀を受け止めてみせる。その銃は使わず手放して、ナイフを投げた。だがニコラスには彼のすべてが見えていた。ヨハンが手放したハンドガンがふたりと一緒に落下する。ニコラスはそれを摑(つか)み、ナイフに向かって投げる。ハンドガンにかすったナイフは軌道を変え、曇った夜空へと飛んでいく。

再び薄汚い地面に降り立ったふたりは、またちょうど、七ヤードほどの距離で向かい合っていた。

ヨハンはやはり目を閉じたまま、ニコラスが殴った左肩を押さえて獰猛(どうもう)に笑う。

ニコラスも、にいと笑い、左肩にワンポイントの赤を作った針を乱暴に抜いた。折り曲げて指で弾くと、近場の、原形もわからないスチール板に当たって落ちた。五感が冴(さ)えわたっている。針がチリンと鳴った、その微(かす)かな音さえ肌で感じる。この場所は薄汚れていて、ゴミも血もすべて紛れる。臭(にお)いは悪いが、居心地はいい。

ヨハンが口を開く。

だがそれは、言葉ではなかった。ただの雄叫(おたけ)びだ。

──わかってんじゃねぇか。

獣の戦いに言葉はいらない。インターバルも必要ない。

黄昏種(トワイライツ)の戦いはこうでなければならない。すぐに夜が訪れるのなら、今で目一杯遊ばなければならな

い。まだやれるだろう？　まだまだ。次の殺し方を見せてみろ。

　ふたり、さらに口角を釣り上げて、猛獣じみた顔で地を蹴（け）った。

　ふたりの獣が本能を剝（む）き出しにして、殺意まみれの無邪気さでじゃれあっている姿を眺めながら、ウォリックはダリオと共にオールドパーを傾ける。

「いいねえ。楽しそうだ」

　とダリオが言った。

　ウォリックは頷（うなず）くだけに留める。女物のネックレスがしめつける肌に痒（かゆ）みを覚え、首筋に手をやった。そこについた二本の傷跡を触りながら考える。

　──これが、ソフィアが望んだことだろうか。

　もちろんそんなわけはないだろう。でも彼女は、こんな未来も予感していたのではないだろうか。少なくともヨハンが自分を追って、この街に現れることは想像したはずだ。その物語はきっと、彼女にとって幸福ではなく、ひとつの悲劇として描かれた。

　ちょうどそう考えたとき、ダリオが話し始めた。

「ヨハンはよ、結局、妹に寄りかかってなきゃ生きられねぇんだよ」

　彼にこちらの考えを読むほど高等な頭があるとは思えなかったし、初めからそんなつもりもないだろう。たまたま、彼の口から洩（も）れた言葉がウォリックの頭の中と一致したというだけだ。それはなんだか、不思議なことではないような気がした。

　ウォリックはダリオのショットグラスにオールドパーを注ぐ。その瓶をダリオが受け取り、ウォリックのグラスに注ぎかえす。

　楽しげに、ダリオは続ける。

「あいつはたぶん、自分がなんで生きてるのか、よくわかんなかったんだな。だからよ、その理由をみんな妹に預けちまったんだ。妹のために生きているあいだだけ、本当に生きている気分でいられるんだろうさ。だから今は楽しいんだろ」

　ソフィアもきっと、そのことを知っていたのだろう。

ヨハンにとって自分こそがすべてだということを、彼女は知っていた。

だから最期（さいご）に、あんな依頼を遺（のこ）した。

――あと三年、私をかくまって。

それはきっと、ヨハンのための依頼だったのだ。ぼろぼろになって死んだ自分のことを、最愛の兄にだけは隠したかった。ソフィア自身と同じように、ヨハンの身体ももう長くは持たない。三年で足りると彼女は考えていた。

幼いころからきっと、彼女はそういう風に生きてきたのだろう。

兄のささやかな希望であることを、自分に課して。

彼女自身が抱える代償さえ、兄に隠して。

兄の幻想を綺麗なままで保とうと必死だったのだろう。

だからヨハンは今こうして、妹のために命を投げ出して戦うことができる。笑いながら血を流すことができる。

妹が兄のためについた優しい嘘（うそ）を守れという依頼は、安いネックレスひとつの価値に見合っているような気もした。ふたり分の人生の結末を背負わされるのは、やはり重すぎるような気もした。

ウォリックは、ポールモールに火をつける。

「お前は、どうなんだ？」

「あん？」

「ソフィアのことを、どれくらい知ってる？」

ダリオは頭を掻（か）いた。

「人の女を語るのはだせえよ。褒めても貶（けな）してもスマートにはいかねぇ」

それからガラムを咥（くわ）える。ウォリックはジッポで、その先に火をつけてやる。甘ったるい煙が、彼の口元からもわりと広がった。

ダリオは不思議な男だ。チープな表現をするなら、底がしれない。すべてを知っているほどに頭がいいとは微塵（みじん）も思えないが、彼の弟が言うとおり、すれすれのところで正しい選択肢を嗅（か）ぎわけて生きているようなところがある。多くを覚えるよりも、多くを忘れる方が優れているとでもいうのだろうか。そうかもしれないなと思う。

才能はひとつ少ないよりもひとつ多い方が危険だと誰かが言った。ウォリックはなにも忘れないし、この髪を気に入る女も大勢いる。そのせいで取りこぼしてきたものはいくつあるだろう？　そんなものはすべて不要だったと言い張れればいいが、この片目は見えないものまでは記憶できない。

「お前は、不幸の臭いがわかるんだろ」

「ああ。それだけで生きてきた」

「今は？　そんな臭いはしねぇの？」

「全然ねぇな。酒とタバコと血とゴミ溜めの悪臭。それだけだ。いつもどおりの平穏でくそったれな臭いだよ」

「そ」

　ダリオは本当に、なんの不安も感じてはいないようだった。これまで何度か酒を飲んだときと様子は同じだ。ヨハンが勝つと確信しているのだろうか。

　それとも、と考えて、ウォリックは笑う。この男のことは難しく捉えても仕方がない。どうせ馬鹿をみる。

　ガラムをふかして、オールドパーに口をつけて。それを繰り返しながら、彼は言った。

「女っていやよ、前にオレは、最高の女と絵を描いたことがあるんだ。笑う犬の、いかしたイラストをよ」

「知ってるよ。フィアットのボンネットに描いたんだろ」

「どこに描いたかは覚えてねぇ。どうしてあんた、知ってんだ？」

「お前から聞いたんだ。何度も何度も。実物を見たこともある」

「そうかい。とにかくありゃ、良い女だった」

　忘れるってのはどんな心地なんだ、とウォリックは尋ねたくなる。

　実際には、曖昧に微笑んだだけだった。

　彼を嫌ってはいない。だが、こういう形でなければ、と考えることに意味もない。この街での出会いはすべて厄介事だ。

　ソフィアをまた思い出す。

　彼女はウォリックから見て、綺麗でも、チャーミングでもなかった。表面だけクールに振る舞って、でもぼろぼろになっても内面は少女みたいに夢見がちで、なんにも信じないようなことを言いながらちょっと優しくしてやるとすぐに男を信じて。そんな、どこにでもいるような女だった。

　けれど少なくとも彼女は、女としての流儀は知っていた。

　女は別れ際に厄介事を残していかなければならない。そして、女の死に際の願いを叶えるなんてのは一番の厄介事だ。

　ひとりきりじゃ手に余ってたよ、とウォリックは内心で呟く。

　それからポールモールの煙を吐き出して、激しくじゃれ合うふたりを眺める。

　幸いなのは、ソフィアの言葉はウォリックひとりに対する懇願ではなく、便利屋への依頼だったことだ。そこにはロマンスじみた同情も優しさも必要ない。もとより彼女も求めていないだろう。ただ的確に、過不足なくこなすだけだ。

　そして便利屋として動けるのならば、ウォリックには何よりも信頼できる男がいて、そいつはいつでも嫌味なくらい満点の仕事をする。
　彼にも、もちろん依頼主への私情など有り得ない。仕事だから動く。きっとウォリックに対してすら、彼は人間的な感情を抱いていないだろう。契約主だから従う、ただそういうシンプルなルールでできている生き物。それを嬉しいとも悲しいとも思わない。ニコラス・ブラウンは間違いなく、ウォリック・アルカンジェロにとって最高の相棒だ。

　生の痛みは快感で、それでヨハンは深く笑う。
　ガムに飼われていたころを思い出していた。あのころに良い思い出なんてものはまったくないが、この快感を知った時期ではある。ソフィアのために、ソフィアのために。繰り返しながら目の前のものを壊す。そうしているあいだだけ、ヨハンは救われる。
　もしもこの、泥だらけの人生に。
　ゴミ溜めに這(は)いつくばって死を待つ痩(や)せこけた野良犬みたいな人生に救いがあるのだとすれば、この時間だけだ。自由であれる時間。それは、希望を作り上げていく時間だ。最愛の妹の希望を。つまりはヨハン自身の希望を、作り上げる。
　ヨハンは目を開かない。
　視界は戦いにいらない。
　ヨハンにしてみれば、視覚よりも嗅覚(きゅうかく)の方が、よほど情報として優れている。背後も物陰も頭上も足元も、臭いであればみんなわかる。相手の疲労と死への距離も、臭いであれば教えてくれる。
　今、向かい合っている黄昏種(トワイライツ)は規格外だ。
　これまでに出会ってきた誰よりも強い。大きくはない肉体はみっちりとした筋肉で覆(おお)われ、その筋肉は重く、硬く、しなやかだ。体重が軽いぶん、速度ではヨハンの方が優(まさ)っている。武器が多様なぶん、間合いでも優っている。他はすべてあちらが上だろう。力も経験も狂い方もみんな、彼には勝てない。
　ヨハンには、目の前の男に自分が敗れる姿を容易に想像できた。彼の刀がヨハンの首を跳ね飛ばし、この胸に切っ先を突き立てるところを思い描くのは簡単だ。

反対に自身の勝利はイメージできない。ナイフも銃弾も跳ね返されるだろう。多少当たったところであの力強い肉体はきっと止まらない。ワイヤーは切り裂かれ、暗器の類（たぐい）はそよ風程度の結果しか残さず、自分のすべてが一蹴（いっしゅう）される。

——それでも、勝つのは僕だ。

ヨハンは血の臭いを知っている。相手を殺すための臭いを知っている。嗅覚には絶対の自信がある。加えてこちらにはダリオがいる。あの無力な男は、しかし目の前の屈強な黄昏種（トワイライツ）よりもさらに、死に様を想像できない。血の臭いを嗅ぎわける自分と、幸福と不幸を嗅ぎわけるダリオとがいたなら、きっと誰にも敗れはしない。

あの恐ろしいニコラスの、恐ろしい臭いが近づいてくる。彼の汗には生命力が溶けだしている。左足のふくらはぎと左肩からは血の臭いがする。足の方は軽い怪我ではないはずだ。現にそちらの発汗量が多く、体温が高い。だが彼自身にそれを気にした様子はない。目の前で筋肉が躍動し、鉄の臭いが迫ってくる。

ヨハンは左手に絡（から）めていたワイヤーを引いた。水気を含んだ木製のクローゼットのかびた臭いがニコラスを横から打つ。彼はどうやらこの闇夜（やみよ）で、細いワイヤーが見えているようだ。刀が正確にワイヤーを切断する。それはヨハンの耳のすぐ隣で起こったが、気に留めず、次の攻撃に移る。

相手の懐（ふところ）に飛び込むようにして、コンバットナイフを首へ。どんな反射神経なのか、ニコラスもまた同時に身を沈めてそれを回避している。だが筋肉の動きまで感じ取るヨハンは彼の動きを知っていた。ナイフを手放し、もう一方の手でハンドガンを低い位置にある彼の顔に合わせる。ニコラスは、驚異的なことだが、自らさらに銃口に近づいた。ほとんど抱きかかえるようにした刀の柄（つか）でハンドガンを叩く。ヨハンは引き金を引いている。真下を向いた銃口から鉛玉が飛び出す。破裂音がふたりの顔を下から打つ。

選択を間違えた。頭ではわかっていた。引き金を引いてはならなかった。銃口は逸らされるとわかっていたのだから。一秒以下だとしてもその無駄な行動で相手にアドバンテージを渡した。その一瞬を稼ぐために、あえて銃口ににじりよってみせたのだとしたら、やはりこの男は怪物だ。ほんの僅（わず）かにタイミングがずれていたなら鉛玉は彼の眉間（みけん）にめりこんでいた。死の足音まで聞こえないとでも言うのか。

相手に奪い取られた一瞬でヨハンを襲ったのは刀でも拳（こぶし）でも足の裏でもなかった。岩のような額が鼻先にぶつかり、閉じた視界に火花が散る。勢いを殺すため、ヨハンは後ろに倒れる。空を見上げる形になったが、足元のコンクリートで跳ねるナイフのことは知っている。空中でその柄を掴み、真下から目の前の首筋へと振り上げる。怪物は刀の柄の底でそのナイフを簡単に受け止めてみせる。彼の両腕の筋肉がさらに膨張するのがわかる。抑えきれず、手の中からナイフが弾け飛ぶ。刀の柄はそのままヨハンの頬にめり込む。ヨハンの左手はハンドガンを握ったままだ。ほとんどゼロ距離でそれを撃つ。ニコラスは咄

嗟に身を捻る。彼の左脇（わき）を弾が掠める。致命傷ではない。重症と呼ぶこともできない傷。だが一歩前進した。彼の血の臭いが濃くなった。

怪物がその程度で立ち止まるはずもなく、目の前で倒れているヨハンに向かって刀を振り下ろす。しかし銃弾を避（よ）けてバランスを崩していたおかげだろう、どうにか転がって回避に成功する。転がる勢いのまま、弾かれたナイフを摑もうとしたが、両足で立っているニコラスの方が当然有利だ。

ヨハンは転がりながら、ひと握り程度の鉄筒を落とす。手榴弾（しゅりゅうだん）の模造品みたいなもので安定しないが、今回は上手（うま）く破裂してくれた。耳を突く爆音に乗って立ち上がり、闇雲に銃を撃って牽制（けんせい）する。一瞬、臭いが飛んでニコラスを見失った。そのあいだは不意に死んだとしても不思議ではなかったが、どうにか生きたままナイフを拾い上げることができた。派手な爆発で気分が高揚したのだろう、ダリオが手を叩いて喜んでいる。

再び戻ってきた臭いを辿（たど）り、ニコラスに向かってナイフを構えながら、ヨハンは内心で安堵（あんど）する。

——やっぱり、運がいい。

怪物とこれだけやり合って、まだ生きている。身体が動く。爆発はニコラスよりもヨハンに近いところで起こったが、四散したガレキで負った傷はニコラスのほうが多いようだ。そもそもあのガラクタがきちんと爆発したことが幸運で、そうでなければすでに首が跳ね飛ばされていただろう。これまでの交戦で彼に与えた傷は、偶然左半身に偏（かたよ）っている。彼が左利（ひだりき）きだということはわかっていたし、身体のバランスが崩れるといかに戦いづらいのか、ヨハンは身をもって知っている。

これもダリオの力だろうか。幸運の女神にしては悪臭にまみれているけれど。少なくとも彼は嗅ぎ分けたのだ、今夜ならこの怪物に勝てる、と。だからヨハンに、ニコラスへの攻撃を許可したはずだ。

ニコラスのヘッドバットを受けた鼻と、柄で殴られた頬がじんじんと痛んでいた。痛みをやり過ごすのには慣れているが、衝撃で脳が揺れたのか、少し気分が悪い。これまでどおりに怪物の攻撃に対応できるだろうか——そう考えたけれどニコラスは、少し距離を置いたまま動かなかった。ただ笑っているだけだ。こちらを休ませようとしているのだと、なんとなくわかった。彼の余裕もまた、幸運と呼べなくもない。

ヨハンはそれを甘んじて受け入れ、ふうと息を吐く。

少し目を開くと、夜は意外にまぶしかった。雲の切れ目から光が射（さ）しているようだ。さすがにヨハンにも、月光の匂（にお）いはわからない。

ニコラスは人差し指を、くいくいと何度か曲げた。

——そろそろ良いか？　良ければかかってこいよ。

そう言われているのだとわかった。

確かに脳に残っていた衝撃は、ずいぶん緩和されている。火薬の臭いも多少和らぎ、情報がクリーン

に伝わってくる。
　最後に、ほんの短い時間、ヨハンは視線をぼろぼろのソファに向ける。ダリオに、ではない。その隣で軽薄にほほ笑み、ウィスキーを傾ける男に。
　ウォリック。彼の首元にはあの、翼を模したネックレスが吊（つ）り下がっている。どんな相手であれ、ソフィアがあのネックレスを手放すとは思えなかった。実際に、そのネックレスに染（し）みついた彼女の匂いは弱り切っている。
　殺意が一瞬、彼に向く。
　だが、順序を間違えてはならない。まずは目の前の怪物からだ。
　前方からは殺気がひどく臭っている。
　犬は行き先を鼻で辿る。

　ヨハンと目が合ったのを、ウォリックも気づいていた。
　彼の殺意が自分に向いたのも、もちろんわかった。
　ウォリックはひゅうと口笛を吹く。黄昏種（トワイライツ）に睨（にら）まれるのは、やはり恐ろしい。
「彼とは、長いの？」
　尋ねるとダリオは、フィルターだけになったガラムを足元に落として首を傾（かし）げる。
「そうでもねぇよ。一年か二年か。詳しいことは向こうに訊（き）いてくれ」
「へえ、意外。一〇年やそこらはつるんでるんだと思ってたよ」
「あいつは言ってみりゃ、生まれたてみたいなもんなんだよ。ろくに人間扱いされずに育ったからな。まともに話ができる相手が見つかったなら、すぐに懐（なつ）くさ」
「お前のほうは？」
「あん？」
「ヨハンちゃんをずいぶん可愛（かわい）がってるみたいじゃない。どうして？」
　きっとダリオは忘れたと答えるだろうと思った。本当なのか嘘なのか、とにかく適当にはぐらかすのだろう、と。

　でもそんな様子でもなかった。
「友情に理由がいるかい？」
「いるとか、いらないとかじゃないでしょ。なにかはあるもんだ」
「そうかもな」
　ダリオはオールドパーに口をつける。
「あっちでもこっちでも、くそったれな馬鹿どもが、くそったれな馬鹿をやってんだ。それでオレは、腹が一杯になっちまってよ。わかるか？」
「わかんないねぇ」
「その方がいい。とにかくよ、腹が減ってると、満腹になりたいだろ？　同じでよ、満腹になっちまうと、腹を空（す）かしてる奴（やつ）に憧（あこが）れるのさ」
　ダリオの言葉の意味は、ウォリックにはわからない。共感できると言うのは簡単だが、適当に頷いて良いことでもないような気がした。彼はきっと、自らの命を投げ出すと決めた理由について語っている。
「お前はどうして、満腹になったんだろう」
「それが上手く思い出せねぇ。オレの頭は優秀でよ、つまらないことはみんな忘れちまうんだ」
「ああ。それは、お前の数少ない特技だよ」
「だろう？　結構、便利なんだよ」
「でも不便なこともある」
「そんな時は、弟に訊く」
「よくできてるな」
「コンビってのはそんなもんだ」
　ウォリックがショットグラスを呷（あお）り、そこにダリオがオールドパーを注いだ。酒瓶はすでに半分ほどになっている。
　ダリオは自分のショットグラスに口をつけて、笑う。
「それにしても美味（うめ）え酒だな。今夜はいい夜だ」
　友人と酒を飲むのにも、友人と別れるのにも向いている、と彼は言った。
　ふたりの目の前で血が吹き上がったのは、その直後だった。

ヨハンが視線を、あのネックレスからニコラスに戻すと、彼は、落胆したような表情を浮かべていた。それまでの楽しげな笑みが嘘のようだった。

本能的にその理由を理解する。

一瞬でも殺意を、目の前の怪物から逸らしたからだ。その生ぬるさを彼は咎めているのだろう。

――ごめんなさい、ニコラス。

心の奥で、ヨハンは謝る。

あなたの楽しい時間を壊してしまってごめんなさい。あなたと同じ、純粋な獣ではなくてごめんなさい。

――でも僕には、僕の幸福があるんだよ。

ソフィア。彼女さえいれば、それで満たされる。

ヨハンは弾倉が空になるまで、ハンドガンの引き金を絞った。一発がニコラスの肩をわずかに掠め、あとは躱され、あるいは刀に弾かれた。撃ち終わると同時に二本のナイフを投擲する。それを追いかけてヨハンも走る。手元に残った武器はコンバットナイフとワイヤーが一本ずつだけだ。

目を閉じて、ただ駆ける。

――殺意を純化させろ。

そう自分に言い聞かせる。

放たれた一本のナイフのように、一発の弾丸のように。目の前の怪物のように。次のひと振りで致命傷を与える。そう信じる。

奴を殺す。必ず殺す。次のひと振りで殺す。今だけはソフィアさえ忘れる。ほんの一瞬でも目の前の獣と同じ純粋な狂気に身を委ねる。研ぎ澄まされたひと振りの殺意になる。

――そう、信じられたなら。

ニコラスが投げナイフの二本を躱し、こちらに向かって刀を構える。

――信じられたならきっと、この怪物だって騙せる。

投げたナイフの一本には、ワイヤーを巻きつけていた。それが伸び切ったところで手繰り寄せる。ニコラスの背後で空を切る音。

――僕は純粋な殺意だ。純粋な殺意という、フェイクだ。

もしもあの怪物が聴覚を持っていたなら、あるいは気づけたかもしれない。だが彼はじっとこちらを見ている。今は笑ってもいない。目を閉じていてもわかる。迫る怪物に、偽物(にせもの)の殺意(さつい)で染(そ)めたコンバットナイフを突き出す。怪物が刀を振る。

ふたつの刃がぶつかる直前に、その背後から、細いナイフが突き刺す。

思い描いた、通りだった。

ニコラスの刃がわずかに鈍り、それをコンバットナイフが回避する。先端が彼の喉(のど)に突き刺さる。そうヨハンが確信した、直後。

ナイフに感じたのは、喉の皮よりも固いものだった。背中を投げナイフに貫かれたニコラスが、さらに右腕を、コンバットナイフに差し出していた。

──ああ。これが、本物の怪物か。

背後から刺しても止まらず、正面から刺しても止まらない。血を流しても流しても微塵(みじん)も衰えない、本物の狂気か。

彼の腕の肉を裂いて骨に当たったコンバットナイフを、ヨハンは引き抜こうとした。だがそれはぴくりとも動かなかった。強靭(きょうじん)な筋肉に絡めとられているのだとわかった。仕方ない。ヨハンは最後の武器から、手を離した。

老人の右手を握りしめ、血の臭いを巻き散らすそれに拳をぶつける。衝撃はそのまま拳に跳ね返ってきた。素手での格闘も訓練していたが、手首がぐきりと曲がった。次は幼いままの左手。それはナイフが刺さったままの彼の右手に受け止められ、握りつぶされる。

あまりの痛みに目を開いた。

涙でゆがんだ視界で、怪物が笑っていた。

「こぉれでぃ、じぇんぶぅ、こぉあした」

初めて聞く、怪物の声。

彼がなんと言ったのかはわからなかった。

理解できたのは自身の首筋に刀がめり込み、そこから血が吹き上がっていること。でも、もうその臭いも感じられないこと。

崩れ落ちたヨハンの身体から、どす黒い血が広がる。
その臭いはさすがにウォリックにもわかった。嫌な臭いだ。
全力で遊びまわったニコラスは、壁に寄りかかり呼吸を整えている。最後に刃を受けた右腕からはだらだらと血が流れている。もっと楽に勝つこともできただろうに、やりすぎだ。相棒には、相手に合わせる悪癖がある。
ダリオはついさきほどまでヨハンだったものを、じっと眺めたままグラスを傾けていた。その顔のどこを探しても、悲壮感は見つからなかった。楽しげにほほ笑んでさえいた。
彼のグラスが空いたのを見て、尋ねる。
「もう一杯、どう？」
ダリオは首を振る。
「いや、小便がしたくなるといけねぇ」
「まだ宵の口だ」
「もう今夜のぶんは、充分楽しんだよ」
「そうかい」
もう少しこの男と話していたいと思ったが、適切な話題は見つからなかった。
ウォリックはコルト・ガバメントを抜き、ダリオのこめかみに当てる。
「賭(か)けのことは、覚えてるか？」
「いや。忘れちまったな」
唇をめくりあげて、ダリオは笑う。
「向こうでヨハンに訊くよ。あいつは優秀なんだ」
「大事にしろよ。お前には勿体(もったい)ない弟だ」
「ああ。まったく」
ダリオはガラムの箱をのぞき込んだが、すでに空だった。甘い香りだけがほのかに漂って消える。ウォリックがポールモールを勧めて、彼はそれを手のひらで断った。
「じゃあな、友達(フレンド)。お別れには良い夜だ」
「バイバイ、友達(フレンド)。お前の弟と、あのいかしたビビッド・ヴァイオレットによろしく」
引き金を引く。
馬鹿みたいにうるさい音が鳴った。
それはどこか、この男の笑い声にも似ていた。

ウォリックはコルト・ガバメントをホルスターに仕舞う。それからソファに倒れた男の、笑ったような半開きの目に手を当て、瞼を閉じる。おやすみはレディにかける言葉だ。代わりに、お疲れさんと呟いたけれど、彼からの返事はなかった。

ウォリックはショットグラスに残っていたオールドパーを飲み切る。それからポールモールに火をつけて、煙の行方を追ってから目を閉じる。

ダリオは最後まで捉えどころのない男だった。少なくとも友人なんかではなかった。それでももう一度くらいなら、一緒に酒を飲んでもよかった。もう一度くらいなら、あの最悪のヴァイオレット・モンスターの助手席に座っても。あるいはもう一度くらいなら、彼に友達と呼びかけても。そう考えて、やめる。

目を開くと、ニコラスがこちらに歩み寄ってくる。

『終わったか？』

彼がそう手振りで示して、ウォリックは頷く。

「だいたい、どっちもね」

死んだ女とマフィア組織、ふたつの依頼ともこれでおしまいだ。

ウォリックはソファから立ち上がり、ヨハンに歩み寄る。傍に立って彼の顔を見下ろす。その表情は、想像したほど悲痛なものではなかった。幸せな夢を見ながら眠る子供のようだった。

首筋をしめつけていたネックレスを外し、しゃがみ込んで、彼の手に握らせる。鎖によりかかった翼なんてものに、こいつは命を賭けたのだろうか。安っぽいそれは、ようやく雲の切れ目から月が出たというのに、ろくに輝きもしなかった。

『報酬だろ？』

ニコラスが、興味なげに手振りで示した。

もちろん、とウォリックは頷く。

「でも、こんな可愛らしい女物を家に置いてたら本職の仕事が減っちゃうでしょ。どう見ても安物だし、割に合わない」

『結局タダ働きかよ』

「日頃のおこないってやつじゃない？　こんな夜もあるよ、相棒」

ニコラスは、ウォリックの軽い口調に不快そうな顔こそしたが、別段、不満そうではなかった。彼にとってはネックレスひとつなど、はなからどうでもいいのだろう。

四方を壁に囲まれた狭苦しいエルガストルムでは、少し歩けば厄介事にぶつかる。それが幸運か不運かは知ったことじゃない。今回はたまたま、はずれくじを引いたというだけだ。

幸運を嗅ぎわける鼻はウォリックにはない。肩をすくめ、ツイてないね、といつもどおり、仕事用の使い

古した微笑を貼りつけた。

Epilogue

厄介事は最後まで厄介なもので、さらなる厄介をまるで輪飾りのように連ねて引き寄せる。要するに、ふたつの遺体の後始末が残っていた。それらはモンロー組（ファミリー）に納める約束だ。

とはいえ、まさか喉（のど）や額を真っ赤に染めた死体をおんぶして帰るわけにもいかない。

ウォリックはとりあえず、スーツをより一層派手に模様替えしたナイスガイが眠っているソファに腰かけ、ボトルに残っていたウィスキーを飲んでいた。ショットグラスを一杯空けるころに、一台の車が廃棄場の入り口に停まった。今は真夜中で、ここは裏通りだ。静寂の中に響く音でだいたいわかっていたが、古めかしいセダンだった。

街のお掃除屋さんの登場だ。

老いた清掃係は車から降りると、ポケットに片手を突っ込みながら、ふてぶてしく近づいてくる。ウォリックはグラスを脇（わき）に置いて立ち上がり、笑顔を向ける。

「やあチャドさん、残業は老体に応（こた）えるね」

「てめえが言うんじゃねえよ。ったく誰のせいだと思ってんだ」

「さあね。少なくとも、俺じゃない。それにチャドさんにこの死体を掃除して貰（もら）うわけにもいかない」

よくあるゴロツキの愛情表現よりは少しだけ派手に騒いだから、この鼻の利（き）く老犬がやってくることは予想できていた。面倒な報告は彼に押し付けてしまおうという魂胆だった。

チャドは肩をすくめる。

「モンロー組（ファミリー）だろ？　お前らのことは、くれぐれもよろしくと言われてる」

「そ。ちょうどよかった。こいつらがモンローさんへのプレゼントだ。包みを用意してもらえないかな？」

ウォリックが言うと、チャドは腰に手を当て、心底面倒くさそうな顔をした。

「頼むよパパ」

「うるせえクソガキ」

『頼むよパパ』

チャドが振り返ると、ニコラスが舌を出している。チャドのげんこつが放たれる。ニコラスは身軽にかわす。それでチャドが懐（ふところ）の銃を抜いたので、ニコラスは慌（あわ）ててハンズアップした。

はあ、とチャドは重いため息をつく。

「包みなら、もう手配してある。あと数分もすれば、目の下に隈（くま）をつくったかわいい部下が届けてくれるだろうよ」

「そりゃありがたい。相変わらず優秀で、新人ちゃんは大変だね」

「腑抜(ふぬ)けばかりだ。入れ替わりが激しくて、名前もろくに覚えられん」

『歳(とし)じゃねえのか？　そろそろ引退を考えた方がいい』

　チャドはニコラスを睨(にら)みつけたが、今度は手を出さなかった。かわりにふたつの死体を交互に見る。

「プレゼントはふたつだな？」

「うん。モンローさんへの贈り物だ、お洒落(しやれ)にラッピングしてね」

　うるせえ、とチャドは吐き捨てる。

「見栄(みば)えを気にすんなら、まずはそのド派手なストライプをどうにかしろ。素っ裸の方がまだましだぞ」

　言って、チャドは車に戻る。

　ウォリックは苦笑し、違いないっすね、と手を振った。

　帰り道にニコラスをテオ医院に突っこんで、かわりにふたりの遺品と、花瓶にささっていたヴァイオレットを回収した。ニナは複雑な笑顔を浮かべるだけで、なにも尋ねなかった。やはり賢くて優しい子だ。将来はきっといい女になる。ヴァイオレットの代わりに買っておいたユーストマを渡す。真夜中に売られている花なんか差し出すと彼女の値が下がるような気もしたが、ニナは素直な笑顔で受け取ってくれた。

　翌日、チャドから連絡があった。

　ラッピングを終えたふたつのプレゼントに保証書をつけたから送り届けろとのことだった。ウォリックはそこに彼らの遺品を加え、病室から引き揚げてきたヴァイオレットを綺麗(きれい)に包んで添えた。モンロー組(ファミリー)の遣いとしてやってきたマイルズは、花を一瞥(いちべつ)したが詮索(せんさく)はせず、「ご苦労だったな」とだけ言って受け取った。

　マフィア殺しの目的がたったひとりの、しかもすでに死んだ女だと知ったとき、ダニエル・モンローはどんな顔をするだろう？　想像しようとして、無意味だと苦笑する。

　今回の一件は、彼にとって特別ではない。マフィア殺しは均衡をいくらかは崩したが、既にバランスは補正された。そして本当に頭の良い人間は、どうしようもない馬鹿(ばか)がいることだって知っている。

　この街は、たった二匹の犬にどうこうできる場所ではない。彼らもそうだし、ウォリックたちも同じだ。

　タグ付きには個別の墓すら用意されない。適当な穴に、まとめて放られる。今回はふたりともそうなるだろう。そういう死に方を彼らは選んだ。結果的にはニュースの時間を数十秒奪う、せいぜいその程度が、彼らの死によって生まれた最大の変化だ。

　振り返ってみれば便利屋にとっても、大した出来事ではない。

　ただ普段よりも少し長く、女にベッドを使わせた。ほんのわずかな期間を風変わりなふたり組と過ごした。小柄な男のほうは絶望的にセンスがなく、多くのことを忘れる。綺麗な顔の青年は臆病(おくびよう)で、少しだ

け自由を知っている。それだけ。

彼らとのすべてをウォリックはひとつも取りこぼすことなく覚えているが、そこに特別な意味はない。廃棄場に並んだ家具のレイアウトと、情報の価値は変わらない。

気づけば空気の湿り気もいくぶんましになっている。あと数日もすれば、犬の臭（にお）いも消えるだろう。

マイルズから受け取った報酬で、ウォリックは花をもう一束買った。少しだけ悩んで、ピンクのチューリップを選んだ。幼すぎるかとも思ったが、彼女はこれくらいのほうが喜ぶような気がしていた。なにより、香りが大人しいのがいい。

その花を、裏路地と同じようにこの街の淀（よど）みを受け入れる、共同墓地に供えた。

目を閉じて依頼の結果を報告すると、ウォリックはやっと今回の一件から解放された。

事務所に戻り、もう今日は働かないぞと決意する。

まずはゆっくりとシャワーを浴びて、もうウォリックにはわからない血や香水やその他の臭いを洗い流した。バスルームを出ると、鏡に首の下の傷が映った。ずいぶん薄くなっている。すでに存在を知らなければ気がつかないほどで、一週間もすれば跡も残らず消えるだろう。

身体（からだ）を拭（ふ）いて、着替えを終えたとき、ちょうど電話が鳴った。

ウォリックはジャケットに袖（そで）を通しながら、速足で家を出る。

「ったく、こちとら昨日の今日で疲れてるんだから、気を遣ってくれてもいいのにねえ」

『働かねぇんじゃなかったのかよ？』

横では、包帯でぐるぐる巻きになったニコラスが、不機嫌そうに手振りで示した。

「ヨエルばあちゃんからの依頼だ。タバコの値段が上がっちゃったらどうすんの」

と、ウォリックは困ったような笑みを浮かべる。

『またかよ』

「懲（こ）りないよねえ」

『だから、斬（き）りおとしゃいいって言ったんだ』

「まあそう盛（さか）りなさんな。俺らにゃ大切な収入源でしょ。終わったらなんか美味（うま）いもんでも食おう」

『それよりも提案がある』

「なんだよ？」

『今回も報酬の回収は任せてくれ』

そう言うと、ニコラスはにぃと唇の端を上げ、地面を強く蹴（け）った。ウォリックには追いつけない速度で、と

んとんと跳ねるように先を行く。
「あ、ちょっと相棒！　また抜けがけ？　そゆのってナシよ」
『お前が遅えの。ゆっくりこいよ』
　腰の刀を上下にぴょこぴょこと振る子供っぽいニコラスに、ウォリックは頭をかいて走り出す。
　途中、視界の端の裏道に、痩せこけた野良犬が座り込んでいるのを見かけた。その姿に一瞬だけ、あのハイセンスな車のボンネットがフラッシュバックする。
　ウォリックの頭は、あらゆることを忘れない。コミックみたく大げさに笑ったまま壊れた犬の表情も、その持ち主の男が最後に見せた歪な笑みも、鮮明に覚えている。野良犬を見るたびにあれが目の前をちらつくのかと思うと、つられて少しだけ笑えた。

本書は新潮文庫のために書き下ろされた。

カバー装画　コースケ
カバー・本文デザイン　石川照美（ARTEN）

の作品は平成二十七年八月新潮文庫より刊行された。

子書籍化に際しては同年同月発行の第二刷を底本とし、仕様上の都合により適宜編集を加えた。

GANGSTA.（ギャングスタ） オリジナルノベル

016年1月29日
端（っぱた）ジュン一（いち）
ースケ
左藤隆信
朱式会社新潮社
162—8711
京都新宿区矢来町71
L: http://www.shinchosha.co.jp